

青
7
CHEONGHAK
鶴

青
鶴

7

卷頭言

公益財団法人韓昌祐・哲文化財団 韓昌祐 理事長

昨年の二〇一五年十二月一九日に、最初に作った（財）韓国文化研究振興財団の創設から二十五周年を迎えた。二十五年前に、なぜ財団法人を作ったのか？

世界どこへ行つても、隣国と仲の良い国はないもので。日韓両国にとつて戦前の三十六年の植民地期は不幸な時代であつたけれど、それは朝鮮と日本の長い歴史から見ると、ほんの一齣です。

過去の暗い凄惨な事件をほじくり返しても、両国は先には進まない。一衣帶水の日本と韓国は、もつと明るい未来を見据えて、友好関係になるような歴史を見出そうという趣旨で、財団法人を設立したのです。

一九九〇年に、慮泰愚大統領が来日した時、宮中晩餐会で、江戸時代中期に対馬藩に仕え朝鮮王朝との通商実務に貢献した雨森芳洲の逸話をしました。釜山の倭館で朝鮮語を学んだ雨森芳洲は、「誠信と申し候は互いに欺かず、争わず、眞実を以て交わり」という「誠信の交」を説いた。この雨森芳洲に最初に着目したのが、（財）韓国文化研究振興財団の先生方でした。

歴史に光と影はつきものです。約四二〇年前、豊臣秀吉が朝鮮半島を二度侵略した。当時、強制的に日本に連れられた医師、陶工、土木技術者など民間人は六万人とも七万人ともいわれている。ただ、戦いの傷跡だけでなく光の部分を見ると、朝鮮系の

末裔から日本の政治、文化に寄与した逸材を輩出しています。

代表格は太平洋戦争開戦時と敗戦時に外務大臣を務めた外交官の東郷茂徳です。民族名は朴茂徳。朝鮮人陶工の子孫で、日本の終戦工作に奔走した平和主義者でした。また有田焼の陶祖と知られる李參平は、日本で初めて白磁を作つたといわれています。それがドイツのマイセンの製品に絶大な影響を与えた。そして薩摩焼の沈壽官家も、代々薩摩の地産地消に貢献した人々です。

こうした史実を知ると、日本と朝鮮は切つても切れない深い関係と歴史がある。隣国同士だからこそ、悲惨な過去は決して忘れるることはできない。しかし、過去の出来事は許すことができる。歴代の韓國の大統領はそう考えてきた。ところが近年、何かあると繰り返し暗い過去を持ち出すようになっています。

今こそ思い出さなければならないのは、一九六三年にフランスとドイツで制定した「エリゼ条約」（仏独協力条約）です。ナチスの狂気と人種差別によってフランスもドイツも破滅と苦難を経験した。隣国同士の歴史関係は複雑だったにもかかわらず、ゴール元フランス大統領、アデナウアー元西ドイツ首相の長期的展望に立つた勇気と英断で「エリゼ条約」を交わした。制定後、両国の首脳、閣僚が率先垂範してお互いの国を訪問するようになる。一九六三年にフランス・ドイツ青少年事務所を設立し、七五〇万人もの若者がお互いの国を知るようになる。一九九七年には両国の一八〇の大学が参加して、「ドイツ・フランス大学」が設立されるまでになる。

私たちは善隣友好だつた雨森芳洲と朝鮮通信使の時代を思い出し、日韓の発展のために「エリゼ条約」から多くを学ぶべきでしょう。十六歳で日本に渡つて六九年になりました。日韓両国がお互いに仲良くなつていくことだけを願つています。

- 卷頭言 韓昌祐** 2
写真集『青鶴——存在する夢』より 柳銀珪 6

公益財団法人 韩昌祐・哲文化財団 第七回助成金受贈者それぞれの道

齋藤徹 音楽家
志高く玄界灘を越え世界へ 10

中沢けい 作家／K—I文学振興委員会代表
日韓子弟で推進する韓国文学へのいざない

内藤陽介 郵便学者／成城大学文芸学部非常勤講師
郵便資料で読み解く朝鮮半島の現代史 42

郷司泰仁 公益財団法人 香雪美術館学芸員
日本が守り伝えた高麗仏画を追いかけて 60

大熊廣明 筑波大学名誉教授／筑波大学体育・スポーツ史研究会代表
アジアを源流に、日韓で育まれたスポーツ史を研究 42

李允希 『話してみよう韓国語』東京・中高生大会2014実行委員会代表／東京成徳大学人文学部国際言語文化学科教授
若い世代の夢を育む韓国語教育を 76

朴敬玉 学習院女子大学非常勤講師／一橋大学大学院特別研究員
「子供たちに笑顔を」モットーに韓弓普及 92

- 韓希姪** 京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻博士課程修了
巨大な朝鮮仏画の伝統を受け継ぐために 108
- 上野密** 全国肢体不自由児者父母の会連合会常務理事・事務局長
「子供たちに笑顔を」モットーに韓弓普及 124
- 朴敬玉** 学習院女子大学非常勤講師／一橋大学大学院特別研究員
移動の民、朝鮮族の視点で見る東アジアの未来 140

青鶴学術論文集

- 切手・郵便物で再構成する朝鮮戦争 160
 郵便学者／成城大学文芸学部非常勤講師 **内藤陽介**
- 「日本語で読みたい韓国の本——おすすめ50選」ブックカタログ事業報告 208
K—BOOK振興会
- 日韓体育・スポーツ交流史年表 232
 筑波大学名誉教授／筑波大学体育・スポーツ史研究会代表 **大熊廣明**



青鶴洞

(チョンハクドン)

青鶴洞とは、古くから朝鮮半島に伝わる理想郷のことです。神仙が青い鶴に乗って遊ぶ地上の楽園、そこは世俗のいかなる混乱とも隔絶した平和な村として朝鮮民族の心に伝承されてきたユートピアです。

写真：柳銀珪

朴 敬 玉
上 野 密
韓 希 妪
李 允 希
大 熊 廣 明
郷 司 泰 仁
内 藤 陽 介
齋 藤 徹
中 沢 けい
内 藤 陽 介

公益財團法人
韓昌祐・哲文化財團
第七回助成受贈者
それぞれの道

志高く玄界灘を越え世界へ



齋藤徹 音楽家

前衛のフリー・ジャズから音楽活動をスタートさせたコントラバス奏者の齋藤徹。邦楽、さらに韓国の中シャーマン音楽との出会いが、大きな転機となつた。そこには祝祭空間を創り出す、人々の祈りと生きることへの内なる問いかけがあつた。

今、齋藤はあるジャンルのアーティストと舞台に立つ。深いまなざしが、ユーラシアの文化を豊かに繋いでゆく。

文＝村尾国士
写真＝菊地健志



さいとう・てつ◎1955年生まれ。上智大学外国語学部英語学科国際関係副専攻卒業後、コントラバス奏者として演奏・作曲活動を始める。フリージャズ、即興演奏、邦楽、韓国の伝統音楽との共演、さらにダンスや美術などと積極的に交流。2013年、日韓欧のアーティストが共演する「ユーラシアエンコーズ」を開催。

ジャンルを横断してアートを繋げる

2015年11月下旬、齋藤徹は4人のコントラバス奏者を率い、フラメンコダンス公演のステージに立っていた。ダンサーはギターの音に乗り汗をほとばしらせながら激しく踊るかと思えば、ぴたりと静止し何かを探し求めるように両手を差し出す。それに応じ、ロマ族の魂が込められたような野太く豊かな声の歌が響き渡り、地を這うようなコントラバスの音色がからむ。踊り、歌、音楽が互いに呼び合い、対話し合いながら新たな空間を創り出す。単なる共演というより、魂の協演とでも呼びたいようなステージだった。

都内で開かれたこの公演の1週間前まで、齋藤は1か月にわたってドイツ、フランス、さらにその10日前は沖縄と、演奏の旅を続けていた。どれもダンスや芸能との協演である。

「舞踊・演劇・音楽・映像・詩・書・邦楽・雅楽・能楽・西洋クラシック音楽・現代音楽・タンゴ・ジャズ・ヨーロッパ即興・韓国の文化・アジアのシャーマニズムなどさまざまなジャンルと積極的に交流」齋藤のプロフィールにはそう書かれている。本業はコントラバス奏者・作曲家だが、それにはとてもおさまらない。クロスオーバーは音楽ジャンルの異なる者同士が共演し新しい音を生み出すことを意味するが、そこからもはみ出している。ありとあらゆる分野のアーティストと同じステージに立ち、観客の想像を超える芸術空間を創り上げる、いわばクロスアート。齋藤自身が主宰する音楽レベルの名もtravessia、ジャンルの垣根を横断し、橋として繋げる音楽家なのだ。



「嘘をつきたくないから、音楽を選んだ」

齋藤徹は異端・鬼才の冠つきで評されることが多いが、本人は実に温厚で誠実、言葉を選びながら訥々と語る姿は哲学者ふうで、音楽の道へのスタートからして哲学的である。

上智大学外国语学部英語学科に学び、国際関係を副専攻した。「韓国を知らなければ日本はわからぬ」と考え、第2外国語に韓国語を選んだ。韓国の歴史や文学を学び、1978年の夏休み、初めて渡韓した。軍事独裁政権下で戒厳令が敷かれていたソウルを歩いた。帰国し書いた卒論「日韓近現代史を通して考える」をゼミの担当教授が高く評価、「これを形にして大学院で研究を続けなさい」と勧めた。戦後を代表する社会学者・鶴見和子である。しかし齋藤青年は、鶴見の勧めに首を横に振った。

「文章を書いていると、何か嘘をついている気がするんです。それが嫌でしたね。嘘をつけないものをと考え、選んだのが音楽」

小学生の頃、ピアノを弾いていた。「習い事程度」だつたが、練習を怠ると指が動かない、その感覚が体に残っていた。つまり嘘をつけない。だから音楽の道を、というのは、人生の方向を決める時期の選択としては極めて稀だろう。人としての志が高いのだ。この志の高さを齋藤は、以後の音楽家活動で貫いている。

楽器をコントラバスに決め、数人の指導者についてクラシックとジャズを修得した。

「まもなく演奏活動を始めましたが、自分の生き方として音楽を選びましたから、うまいミュージシャンとして有名になりお金儲けるという考えはまったくなかつたですね。音楽とは何かを常に考え、



フラメンコダンス公演の稽古。4人のコントラバス奏者とともに。

「フラメンコから少し逸脱」するダンサー森田志保と。コントラバスを弾いたり叩いたり。





自分にしかできないことをやる、そのため、作曲も手がけました」

自分を表現できる音楽としてジャズ、ことにフリージャズや即興演奏に没頭した。前衛音楽家としてのスタートである。どこのグループにも属さず気の合う仲間と各地で演奏した。海外での演奏も増えたが、30歳を前にしたとき、アメリカ・アトランタで最初の転機を経験する。演奏会のあとの一パーティで、アメリカ人の中年女性から「日本人のあなたがなぜ、西洋の楽器でジャズをやつてるの？」と質問された。意表をつかれ齋藤は返答に窮した。

「その女性にすれば、ジャズを原点とする黒人が着物姿で演歌を歌う、それの裏返しみたいな感じだつたんでしようね。質問に答えられないまま、実際、なんでだろうと自問し始めたんです」

帰国した齋藤は日本の伝統音楽を知ろうと、沢井忠夫・一恵夫妻が主宰していた沢井箏曲院を訪ねた。これが幸いした。邦楽の伝統を変えるため門戸を広げていた沢井夫妻は、コントラバスで交流したいという齋藤を快く迎えてくれた。以後、雅樂能樂と交流のジャンルが広がつていった。伝統音樂とのセッションを行う齋藤に「色物」「受け狙い」という声もあがつたが、まつたくひるむことがなかつた。異質の音がぶつかることで新しいリズムが生まれ、そこに新しい和音をつけると、時代性を超えた新しい音楽が作れるという思いでひた走つた。そんな齋藤に第2の、というより音楽家として最大の転機が訪れた。

祝祭空間を創り出すシャーマン音楽

92年、韓国の伝統音楽家たちとの共演企画が齋藤にもたらされた。学生時代に渡韓したとき、韓国

音楽には何も触れなかつた。音楽家になつてからも韓国伝統音楽については知らないまま、いきなりソウルのスタジオでCD録音ということになつた。共演相手はそれぞれ巫樂・國樂・農樂ムクナクを代表する3人の演奏家である。

当時の齋藤は即興に熱中するあまり、聴衆を驚かす「効果」を追い求めていた。ビー玉を投げたり、マッサージ機のバイブレーションを弦に当たりして刺激的な音を出すなどの方法で、それが音楽の本質から離れているという自覚はあり、心の荒みも感じていた。そのときもスタジオにビー玉を持ち込んでいたが、演奏が始まつたとたん、そんなものを使う気は吹き飛んだ。3人とも強靭で瑞々しい音色を奏でたが、なかでも巫樂の金石出キンソクチルに圧倒された。金の鼓笛演奏を聴いたある人は「獸のむせび泣きを想わせる」と表現しているが、共演しながら齋藤はより本質的な部分で感動した。

「1小節のリズムのパターンでも全部意味がある。それを信じ、共演者を信じ、訥々と演奏をすることで場をつくる。音楽は自己表現の手段じやなく、内なる問いかけだという最も大切なことを教えられました。効果ばかり追つていた僕にとっては救いでしたね」

金石出は韓国の被差別民巫俗ムクのシャーマンで、その音楽には譜面もなく家族世襲で伝えられる。この巫樂が韓国伝統音楽の源であり、国樂も農樂もそこから生まれたのだが、被差別民ゆえに、それで3者がそろつて演奏することはなかつた。日本人の齋藤が入ることで共演が実現したのだ。金に傾倒した齋藤は、巫俗の祭祀である「クツ」にも参加、村々の祭りで人々の願いをかなえる祝祭空間をみごとに創り上げる様を目の当たりにした。

金石出との出会いがきっかけになり、92年7月、齋藤は「ユーラシアン弦打工コード第1章」と題するコンサートを東京で開催した。金一族のシャーマン音楽家、韓国伝統音楽の若手演奏家たち、さ



10年間何も反応しなかった自閉症者が、齋藤の奏でる音色に声を。

らに沢井一恵をはじめ日本の伝統音楽家、コントラバスやギターが同じステージに立つ画期的なコンサートだった。さらに95年、齋藤は代表曲とされる「ストーンアウト」を作曲した。stone=石、out=出という命名からわかるように、金石出への感謝の思いを込めた曲である。

金から得たものはそれらにとどまらない。齋藤は日本の劇団の音楽監督や、舞踏グループのワークショップを務めるようになった。またマレーシアのシャーマン音楽家との共演、ヨーロッパでの演奏活動、さらに国内外ダンサーとのコラボレーション、美術や書とのライブなど、活動の場を格段に広げていった。「アートを繋げる橋」という自らの役割を見出したのだ。ともにステージに立つ演奏家の音を「聴く」、ダンスを目で「聴く」、それは「待つこと」であり、「信じること」、そこから自分の知らない「自分」も出てくる——高い志に支えられた齋藤独自の音楽哲学が、こうして確立されていった。

日韓で閉じることなく、世界へ

前出の「ユーラシアん弦打エコード」は「第1章」と名づけられていた。それから21年後、齋藤は現在の視点で問いかける。「ユーラシアんエコード第2章」公演を企画した。東洋経済日報（2013年8月2日付）に齋藤が寄稿した文章の一部にこうある。

『ユーラシアんエコード』と名づけたのは、単に日韓2国間関係で閉じたくなかったからです。ユーラシア大陸の東に位置する2国としてより大きな視野で見てみたいという望みでした。今回はビナ・ハウシュ舞踊団のソロダンサー、ジャン・サスポート（仮）が参加しますので、その狙いはより具体化されます。／私たちはもはや単なる『日韓音楽の出会い』では満足しません。『違い』こそを糧



齋藤徹の音楽活動の中で見逃せないものがある。3・11の東日本大震災直後、齋藤は被災地に駆け

弱者への優しく深いまなざし

「今までの方向、方法がまちがつていなかつた、そう確信できました」

21年前は「音楽で玄界灘を越えたい」という思いで、日韓の演奏家だけでのステージだつた。今度はそれに加え、韓国・フランスの踊り手も招く企画である。彼らを招聘する費用など多額の資金が必要であり、齋藤は（公財）韓昌祐・哲文化財団の助成に応募し、申請が認められた。

2013年8月8日、都内で「ユーラシアンエコーズ第2章（日韓欧の響き）」が開催された。第一章に参加した元一ら若手演奏家たちは、21年の歳月を経て音楽大学教授などになり、韓国伝統音楽を担つていた。彼らの他にも韓国や日本の演奏家が加わり、同志・沢井一恵は弟子たちを引き連れステージに上がつた。そして踊り手のジャン・サスボータス、南貞鎬、総勢13人のコンサートとなつた。曲目は齋藤の「ストーンアウト」。長い組曲で時に優しく、時に激しい音色が交錯し、踊り手は音色をまとうように踊つた。コントラバスをかかえた齋藤は舞台端で、全体を見渡しながら演奏していた。

先の齋藤の文章にあるように、それは日韓という枠をはるかに超え、人間が共通して持つ深い記憶を呼び起こすようなコンサートだった。韓国でもこれが評判になり、翌年、齋藤と沢井が招かれ、ソウルの国立劇場大ホールでも演奏した。長年の音楽活動の集大成ともなつたコンサートを振り返り、齋藤はきつぱりと明言する。

にして、日韓を飛び越えた音楽、ダンスを世界に発信したいのです」



財団助成による2013年「ユーラシアンエコーズ第2章」。
日韓欧13名のステージとなった。(写真提供／齋藤徹)

自宅ではテレビを持たず、
夜はアントナン・アルトー
の芸術書を読み、朝はバッ
ハを弾くような生活。



つけ、避難所でソロ演奏をした。このとき「いい演奏などいらない、必要なのは歌と踊りだ」と実感し、車椅子の書家・乾千恵のコトバと共に、歌手・ダンサーを交えた「うたをさがして」グループを結成、現在にいたるまで支援活動を続けている。

また、ダウン症のダンサー・矢萩竜太郎、聾者のダンサー・庄嶋隆志との共演も長く続いている。庄嶋とのセッションが終わり、客席に頭を下げるとき拍手がまばらだった。「失敗したかな」と思いいつ齋藤が頭を上げると、場内は「拍手」を表す手話で埋めつくされていた。さらにダンサーのサス・ポータスとドイツの自閉症支援プロジェクトに関わっており、2016年5月にダンスパフォーマンスの本番を控えている。このように齋藤の志には弱者への優しく深いまなざしもうかがえる。

冒頭のフランコダンスに関連して齋藤は「韓国被差別民の音楽もロマ族の音楽も、拍子の取り方は少し違いますが、両方とも基本は12拍子なんですよ。ユーラシア大陸の東と西の端が音楽的に共通している、不思議ですよね」と語った。民族学の分野で、古代インド北西部に発したロマ族の祖は西へ移動してイベリア半島に到り、東へ向かった一団は西域を経て中国、朝鮮半島に及び、それが被差別民クグツ族の祖となつたとする推論もある。音楽家・齋藤の感性は、時空を超えてそこを捉えているのだ。

還暦前年に重篤な糖尿病を患い、自ら克服した齋藤徹は、15キロのコントラバスをかかえ、今日も世界のどこかで協演している。

（文中敬称略）

日韓師弟で推進する韓国文学へのいざない

中沢けい

作家／K—文学振興委員会代表

韓国の文学・文化をもっと日本に広めたい。

日韓文学者会議への参加を皮切りに、中沢けいは
20数年来、韓国の作家・詩人たちと幅広い

親交を培ってきた。その思いに力を得て、

翻訳出版事業を立ち上げたのが愛弟子、金承福だ。

韓国のみずみずしい物語が、日本の読者の胸に満ちていく。



写真／渡辺誠



なかざわ・けい◎1959年生まれ。明治大学政治経済学部卒。78年
「海を感じる時」で群像新人文学賞、84年に野間文芸新人賞受賞。
2005年より法政大学文学部教授。著書多数。95年から日韓文学者
会議を通して韓国の作家たちと深く交流。2011年にK一文学振興
委員会委員長に就任し、韓国文学の普及に努めている。

伝わつてくる韓国への深い愛情

日本最大の古書店街・神田神保町。そのほぼ中央のビルに、2015年7月、韓国語名の書店「チエツコリ」が誕生した。数多くの韓国関連の書籍がジャンルごとに並び、コーヒーも飲める。店内でトークライブも催されるブックカフェだが、その第1回ライブに作家・法政大学文学部教授の中沢けいが登場した。

真新しい書棚の木の香りが漂う店内、若い女性が中心の聴衆を前に中沢が語ったのは「私のおいしい韓国」。20数年前に始まつた自身の韓国との関わり、韓国の食べ物や作家たちとの交流など、話題は自在に変化した。ユーモアを交えたやわらかな口調から、韓国に対する中沢の深い愛情が伝わってくる。ことに韓国で食べた料理を自分で作るため具材から調理器具まで買い込み、さまざまな試みをした体験談に、聴衆の女性たちはしきりにうなずいていた。

時折、料理の韓国名が思い出せない中沢に、傍らから助け舟を出す女性が、この書店を経営する出版社「クオン」社長の金承福^{キムスンボク}。トークのあと、韓国料理が並ぶパーティになつた。参加者たちに囲まれた中沢は、韓国の旅や作家について質問されるつど、ていねいに答える。背後では金社長がスタッフに指示して料理を補充したり、てきぱきと会を進行させていた。

金が「中沢先生は、私の大学時代の恩師」と言えば、中沢が「金承福氏は私の韓国語の先生だけど、私は落第生」と応じ、金は「ハッハッハ」と豪快に笑う。国や世代を超えた強い信頼関係がうかがえるこの2人、いま、韓国文学・文化を日本に紹介する活動の先頭に立つてスクラムを組んでいるのだ。



韓国作家たちとの交流から得たもの

2013年8月に中沢けいは、作家の故中上健次が創設した熊野大学の夏期セミナーに招かれ、在日韓国人・朝鮮人を攻撃するヘイトスピーチや嫌韓本ブームなど、日本に蔓延するレイシズムについて語った。当時、日本の知識人たちはレイシストの言動に眉をひそめながらも目をそむけていた。中沢は「無視しておけばよい騒ぎではない」とあえて声をあげ、そのうえでこう説いた。「越えなければならぬ山」があり、日韓の人や文化の交流によつてそれは越えられる——現状に対する毅然たる姿勢と、先を見通すしなやかな感性を併せ持つ作家なのだ。

中沢は1959年横浜市に生まれ、7歳から千葉県館山市で育つた。なぜ韓国に興味を持ったのかと訊かれる度に脳裏に浮かぶ風景があると、作品集『月の桂』（集英社刊）に書いている。幼い頃、祖父の家の納戸で見つけた朝鮮の古い簪。大人の装飾品であるそれに心惹かれたという。ささやかなエピソードだが、後年の中沢が韓国の奥深い美に惹かれていくことを思い合わすと示唆的である。中学生のとき、匿名「T・K生」による「韓国からの通信」を読んだ。早熟ぶりがうかがえるが、本人は「みんなが読んでいるから読んだだけです。よくわからないし、軍事独裁政権の韓国は怖い国だなあと当時は思いましたね」と笑う。高校在学中、小説『海を感じる時』を書き、群像新人文学賞受賞。18歳での衝撃的なデビューだった。女子高校生の性や人との関わりをみずみずしく描いたこの作品で、中沢はすでに日常の細部を鮮やかに描き出す力量を發揮しており、7年後、野間文芸新人賞を受け、作家としての地位を確立した。

韓国との直接的な関わりが始まつたのは1993年。前年にスタートした日韓文学者会議の第2回が济州島で開かれ、これに参加した。この会議は生前の中上健次が提唱していたもので、中沢は以後、隔年ごとに双方の国で開かれる会議に欠かさず参加している。

「初めは韓国の歴史や文化に関して恥ずかしいほど無知でしたね。会議に出席する韓国の作家や詩人に教わりながら勉強したんです」

その成果が集約されたのが前出の著書『月の桂』だ。8つの短編が収められ、ことに冒頭の「隠者の國の歩様」は印象深い。ソウルの宗廟祭、舞人の少女の描写に始まり、色や形、街のにおい、人のたたずまいなどを通して韓国の静謐な伝統美がくつきりと浮かぶ。他の作品では、文学者会議に参加した韓国文学者たちのさまざまなエピソードが記され、温もりのある交流ぶりが読み取れる。

ちなみに、日韓文学者会議は2008年から、中国を加えた韓日中による東アジア文学フォーラムに発展した。このフォーラムにも日本側の実行委員に名を連ねている中沢は、長年の交流のうち、韓国の大作家、中堅、若手まで幅広い作家や詩人と親交を結んできた。

「フォーラムの韓国作家団代表の崔元植さんが、激動につぐ激動の時代を経て、韓国の作家たちはようやく政治から離れ、純粹な文学を作つていけるようになつたとおっしゃつていました。作家としてのままれ方が日本とは違うんですね」

南北分断、朝鮮戦争、軍事独裁、民主化闘争と、激しく政治状況が揺れ動くなか、韓国の文学者はそれと切り結ぶような作品を生み出してきた。そして民主化を果たし、日本をはじめ海外文化への門戸を開いた。

「韓国で『圧縮された近代化』ということが言われているそうです。他の国が50年かけて近代化した



東京・神保町のブックカフェ「チェックコリ」でトークライブ。軽妙な語り口で「私のおいしい韓国」を。



「韓国には文学はもちろん、他にも面白い本がたくさんあります。クオン一社ではそれらを全部出す

ところを10年くらいに圧縮したわけです。歪みもあるでしょうが、そこから新しい作家もつぎつぎに出てきました。でも一方で、伝統は連綿と続いています。韓国は“うた”的の国なんですよ。アリランの曲に即興で詩を作つて歌つたりする。そういう詩的な感覚は古い時代までたどれ、掘る井戸が深いんですね。その伝統の深い井戸が、私たち作家だけでなく、日本の若い世代の読者にも自然に水を与えてくれると思います」

うたの国の文化がもたらす水。それを伝えるべく中沢けいは、教え子とともに韓国文学の紹介に取り組んでいる。

K—文学振興委員会を立ち上げる

作家業の一方で中沢は、法政大学文学部日本文学科教授を務めている。96年、日本大学芸術学部文芸学科の非常勤講師に就いたことから大学教員が始まつたが、この講師時代に出会つたのが金承福である。

88年のソウル五輪を機に、韓国では海外旅行が自由になつた。日本へ留学する韓国の若者が増え、日本大学芸術学部文芸学科へ入学した金もその一人だつた。

「専門課程のとき、中沢先生に教えていただいたんですが、韓国で大作家と呼ばれている人たちが先生の友人と知り、びっくりしましたね。中沢先生に、韓国語を教えてと頼まれ、個人的なつきあいが始まりました」

大学を卒業した金は日本の広告会社に就職したが、起業精神に富む女性なのだろう、3年後には独

立してWebサイト制作の会社を起こした。まもなく日本で映画やドラマを中心とした韓流ブームが起き、韓国でも村上春樹、江國香織らの小説がつぎつぎに翻訳され、新世代の韓国人の人気を呼んだ。「日韓の交流が盛んになるのはうれしいですが、出版に関しては完全に日本の輸出過多です。とくに文芸書は、韓国で日本のものが年間900点も出版されているのに対し、日本で翻訳出版される韓国の文芸書はわずか20点前後。韓国にも面白い作品がある、それをぜひ日本に紹介したいと考えました」そこで出版のノウハウを学び、2007年に株式会社クオンを設立。4年後には「K—文学振興委員会」を立ち上げるため、中沢に相談した。もちろん中沢は賛成、委員長を引き受けた。また同年、韓国文学翻訳院主催の韓国文学読書感想文コンテストをK—文学振興委員会が実施し、その審査委員長も中沢が務めた。さらに、このときの課題図書だつた韓江著『菜食主義者』(きむ ふな訳)を皮切りに、金は「新しい韓国の文学」シリーズの刊行を始めた。なんともすごい行動力であり、中沢とのコンビぶりも絶妙である。

「新しい韓国の文学」シリーズは、2000年以降に書かれ、韓国の主な文学賞を受賞した純文学作品の中から選ばれている。第1弾の『菜食主義者』には「今までの韓国のイメージとは違い、韓国文學が新鮮に感じられた」などの感想が寄せられた。実際、現代人の孤独が鮮烈に描かれ、読みごたえがある。韓国文学のレベルの高さを証明したわけだが、師弟コンビの挑戦はまだ終わらない。

韓国文学・文化をさらに広く伝えたい



中沢けい



クオン刊「新しい韓国の文学シリーズ」。朝日新聞の
2015年文芸書海外作品トップにクオンの本が。



韓国文学の普及に協力して取り組む教え子のクオン社
長・金承福とともに。金社長は中沢作品の翻訳も。



ことはできませんから、日本の出版社に広く紹介したいと思つたんです。そのために、まず本を紹介する日本語のカタログを作り、展示会を開く必要があり、それに資金が必要でした」

そこで金承福は中沢に相談し、K—文学振興委員会として、（公財）韓昌祐・哲文化財団に助成を申請し、認められた。そんな教え子を中沢はこう語る。

「韓国の出版事情はなかなか日本には伝わってきません。そこを切り開こうとする彼女の企画力、それを実現する努力には脱帽です」

金はさつそく翻訳家など40人近い編集協力者を集め、「日本語で読みたい韓国の本—おすすめ50選」を作り上げた。132ページにも及ぶこれは、カタログの域を超えている。小説や詩をはじめ、エッセイ、人文、児童書、健康、料理までのジャンルから選ばれ、そのまま韓国文学・文化の今を伝えるものになっている。しかも50冊それぞれに著者略歴、本の概要、日本でのアピールポイント、さらには試訳までつけられているのだ。第2号巻頭の挨拶で中沢けいは「このたび、K—文学振興委員会はK—BOOK振興会に名称を変更しました」と報告し、こう記している。

「数多くの韓国書籍が日本語に翻訳され紹介されることによって、韓国への理解はより豊かで多面的なものになることでしょう。このようなたゆみない努力こそが、将来の繁栄と平和と安定の大きな基礎となっていくことを確信しております」

この詳細なカタログや原書を揃えた展示会を開催したところ、講談社をはじめ日本の出版社との契約が23タイトル、31冊に達した。それまでの出版点数に比べると大成功である。ちなみに、この活動から生まれた最初の翻訳書が金衍洙著『世界の果て、彼女』（吳永雅訳）で、前述のシリーズの10巻目にあたる。この小説集は日常の中の微妙な感情の揺らぎを描き、読者に切なさや共感を呼び起こす。



「中沢先生にいつも相談」(金)、「彼女の企画力、行動力には感嘆」(中沢)



財団助成を得て作成した「日本語で読みたい韓国の本」。充実した文化ガイド。

「日韓関係は後戻りできないし、山は越えられる」心筋梗塞を患ったが、1日2箱のヘビースモーカー。

もある。

鼎談といえば、レイシズムを取り上げた前述の熊野大学夏期セミナーで中沢は、日韓の若い女性作家2人と語り合っている。1人は『菜食主義者』の著者・韓江、もう1人は中上健次の娘・中上紀。中上健次は韓国の文学や文化を愛し、一時期を韓国で暮らした。その中上が「一番の飲み友達」として意気投合した作家が韓勝源^{ハンソンウ}で、韓江はその娘。つまり、2代にわたってそれぞれ作家になつたわけである。

中沢は司会者のような立場で、後輩の女性作家から日韓の文学者のありようなど、さまざまな話を引き出している。日韓文学者会議をきっかけに長年、韓国に関わってきた中沢けいにとつて、この対談は国と国、世代と世代をつなぐ懸け橋のようなものだつただろう。

そして教え子・金承福もまた、持続的な日韓の文化交流をめざして走りつづけている。師弟コンビの今後から目が離せない。

（文中敬称略）



郵便資料で読み解く朝鮮半島の現代史



内藤陽介

郵便学者／成城大学文芸学部非常勤講師

切手、消印、葉書、封筒、宛名、所番地……。古く変色した数多の郵便物が、

これほど雄弁に国家や地域の実相を語るものだと、誰か想像できただろうつか。

かつて切手収集と社会科研究に励んだ内藤少年の熱意が結実した学問「郵便学」。

日本が誇る「オタク」文化が、

今、アジア現代史を面白くする。

文＝西所正道

写真＝菊地健志



ないとう・ようすけ◎郵便学者。1967年、東京都生まれ。東京大学文学部卒業。日本文藝家協会会員。主な著書に、『解説・戦後記念切手』(日本郵趣出版、全7冊+別冊1)、『切手と戦争』(新潮新書)、『外国切手に描かれた日本』(光文社新書)など多数。最新刊は『アウシュヴィッツの手紙』(えにし書房)。

現物を見て、触って、感じる

郵便学者・内藤陽介^{ないとうようすけ}を一度でも見たことのある人ならば、「ああ、あの着物の人ね」と言うかもしれない。それほど内藤は着物をよく身につける。

ずっと気になっていたので聞いてみた。どうして着物なのか、と。

「それはですね、痛風だからですよ。ホントに、尿酸値が高いんです。痛風で足が腫れると、靴は痛くて履けないです。そういうとき、雪駄は助かりますよね（笑）」

もちろん嘘ではないのですが、人を喰つたような顔をしているので、それだけではないことはすぐにわかった。やや間を置いて語り始めた話は、内藤の研究に対するスタンスを如実に物語ついて面白い。

「韓国に行くときには、よく着物を身につけるんです。履き物は雪駄か下駄^{げた}。韓国の人人が日本人のことを差別的に呼ぶときの言葉に、『チヨッパリ』がありますが、漢字で書くと『豚足』。あれって、下駄や草履に使う鼻緒^{はなお}のことを豚の足になぞらえて言っているわけです。韓国や中国では基本的に靴の文化ですから、バカにしているんですね」

まさにバカにされているものを、内藤はわざと身につけて韓国を歩く。飲み屋にも行く。そして初対面の人などにおもむろに聞くのだという。

「チヨッパリという言葉の由来は何か知っていますか？」

「と。すると一部のお年寄り以外は、ほとんど知らないのだという。そもそも着物を着た日本人を目



にする機会が少ない。つまり、由来も知らないのに、チヨッパリと言っているのだ。

「生身の日本人が、チヨッパリの由来となるものを身につけて、自分に問い合わせている。予想もしない質問なので、ほとんどの人は動搖するのですが、そこで感じること、考えることというのは大切だと思います。言葉や理念では伝わらないメッセージが現物には宿っているからです。実は切手にもそういうところがあります。国の歴史や社会、文化は本でも理解はできます。でも切手や封筒、郵便物という現物を直に見たり触つたりする中で、感じられることって少なくないのです」

そもそも「郵便学」というのは、内藤が提唱し始めた学問である。右のコメントで語っているとおり、切手などの郵便資料から、国家や地域のあり方を読み解く学問である。

(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成金を受けて展示了した内容をもとに綴った『朝鮮戦争 ポスタルメディアから読み解く現代コリア史の原点』から、郵便学の一端を見ていく。

同書では、日本占領下から、終戦、朝鮮戦争、休戦までの時間軸の中で発行された切手など、当時の郵便資料をもとに、ユニークな視点で歴史的事実を記している。

たとえば、1945年8月15日、日本が敗戦した日の消印が押された葉書(※画像1)。差出人は、韓国南部、木浦の住所で「桑田隊 山木達郎」、宛名は忠清北道に住む「朴東起」。この葉書から、複数のことがわかる。

まず、山木は木浦で訓練中の朝鮮人志願兵なのだが、彼は朴東起の子供であることがわかる記述がある。

〈ご両親様にはご健勝の事……〉

ただ、姓が違う。日本は当時、「創氏改名」という形で朝鮮人に名前を強制的に変えさせていたの

ではないかと思う向きもあるかも知れないが、どうやら実態は違つたようだ。

内藤によると、朝鮮在住の朝鮮人で改名した人は9.6%、日本在住の朝鮮人でさえ14・2%だったという。

「なかには強制をした日本人もいたと思いますが、基本的に改名自体は自由意思に基づいていたのです」(内藤)

もちろん、命を懸けても大事にするほど「本貫、族譜」を日本式の「氏」に変える「創氏」を強制されたのは屈辱的なことであつたに違いない。だが、改名に

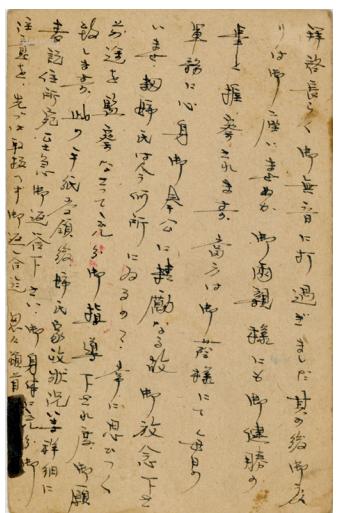
関しては、もしかしたら多くの日本人の認識とは違うかもしれない。

もう一つは、8月15日午前の時点では、末端の朝鮮人兵士にも終戦のことは知らされていなかつたであろうことが文面から読み取れる。

〈軍務に心身御奉公に精勵なる故……〉

と書かれているからだ。

こうした見方を紹介すると、郵便学者とは、歴史学者とどこが違うのかという疑問が湧いてくる。



画像1 1945年8月15日に投函された朝鮮人志願兵から父親への葉書。父親は改名していない。



「歴史学者というのは、切手などを資料として見ればそれで事足りるわけです。極端な話、現物がなくてもマイクロフィルムでもいい。私のように、現物に対する執着はないのです。だから、歴史学者は郵便物に対する踏み込みは弱くなりります。郵便学というのは、どんな紙に印刷されているか、紙の感触、厚さ、量感、色、匂い、あるいは印刷の技術、消印のデザイン、明瞭さ……など。五感を研ぎ澄まして右から左から、上から下から、斜めから……いろんな角度から見て、感じる。僕は性格が卑しいというのかケチなので、せつかく手に入れたのだから、この現物からどれだけの情報を搾り取れるかをひたすら考えていますね」

たとえば切手を見ると、当時の経済状態がわかる。太平洋戦争後に、厳島神社の鳥居がデザインされた30銭切手が日本で発行されているが（※画像2）、39年発行の切手と、46年のそれとを比べると、戦争による国力の疲弊を象徴するように、かなり粗悪になっている。

また、戦後、米ソによつて分割統治されることになった、南北朝鮮、北朝鮮においても同じである。46年3月、金剛山をあしらった50チヨン切手が北朝鮮で発行されているが、これはかなり粗悪で、経済状態を反映している（※画像3）。

その3年後の49年、韓国も金剛山をあしらつた切手を発行してい

る。韓国があえて北朝鮮内の金剛山をデザインした切手を出したのはなぜかといえば、韓国こそが朝鮮半島を代表する政府なのだと正統性をアピールする意図があつたからだ、と内藤は解説する。いずれにしろ、韓国の切手のほうが明らかに上質である（※画像4）。

「資料を読んでも、60年までは韓国よりも北朝鮮のほうが豊かだったと書かれているものがありましたが、発行されている北朝鮮の切手はボロボロだった。封筒もボロボロ。GDPなどの統計もいわゆる数字が連ねてあつたけれども、大多数の国民は飢えてしまっていた。だから表面上取り繕つても、切手を見れば嘘が見えてしまうということなのです。このあたりが郵便学の面白さのひとつでもあります」

切手が、その国がプロパガンダする道具として利用されることもよくある。前記したように、韓国が正統な政府だとアピールしたのもそうだし、1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争で、北朝鮮は注目すべき切手を発行している。

朝鮮人民軍が南朝鮮に奇襲をかけた3日後の6月28日にソウルは陥落するのだが、わずか2週間後の7月12日には陥落した日の日付を入れた切手が発行されている。その手際の良さは何を意味しているのだろう（※画像5）。

「最短でもデザイン着手から完成するまでは一ヶ月はかかる時代で



画像6 北朝鮮が1950年7月28日に発行した「戦勝記念」切手。



画像5 ソウル陥落から14日後に北朝鮮が発行した解放記念切手。



画像4 韓国発足間もない1949年に発行した「萬物相」をあしらつた20ウォン切手。



画像3 北朝鮮臨時人民委員会のもとで発行された最初の切手(50チヨン)のうち、金剛山の奇岩「萬物相」デザインのもの。



画像2 日本国内で発行された厳島神社をあしらつた30銭切手。左から1939年、1946年発行。



2015年7月に開催された「日韓国交正常化50周年記念・韓国切手展」会場でスタッフと。

す。どう考へても、28日の日付だけを除いて開戦の前からつくり始めていたとしか思えません。輝かしい戦果を誇示したかつたのでしようが、当時の北朝鮮側には、ソウル陥落で戦争が終わつたかのような楽観的ムードが流れていたと考えられます」
53年7月に板門店で休戦協定が成立したときも、北朝鮮は「戦勝切手」を発行、「朝鮮人民の勝利萬歳！」と謳つている。協定調印も拒否し、切手も発行していない韓国とは対照を成している。北朝鮮ではいまも「休戦協定調印日」を「祖国解放戦争勝利記念日」としているが、当時の切手はそうちたプロパガンダの烽火だつたのだろうか（※画像6）。

切手オタクが見た戦争・中国・朝鮮半島

切手、郵便物の詳しい解説は、別に掲載される内藤の論文に譲るが、こうした切手や郵便物はどのようにして集めるのだろう。

以前は、カタログを見て、欲しい郵便資料の番号を書いてファックスで注文し、クレジットカードがダメなら外国為替で決済という面倒な手続きを踏まなければならなかつた。

「欧米の人は、バカansを平気で1ヶ月も取るので、連絡が取れずに、原稿の縮め切りに間に合わないという悔しい思いをしたことが何度もありました」

しかしいまは、ネットオークションサイトがあるので至極便利になつた。

よく利用するのは、コレクターズアイテムを豊富に扱つてゐるイーベイとデルカンプ。この2つのサイトを朝晩2回チェック。所望のものが見つかると、夜中であろうが朝方であろうが、落札するの

いつもの着物で、「韓国切手展」記念講演する内藤。演題は「切手と郵便に見る韓国現代史と日本」。





国連軍参加のオランダ軍人が米野戦局経由で差し出した郵便物。



大韓民国政府樹立の記念切手を2種セットで貼った郵便物。



中国人民志願軍凱旋の記念切手を貼った郵便物。ラサ差出。



韓国が発行した国連軍感謝切手のうち、南アフリカを取り上げた1枚。



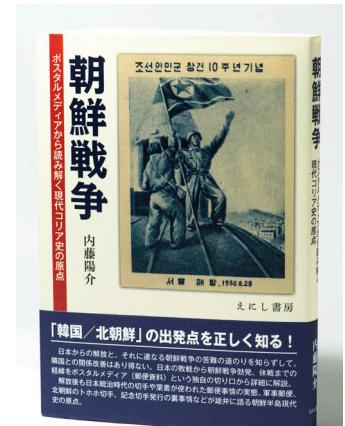
日本統治時代に建造の蒸気機関車を描く鉄道50年の記念切手。



大韓民国臨時政府樹立72周年の記念切手。



仁川の自由公園に立つマッカーサー像を取り上げた風景印。



助成研究の成果の一部『朝鮮戦争 ポスター・メディアから読み解く現代コリア史の原点』(えにし書房 2014年)。



1954年に北朝鮮で発行された朝鮮人民軍創建6周年記念の官製絵葉書。



に血道を上げる。結果、時差で睡眠リズムがガタガタになる。

「他にも方法はあります。各国で開かれる切手のイベントには世界中から業者が来ているので、彼らに声を掛けておくのです。『俺に向いているものがあつたら教えてね』と。僕の展示を見ればだいたい傾向がわかりますからね。すると向こうも売りたいので、後日『こんなのどう?』とメールなどで連絡をくれたりするのです。そういうことの繰り返しですね」

きわめて地道な作業だが、切手にこれほど深い関わりを持つようになつたきつかけは、小学生の頃から好きだった切手収集だという。ただ、興味が続いていた中学時代も含めて、のめり込むというほどではなく、「何となくやつていた」程度だった。むしろ歴史が好きで、「社会科オタク」。そして何より、本を書くのが夢だったという。

切手、社会科オタク、出版の夢、この三つがのちのち一つに結びつくのだが、「書く」チャンスを与えてくれたのは、日本郵趣協会という団体だった。同会は、世界中の郵便切手類の歴史や郵便制度について研究することを主要な目的にした団体なのだが、子供向けの雑誌「スタンプクラブ」を発行していた。

その編集部では、切手の好きな小学生から高校生を集めて、ジュニア編集委員という肩書きを与え、記事の執筆やイベント企画を任せていた。本を出すことが夢だった内藤少年は、ジュニア編集委員の募集に応募し、首尾よくメンバーとなる。

「原稿を書いてもノーギャラだつたんですけどね(笑)。それでもイベントに参加することが面白くて、大学に入つてからも活動の手伝いをしていました。たまたまお盆に、大手町の通信総合博物館を利用できる時期があつたので、『戦争体験のない子供が、戦時中の切手や封筒を集めて戦争を考える』と

いう企画展を開いたのです。大半を僕らがやつたのですが、これが評判を呼んで、当時まだNHKの記者をしていた橋本大二郎さん(のちの高知県知事)も取材にいらしたり、複数のメディアに紹介された。その体験を通して、真面目に切手のことを研究すれば、面白いことができるのではないかとうことが見えてきて、のめり込んでいったのです」

夢にまでみた「本」を出版できたのは1996年のこと。『それは終戦からはじまつた—新視点から見た戦後史』である。重巡洋艦「最上」の藤間良艦長が、自分の書いた手紙に自ら検閲印を押して発送した証拠資料を出したり、幹部にいくほど情報に甘くなる軍の体质を浮かび上がらせたりした。

これは内藤が東大大学院の頃に書いた本だが、東大的助手になつてからも、「歴史読本」などの雑誌に、「戦争と郵便」といった内容の原稿を寄稿する機会が増えていく。

99年には、たまたま出会った編集者が中国に詳しかったこともあり、「マオの肖像—毛沢東切手で読み解く現代中国」を出版。2001年には、もう一人の圧倒的指導者金日成体制の北朝鮮を切手で見てみようと、「北朝鮮事典—切手で読み解く朝鮮民主主義人民共和国」を刊行。そこから次第に朝鮮半島の歴史に引き込まれていく。

「たぶん韓国という国が好きだと思うんです。ラテン系で、ちょっとといい加減で、エネルギーッシュでお節介なので、毎日つきあつているとうつとうしいかもしませんけど、たまに会うのはすごく面白い。最近、韓国人の知り合いに、『内藤さん、韓国人っぽくなってきたね』と言われましたから(笑)」

内藤には、韓國の人々に恩があるという。それは、自分の仕事を認めてくれた人が何人もいるからだ。たとえば、奇抜な装幘ばかりが話題にされた『北朝鮮事典』に興味を持ってまとめ買いしてくれたのは韓国大使館だつたし、『韓国現代史—切手でたどる60年』と『反米の世界史—「郵便学」が切り

込む』は韓国語に翻訳された。

後者の2冊に関しては、韓国の検定教科書の内容とは違う記述が複数あり、編集部員から異論が出たが、編集長が部内を収めたのだという。

「編集長がこう言つてくれたみたいなんです。『韓国人と同じことを言つてている日本人の本など出す意味がない。誹謗中傷^{ひほうちゅうじょう}をしているのなら問題だけれど、日本人が自分で考えて冷静に客観的に歴史をとらえた本は少ないのでから』と。韓国の人でも冷静な人はいくらでもいます」

従軍慰安婦の記述など2カ所は騒動になる可能性が高く、削除を要求されたが、前記の創氏改名に關しては、そのままの記述で掲載となつた。

こうした冷静なやりとりが、日韓関係の中で最近できにくくなつていていることに、内藤はやや危惧^{きぐ}を抱いている。

「北朝鮮でも韓国でも、まじめに真正面に觀察していると、良いところも悪いところも見えてくるじゃないですか。悪いところが見えてきたからもう嫌い、ではなくて、それも含めて好き、困るところもいっぱいあるけど面白いよね、という関係になれないかなと。喻^{たと}えていえば、付き合っている彼女の、ダメなところも好きみたいな感じですよね。でもいまは、嫌いな人は嫌なところしか見ないし、好きな人は良いところしか見ようとしている。感情が先に走っている。でもそういうことを発言しようものなら、反発をくらつたり、無視されたりする。だんだんものを自由に言いにくくなつてている。だからみんな委縮^{いしづく}しちゃうんですよね。そういう雰囲気が最近すごく気になっています」

内藤の発言には不思議な安定感がある。それはおそらく主義や理念から出発せず、常に切手などの現物、確かな物を基点に思考しているからだ。

（文中敬称略）

日本が守り伝えた高麗仏画を追いかけて



郷司泰仁

公益財団法人 香雪美術館 学芸員

伝教大師こと最澄が描いたと伝えられる
高麗仏画「阿弥陀八大菩薩像」を
延暦寺宝物殿の目録で発見し、
その修復や研究に努めた郷司。

精緻な技術と芸術性を持つ仏画を守り伝えた
日本各地の仏教信仰の歴史にも
分け入っていく仕事だ。

文/千葉望
写真/渡辺誠



ごうじ・やすひと◎1979年兵庫県生まれ。花園大学文学部史学科卒。同大大学院修士課程文学研究科日本史学専攻修了。大阪大学大学院博士後期課程文学研究科文化表現論専攻（美術史学）。現在、公益財団法人香雪美術館の学芸員として勤務しながら、花園大学文学部や京都造形芸術大学通信学部で非常勤講師を務める。

郷司泰仁は兵庫県内の山あいの町に生まれた。生家は天台宗の寺院で、祖父や父は大分県国東半島の出身だという。磨崖仏で知られる国東半島は「まさに仏教ワールドです」と郷司自身が言うとおり、古代からの仏教信仰の生きる土地として知られる。郷司は山や川を遊び場としてのびのび育ち、長い休みには国東半島の親族の家に行くこともあった。

一方で彼は歴史に興味を持つ少年だった。歴史を学びたいと、大学は京都の花園大学に進む。臨済宗系の宗門大学であり、仏教史には強みを持つが、入学当初は美術のゼミはまだなかつた。少しづつ美術史に興味を持つようになつた郷司にとつては残念なことだった。

「ところが、たまたま私がゼミを取る段階になつて、美術のゼミができるんです。ラッキーでした」学部時代は仏像を専攻した。大学院で仏画に転向。それ以後はずつと仏画を研究してきた。

比叡山延暦寺の国宝殿に学芸員として就職したのは、たまたまその仕事をしていた人が延暦寺中の人事異動により別部署へ移つてしまい、次の学芸員を探していたからだという。天台宗が協力した展覧会「最澄と天台の国宝」が京都国立博物館で開催された際、郷司はその手伝いをしていた縁があり、就職することができた。正規職員としての学芸員は当時も今も募集の少ない難関である。

延暦寺で思いがけない「お宝」を発見

京都の中心部から路線バスで1時間も登つていけば比叡山延暦寺に到着する。それほど近さにありながら、延暦寺は今も天台宗の僧たちの修行の場であり、千日回峰行に挑む僧が現れる信仰の場でもある。横川のあたりまで行けばさらに山深く、「源氏物語」「宇治十帖」に登場する「横川の僧都」



が住まう僧堂があるとされたことも納得がいく。戦前から戦中にかけて12年籠山した僧が、日本が戦争をしていたことを知らなかつたという逸話があるほどで、観光地化したと言われながらも、伝教大師こと最澄が灯した法灯が、現在でも消えることなく受け継がれている。

これほど伝統がある延暦寺だけに、さまざまな寺宝が今も残されている。それでも現在寺を守る僧や職員がすべてのお宝を把握しているわけではない。思いがけないときに思いがけないきっかけで「発見」されるものがある。

郷司が、延暦寺に高麗仏画「阿弥陀八大菩薩像」があると気づいたのは、国宝殿に学芸員として勤務しはじめてまもなくのことだつた。国宝殿には所有する寺宝の古い台帳があり、それを何気なくめくつていたのである。

新任の学芸員として、勤務先にどれだけの所有物があるのか改めて確認しようとするのはごく自然な行為だろう。

「比叡山の収蔵庫はコンクリート造りのしつかりした建物で、仏像の指定品（重要文化財）が多く收められています。国宝も何点かあります。一般にはあまり知られていないものも結構ありますね。そもそもお寺は江戸時代ぐらいの工芸品は日常的に使っていますし、仏像や仏画ならお参りをする。それが当たり前の感覚です」

寺で育つた郷司は、実家の寺にあつた涅槃図を覚えている。それは美術品ではなく、僧や信徒たちによつて守られ、お参りされるものだつた。だから延暦寺の国宝殿に入つても、一般の美術館とは異なる収蔵の考え方には違和感はなかつた。

ある日、郷司が目録を見ていると、そこに「阿弥陀八大菩薩像」とあつた。仏教美術が専門の郷司

は驚き、仏画が預けられている直轄寺院の蔵から仏画を出してもらつた。細密な高麗時代の特徴がはつきりと現れた、本来であれば大変美しい仏画であつた。

「仏画は二重の箱に、巻かれた状態で入つていました。外箱はヒノキでしょか、漆塗りがほどこされていました。開けてみると大変貴重なものだとわかつたものの、もうだいぶ表具が傷み、折れや汚れがありました」

いくらしつかりした箱に収められていても、風にも当たられず仕舞いつばなしの美術品は劣化がひどくなる。「阿弥陀八大菩薩像」もその例にもれなかつた。長い年月の間には修理された形跡もあつたが、その修理がよくなかつたらしく、折れてぱっくりと絹が割れ、口を開いていた。

劣化した仏画の修復を提案し、経過を知見に

通常、修復する際には表の絹地の裏に紙を貼る。ところがこの絵には裏に絹が貼られていた。絹と絹が合わされると剥がれにくく修復が難しい。裏から貼つた絹の強さが災いして表地を引っ張る形となり、それが割れの原因となつていた。

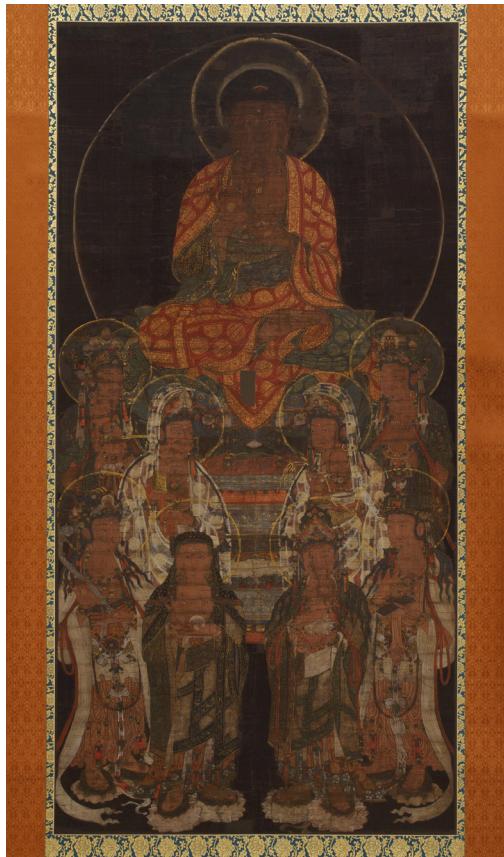
貴重な高麗仏画が劣化していることに驚いた郷司は、

「これは日本でも貴重な仏画ですから、すぐに修理をしてください」

と申請した。修復費用は数百万単位でかかることになつたが、比叡山側も開祖・最澄が描いたという伝説のある仏画であることからすぐ予算をつけてくれ、専門の修復会社に修復を依頼することができた。

寺に生まれ育った郷司は仏
教美術には親しみを感じる。
研究で各地の寺を訪ねるの
も楽しかったという。





修復後の「阿弥陀八大菩薩像」。顔もまとった衣の柄もはっきりし、表装に使われた裂地も新しくなった。



修復前の「阿弥陀八大菩薩像」(延暦寺本)。阿弥陀如来や菩薩の顔がわからぬほど傷んでいる。

修復にはおよそ2年を要した。この「阿弥陀八大菩薩像」は国内で現在5本の模写が確認されている。高麗仏画の模写はほとんど日本では作られないため、これほど模写が残っているケースは珍しい。「わりあい早くから状態が悪くなってしまったので、その代わりとして17～18世紀に作られた模写がそれぞれ1本ずつ、それ以外の3本は伝教大師筆という伝承があるため^{れいげん}靈験を映すために作られたと考えられます。模写が作られるのは特異な形態ですので、日本でも長らく大切にされてきた高麗仏画であるということから、自分で研究すべきものだと思うようになりました」

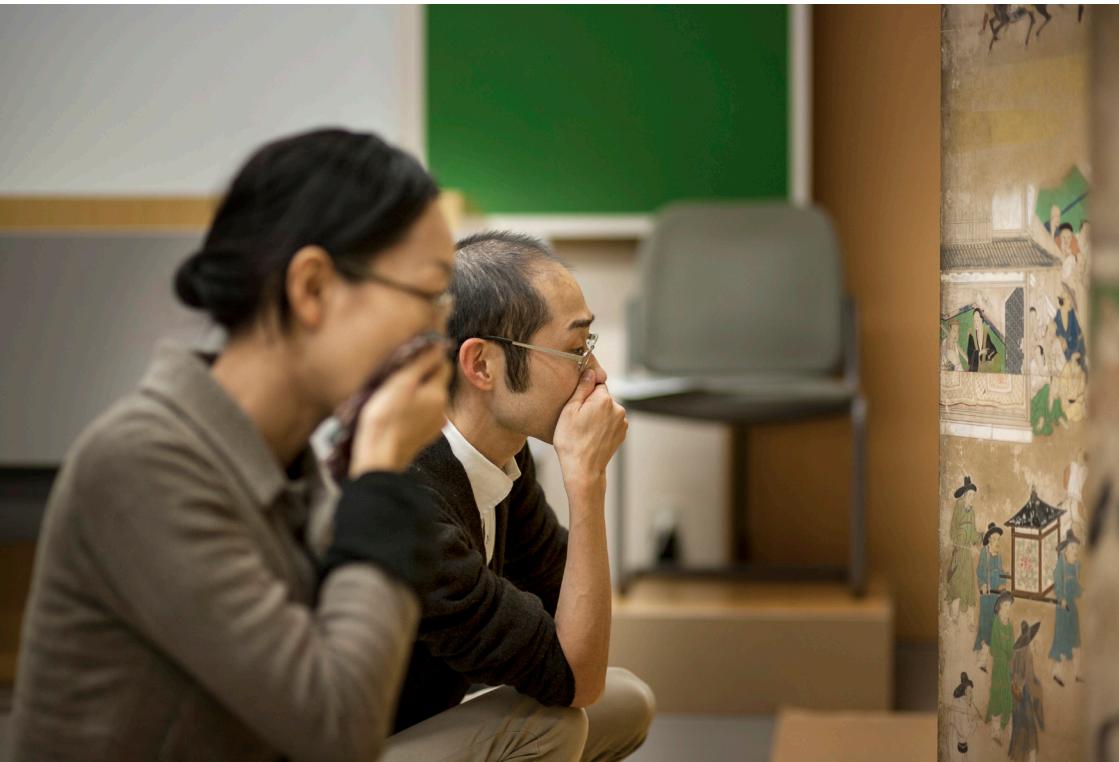
現物は貴重なもので、取材時に直接見ることはできなかつた。その代わり郷司が記録してきた画像をパソコンで拡大しながら見せてもらつた。

修復前の画はすっかり色変わりがしておらず、仏や菩薩の姿もよく見えないほどである。汚れのほか、カビも付いていたという。剥がれてボコボコになつたところもあつたそうで、修復はざぞかし大変だったろうと思われた。だが、さいわい近畿地方にはすぐれた職人がおり、この絵の修復は滋賀県大津市の会社に託された。傷んだ部分の裂^{きず}は新しいものに替え、古いものも資料として保存されている。

修復する際には、改めて色をつけたり文様を足したりすることはしない。絹を足さなければならぬ箇所もあるが、その場合は原本のものと同じ手法で作られた絹を古びさせて使う。英語で言う「aging (エイジング)」である。

「い」のように劣化したものをどうやって修復していくか、いろいろと見る機会を得たことが私の知見となつたと思います。その後、延暦寺が開催した他の展覧会の図録の中にそつくりなものがあつたり、またまた出かけた展覧会で模写が出ていることに気づいたとか、偶然が重なつていきました」

調べていくうちに制作時期はおそらくは14世紀の後半であろうと推測できた。だが研究には裏付け



京都・泉涌寺の宝物館「心照殿」で朝鮮通信使を描いた屏風をチェック中。
自分の息で絵を傷めないように細心の注意を払う。

が必要である。模写のある寺院や美術館を訪ねて現物を見、資料を調べるという気長な作業が必要となつた。こつこつと自分で調査を続けた。

韓国や国内各地での地道な調査に助成金を活用

2008年には延暦寺と滋賀の叡山文庫を、09年には東京藝術大学美術館で「阿弥陀八大菩薩像」と大分・両子寺の「薬師如来八大菩薩像」の調査を、12年には奈良・大和文華館の「阿弥陀八大菩薩像」「楊柳観音菩薩像」の調査をそれぞれ行つた。

また、講演や口頭発表の形で少しづつ成果を示す機会も持つことができた。たとえば10年には大津市歴史博物館や大阪市立美術館で一般の参加者や研究者を対象に研究内容を紹介している。

だが、調査に出かけるほどにもつと研究を深めたいという気持ちが募つてきた。そのためには資金が足りない。現在の香雪美術館に移つてからも休みを使い、自己資金で地方調査に出かけていたが、まだまだ通いたいところがあつたのである。

そこで郷司は、(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成金に応募することにした。高価な文献や書籍の購入費、コピー代なども必要だが、応募書類を作るうちに、国内だけでなく韓国・ソウルへも足を延ばすための渡航費や滞在費、調査協力者への謝礼などが相当部分を占めることがわかつた。

「幸い、お願いした内容の満額を助成していただきることができました。他の助成金の場合、満額をいただけないことも多いと聞いていましたので幸運でしたね」

資金の心配がなくなり、延暦寺本の模写以外にも、各地に残る高麗仏画を目にする機会に恵まれた。



郷司が「一番の仏画」という佐賀県・鏡神社にある「楊柳觀音菩薩像」は縦が419センチメートル、横が250センチメートルという巨大なもの。1390年に高麗で制作され、翌年には日本に渡つてきたことがわかつている。巨大ながら緻密さを失わず、優美な仏画である。

朝鮮半島の絵は水墨画や花鳥画など中国伝来の絵画か、李朝の民画のようなユーモアを漂わせたものという印象が強いが、日本で守り伝えられた高麗仏画の高度な技術や美意識には驚かされる。ところが、郷司によれば高麗時代が特殊なのだという。

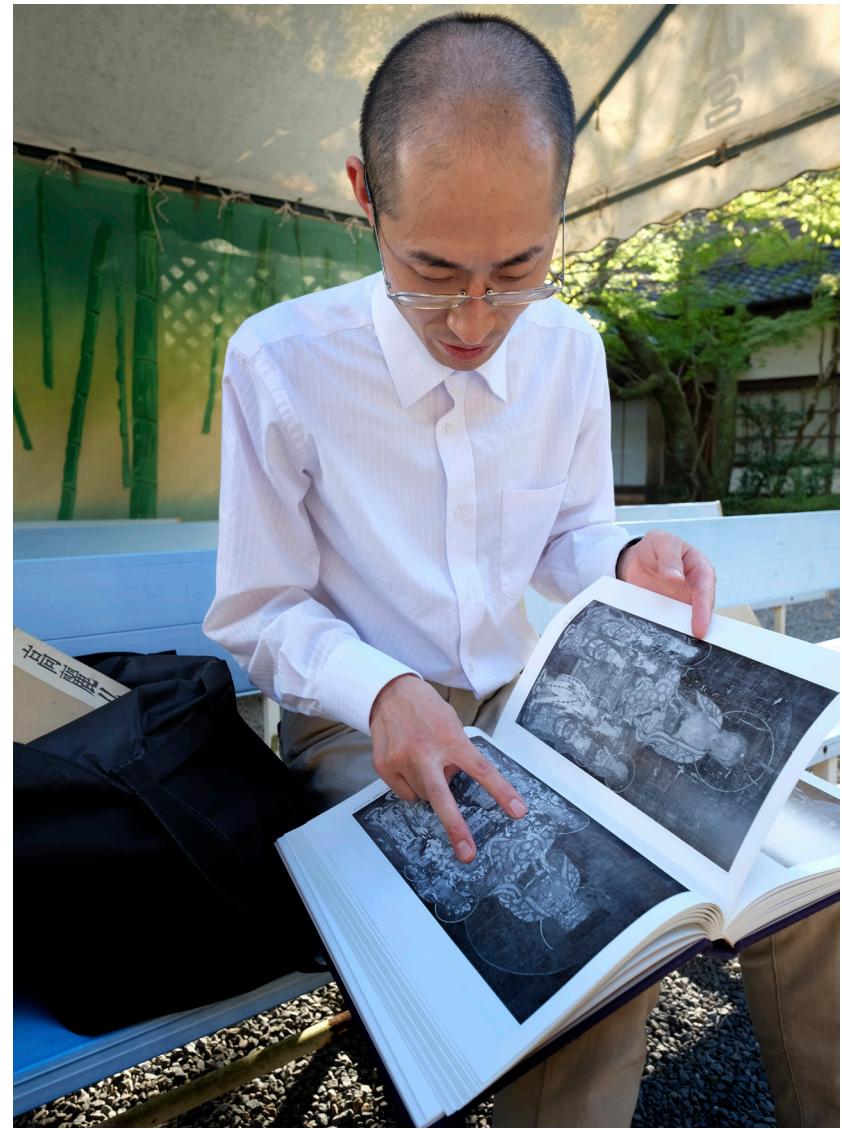
「高麗時代は朝鮮半島の歴史の中でもっとも技術が成熟していて、よい絵画が描かれた時代なのです」

同時期の日本は室町時代。茶道や能楽、立て花、絵画であれば水墨画や大和絵、狩野派などさまざま芸術が花開いた。ところが仏教美術に関しては「氷河期」だったようである。

「なぜか室町時代だけ、仏画が下手なんです。グズグズというか（笑）。仏像もそうで、ブロックを積み上げたみたいな変な形ですね。あれだけ鎌倉時代にはきりっと端正な仏像を造っていたのに、どうしてそうなったのかよくわからないです。展覧会でも室町時代の仏教美術を取り上げることはほとんどないと思います」

同じ時期に高麗では精緻を極めた仏画が描かれ、日本にも請來された。延暦寺に伝わった仏画のように最澄筆という伝説が生まれれば、それをありがたく思う人々によつて模写が描かれるという、高麗の画家たちは思いもよらない道をたどつたものもある。その研究は美術史を超えて、日本仏教の信仰史にも分け入ることになろう。

世界に目を転じると、高麗仏画の研究に取り組む韓国のベテラン研究者もいるし、アメリカの美術館に収蔵されたものもあるが、これまでのところは日本の研究のほうが一步先を行くという。



日本には多くの高麗仏画が請來されているが、研究を深めるのはまだまだこれからだ。

「地道に研究を続けていけば、この世界の大家になれるかも」と言うと、郷司は笑った。だが寺院に生まれ、延暦寺の国宝殿に勤務した経験があるという偶然を

生かさない手はない。

現在は神戸市の香雪美術館に勤務している郷司。仕事と研究の両輪を漕ぎながら、今後も高麗仏画を追いかけていくつもりである。

（文中敬称略）

香雪美術館学芸員という本業を中心にながら、自分の研究も深めていきたいと考えている。



大熊廣明

筑波大学名誉教授／筑波大学体育・スポーツ史研究会代表

平安の雅を今に伝える蹴鞠。

古代の神事でもあった勇壮な流鏑馬。

歴史を体育・スポーツの視点で紐解くと、大陸や朝鮮半島の影響を色濃くとどめていることがわかる。西欧の勝利至上主義にはない独自の身体運動文化が、深い水脈で日本と韓国を結んでいるのだ。

文＝高瀬 毅

写真＝渡辺 誠



アジアを源流に、日韓で育まれたスポーツ史を研究



文献上は蹴鞠に始まる日本スポーツ史

日本史を教わった人なら、誰しも「大化の革新」は知っているだろう。古代日本の大きな出来事としてどんな教科書にも記載されている。

645年、中大兄皇子と中臣鎌足が、当時の権力者蘇我家を滅ぼし、断行した政治改革のことと教えられたものだ。しかし実態は、血なまぐさいクーデター、「乙巳の変」といわれるものだつたことは、多少ともこの時代に関心がある人は知っている。

謀議を企図した先述の2人が出会ったのは、飛鳥の中心地にあつた法興寺の楓（櫻の古名）の下と言われ、そのときのことが『日本書紀』「皇極天皇」の巻に記述されている。きっかけは、中大兄皇子が催した「蹴鞠」の会に鎌足が参加したことだつた。

「中大兄の皮鞋が、蹴られた毬と一緒にぬげ落ちたのを拾つて、両手に捧げ進み、跪いて恭しくたてまつた。中大兄もこれに対して跪き、恭しくうけとられた。これから親しみあわれ、一緒に心中を明かし合つてかくすところがなかつた」

歴史を動かす2人の人物の決定的な出会いの場面が、具体的に記述されている。

「この逸話が本当だつかどうかは別として、『日本書紀』が書かれた時代に、『蹴鞠』という遊びがあつたということ。これは、日本の体育・スポーツ史として文献に出てくるものでは最初の頃のものと考えていいでしよう」

そう語るのは、筑波大学名誉教授の大熊廣明である。2013年まで筑波大学体育史研究室の教授



おおくま・ひろあき◎1948年生まれ。筑波大学名誉教授。76年東京教育大学大学院体育学研究科修士課程体育学専攻修了。鳥取大学助教授を経て、2003年から筑波大学体育科学系教授。専門は体育・スポーツ史研究。日韓体育・スポーツ史の研究に力を入れ、ソウル大との間で相互にセミナーを開催、研究活動を続けている



体育・スポーツ史を、アジアから捉え直すことが大熊のテーマだ。

として、日本の体育・スポーツの歴史を研究してきた。

大熊によると、「蹴鞠」は身体運動文化の一つで、現代風にいえばスポーツとして捉えられるものだという。そう聞いて、一瞬、虚を突かれた感じがした。テレビや映画の歴史ドラマに出てくる印象が強ないので、スポーツという言葉のイメージとの乖離^{かいり}があるからだろう。しかし、身体運動文化という視点から捉えなおせば、蹴鞠以外にも「体育・スポーツ」の範疇^{はんしゅう}に入ってくるものは他にある。たとえば舞踊や雅楽も入るのだという。相撲の歴史も古い。「くらべ馬」と読む競馬や剣術や弓術。さらに「打毬」^{だきゅう}というものもある。「ポロ」のことだ。大熊によれば、「ポロ」の発祥はアフガニスタンやイラクなど、中央アジアから西アジアにかけての地域だという。それがチベットからインド、さらにイギリスへと西に波及していくて「ポロ」となり世界に広がった。一方、東の中国から朝鮮半島、そして日本へと伝播^{でんぱ}したものは「打毬」となったといわれている。

「そもそもさまざまなスポーツの起源は中央アジアから西アジアにかけての地域にあり、西欧より古いものが多い。そしてそれらは、ほぼ確実に大陸から伝わってきたものだと考えられます」

古代の「スポーツ」に関する記録として文献が残っているのは、西暦600年代くらいからだ。それ以前のことに関しては、まだ不明なことが多いという。しかし、朝鮮半島などとの交流が紀元前から盛んだったことを考えれば、場合によつては、卑弥呼の時代（200年代初頭）にも、何らかの「競技」のようなものが行われていたと考えられないこともない。そう考えていくと、日本の古代史にも新しい側面が見えるようで興味深い。

こうした大陸や朝鮮半島などを経て伝わったと考えられる「スポーツ」は、形を変えながらも、日本の中に定着していったようだ。



10月、日光東照宮で流鏑
馬の前に、小笠原一門と馬
ともども、神殿の前で奉納
の儀式がとり行われた。



その一つ「くらべ馬」は、かなり古い時代に日本列島に入ってきたと考えられるが、はつきりしているのは平安時代の800年代前半からだ。いまの競馬とは違つて、2頭によるマッチレース（一騎打ち）形式で直線距離を走つていたという。天皇や上皇の臨席する場所、たとえば平安宮の正殿の馬場などで行われていた。やがて、800年代末からは京都周辺の寺社でも開催されるようになる。中でもよく知られているのは、京都・上賀茂神社のくらべ馬だ。

「おそらく各地の莊園でくらべ馬が行われていて、その中から優秀な馬が上賀茂神社にやつてきたと思われます。面白いのは、2頭は同時にスタートしないんですね。どういうわけか片方が先に出て、もう1頭が追いかけるというルールでした」と大熊は言う。古代から、良い馬をもつていることは、戦の戦力として非常に重要なことだった。莊園制度のあつた時代、上賀茂神社は各地に莊園をもつていて、各莊園から馬が寄進されていた。くらべ馬は、それらの馬の質を比べる意味合いがあつたのだ。

『日本の古式競馬』（長塚孝著）によると、上賀茂神社で年中行事化したのは平安末期の1093年のこと。端午の節句に、殿上人が上賀茂神社に参詣して、願をかけたところ勝つたので、競馬5番を奉納し、以来、継続的に行われるようになったといわれている。

上賀茂神社のくらべ馬は、いまも毎年5月5日に行われており、重要な伝統行事となつていて。そこでは昔のくらべ馬の様子を再現していて、「○○の庄、誰々」と声を上げる到着報告から始まる。

競馬と並んで古いのは弓術だ。2チームに分かれ競う団体戦のスタイルだつた。敗けた側は罰として、強制的に酒を飲まされたということである。これは中国を中心としたアジア系の大陸の文化、風習と同じだという。

「日韓体育スポーツ史セミナー」でアジアに光を当てる

大熊は、1967年に東京教育大学に入学。以後、一貫して体育・スポーツ史に関する研究・教育に取り組んできた。東京教育大学の流れを汲む筑波大学の体育学の研究体制は、専任教員が100人を超える世界トップクラスの陣容だ。しかし、体育・スポーツ史研究の主眼は西洋の体育・スポーツをどのように受容してきたかに重点が置かれ、日本の伝統的なスポーツや、それに影響を及ぼした東アジア地域との交流という観点での研究は極めて少なかつた。

そんな研究動向に対する反省から、20数年前から韓国のソウル大学体育史研究室と交流を開始。「日韓体育スポーツ史セミナー」を開いた。その後、95年に、台湾、中国を加えて「東北アジア体育・スポーツ史学会」が設立され、活発な交流を行つていている。

筑波大学体育・スポーツ史研究会では、古代から近代に至る日韓の体育・スポーツ（身体運動文化）交流の歴史を研究し、その成果を2013年に開催した同学会と、14年に、日本と韓国で開催されたそれぞれの国内の学会でも発表した。そのための資料収集や研究の打ち合わせ、セミナー、学会参加旅費、研究報告書の作成の費用のために、（公財）韓昌祐・哲文化財団に助成金申請を行つた。

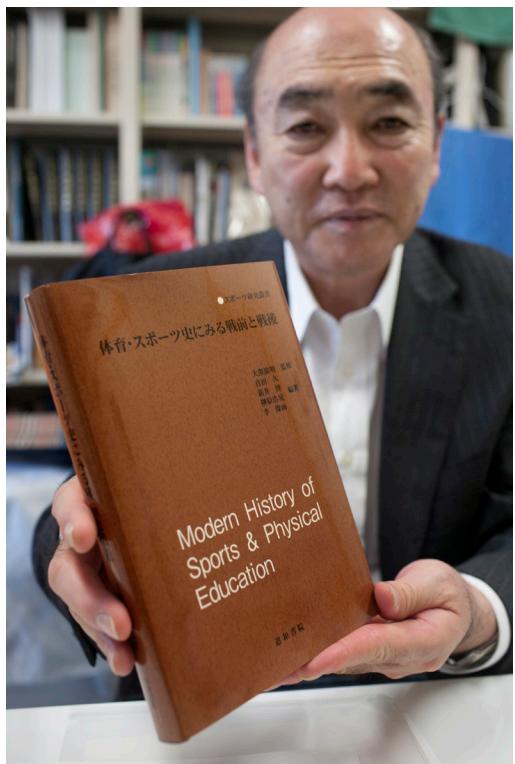
助成金を基に、13年7月には札幌での「東北アジア体育・スポーツ史学会」に3人が参加。14年2月には韓国から、日本で行われるセミナーに韓国人関係者5名を招いている。また同年10月には、韓国濟州島で開かれた韓国体育学会に4名が出席した。こうした日韓両国の相互の訪問・交流の旅費は、計80数万円で、さまざまな支出の中でも大きな割合を占めた。ちなみに、15年には、8月に韓国・釜



大熊廣明



論文集の『体育スポーツ史に
みる戦前と戦後』。大熊によ
る学部生、大学院生への教育
研究指導を基にまとめられ、
2013年に公刊した。



87



大熊と共同で研究をしている韓国からの留学生、李燦雨(左)。「日本
には、大陸から伝わってきた身体運動文化がたくさん残っています」

86



山で学会が開かれている。

大熊は、現在、筑波大学教授の職を定年で退官しているが、筑波大学助教の李燦雨(リチャヌ)と共同で研究を行っている。李はソウル大学大学院修士課程を修了し、筑波大学大学院博士後期課程人間総合科学研究科の体育科学専攻に留学してきた。李は、体育を通して韓国史、日本史のなかの古い文化を掘り起こして次の世代に伝えていくことができればいいと考えている。

「これまで歴史は、政治を中心とした内容が多く語られてきました。しかし国としての政治的枠組みで捉えるのではなく、文化の枠組みという視点から見ていけば、（東北アジアの国々は）あまり差がない、（日本で）近代以降失われたものも取り戻せるのではないかという気がします」

李がいう近代以降失われたもの。それは欧米偏重の体育・スポーツ研究によつて失われた伝統的な身体運動文化という方ができるだろう。

「日本は、幕末以降、ヨーロッパやアメリカの影響が大きく、体育・スポーツ史の研究も、アジアより歐米を中心としたものになつていきました。しかし、それ以前のことによく見ると、大陸、朝鮮半島からの影響がとても大きかつたんです」と大熊は言う。そのことが忘れられてしまつてることによる問題点が現代スポーツに現れないと指摘する。

「近代スポーツはいろいろな矛盾を内包しています。勝利至上主義の弊害(へいがい)もある。そういう中で、スポーツとは何か、身体運動文化とは何かを考えるときに、アジアをきちんと見てみる必要があると思います。そもそもアジアの身体運動文化の考え方は、0・1秒の差などに、あまりこだわりません。どちらが強いとか、どちらが立派かというのはありますが、もう一度スポーツとは何かということを考えてみたい。たとえば、流鏑馬(りゅうさしま)は、馬を走らせながら的を射る競技ですが、誰が一番とかは決め



流鏑馬は、日本の文化として欧米の人気も高く、観光客也非常に多い。流鏑馬の後、小笠原一門の嫡男、清基氏と言葉を交わす。



「零コンマ何秒の差で勝負を決めることだけがスポーツではない」もっと大きな世界があると考えている。

ない。出場するには、流派の中での競争はあるものの、根本には良い弓を射たいというのがある。しかし、誰が1番だった、誰が2番だったということへのこだわりはありません」

そこには欧米のスポーツに対する考え方とは明らかに違う独特の思想があることがうかがえる。ただ、日本の体育・スポーツの起源となつたアジア地域や、中国、朝鮮半島などには、いまはもうほとんどその原型をとどめるものがないともいわれる。

反対に日本には、失われたといつても祭りなどの中に、古代からの体育・スポーツの形が残されていることが多い。地続きの大陸では、新しいものによつて古いものが消されたり、変化させられたりしやすい。一方、周囲を海で囲まれ日本列島には、他国から入ってきた文化が、ほかの文化にとつて代わられることが少なく、大陸から伝播してきたスポーツも、比較的原型をとどめやすかつたからではないかと大熊は分析している。言い換れば、欧米型の体育・スポーツにはない、アジア型の体育・スポーツを研究する条件が、日本にはまだまだ残つてゐるということになる。それだけに、勝利至上主義ではない身体運動文化を研究するためには、日韓・東北アジアの国々が国境を越えて、より交流を深めていくことが重要になる。

「日本と韓国の体育・スポーツ史を研究する上で重要な史料を集め、史料集を編纂する。これらは今後の日本と韓国、ならびに東アジアの体育・スポーツ史研究に資するところが大きいと思われる」

大熊は、そう強調するのだ。

(文中敬称略)

李允希

『話してみよう韓国語』東京・中高生大会2014実行委員会代表／
東京成徳大学人文学部国際言語文化学科教授

語学を学ぶことは楽しい。

その先に必ずや人の出会いがあるからだ。ラジオやアレビのハンブル講座で人気の李允希は、近年、スピーチ大会『話してみよう韓国語』にも参画。中高生に向けた新しい韓国語教育の応援を始めた。寸劇やフォトメッセージを駆使したユニークな課題が若い世代の心を捉え、日韓の未来を紡いでいる。

文＝歌代幸子

写真＝菊地健志



若い世代の夢を育む韓国語教育を



李允希



イ・ユニ◎1957年ソウル生まれ。韓国・梨花女子大学大学院修了。拓殖大学言語文化研究所講師、麗澤大学非常勤講師を経て、現在は東京成徳大学人文学部教授。NHKラジオ・テレビのハングル講座講師。著書に『韓国語マラソン』全6巻、『韓国語の耳をつくる短期集中リスニングドリル』(アルケ)、『ハングル三昧』(学研)など。

朝8時の時報とともに、NHKラジオ第二放送で『まいにちハングル講座』が始まる。

「皆さん、こんにちは。イ・ユニです。今回もやさしい言葉、うつくしい発音を目指して、がんばりましょう」

ついねいな日本語で発音や文法を説明し、温かい口調で語りかけるのは東京成徳大学人文学部教授の李允希だ。

10数年、講師をつとめていても、いまだにスタジオへ入るときは緊張するのだと照れる。毎日の放送を心待ちにする人は多く、たくさんのファンレターが届く。なかには「うちの店へ出すお菓子です」と心尽くしの品も送られてくる。自分が教えるだけでなく双向で関わりたいと、リスナーをスタジオに招いて話を聞くコーナーも大事にしてきた。

今も胸に刻まれたエピソードがある。かつて飛行機で遠方から訪れた年輩の男性がいた。

「どうして韓国語を勉強しようと思われたのですか？」

李が質問すると、男性は大切な友人との思い出を語り始めた。

「でも、自分は彼にすごく悪いことをしてきた。その友人は亡くなる間際、『オレを許してくれ。実はあんたがあれほど嫌いだつた朝鮮人だよ』と、ひとこと言い残して息を引き取ったのだと。『それを聞いて、とても申し訳なかつた。だから、僕があの世へ行つたときには彼と韓国語で話ができるようNHKの放送を聴いています』と言わされたのです」

あまりにも感激して、わんわん泣いちゃつて……と李は懐かしむ。その日は番組の収録もしばらく中断された。



専門は韓国語教育、音韻・音声学。東京成徳大学での講義は韓国からの留学生も聴講する。

本格的な韓国語教育の道へ

李が専門とするのは音韻・音声学。日本で韓国語教育に取り組むことになつたのは、思わぬ道のりだつた。

韓国のソウルで生まれ、医者の一家で4人姉妹の長女として育つた。韓国・梨花女子大学でクラシック音楽を学び、声楽のソプラノを専攻。だが、もとより親の勧めで選んだ進路だけに好きな世界ではなかつたという。

父親が日本の病院に勤めることになり、家族で広島へ。李はソウルで寮生活をしながら、韓国と日本を行き来していた。卒業後まもなく、韓国の大手企業の現代に勤める在日韓国人の男性と知り合つて結婚。日本支社へ転勤する夫に伴つて東京へ移り住んだのは、1980年のことだ。

しばらく主婦業に専念し、一人娘の子育てをしていたが、あるとき、夫の会社の研修に携わる機会があつた。日本人の社員に韓国語を教える講師を頼まれたのだ。

「手探りでやつてみたけれど、これは私にできる仕事ではないと痛感しました。専門的な知識がなければダメだなど。でも、もともと学生時代は国語が得意だったので、やっぱり私は韓国語の先生になりたいと思つたのです」

当時は韓国においても韓国語教育を専攻できる大学が少なく、外国人に教えるための教員免許もなかつた時代。それでも家族でソウルへ旅行した際、思いがけず道が拓けることになつた。母校の女子大を訪ねると、韓国語教育のカリキュラムが大学院に新設されるという案内板が目に留まつた。

八千代キャンパスの学園祭
「第22回翠樟祭」では、チマ
チョゴリ姿で韓国茶礼のお
点前を披露した。





「それを見た瞬間、『あっ、私を呼んでいる』と不思議な感慨を覚えました」

駆り立てられる思いで日本へ戻ると、大学院へ進む道を思案した。その頃、李は韓国教育財団に勤めており、会長からも「学位を取ったほうがいいのでは」と背を押される。会社員の夫に甘えるわけにはいかないと、やむなく父親に学資の援助を懇願したのである。

夫と中学生の娘も応援してくれ、大学院へ進学。週4日をソウル、週末は東京で家族と過ごすため、毎週飛行機で往復する生活が続く。勉学の日々は辛かつたと、李は振り返る。

「韓国でもスタートしたばかりの段階なので、教材はすべて英語で書かれたもの。アメリカでセカンドランゲージとして教えるための教材です。好きな韓国語を学ぶために行つたつもりが、苦手な英語でとても苦労しましたね」

先生たちも外国语としての韓国語教育の専門家は少なかつたため、互いに切磋琢磨せっさたくまする空氣に満ちていた。実際に日本で教えた経験のある李はよく研究室へ呼ばれ、情報交換する機会にも恵まれた。かつて声楽を専攻し、フランス、イタリア、スペイン、ドイツ語の発声法をひと通り学んでいたことも役立つたという。

韓流ブームで高まる学習意欲

3年間の在学中、日本の出版社から依頼されて通信教材の執筆も手がけた。アルクが刊行する人気シリーズの韓国語編である『韓国語マラソン』だ。学習経験のない人から韓国での長期滞在を可能にする中級レベルまでの語学力を6カ月で養成する講座で、全6巻の教材を1年がかりで完成。これが

大ヒットしたこと、さらに予期せぬ仕事が舞い込んだ。

ある日、NHKから連絡を受けて出向くと、応接室に『韓国語マラソン』が置いてあり、ラジオ講座の担当者から「これと同じ放送をしてほしい」と頼まれた。

「私は初心者ですし、自信もなかつたので、どうしたらいいのかすごく迷つたんです。でも、ハングル講座の初代講師である梅田博之先生が監修してくださることになり、それならば、とありがたくお受けしました。梅田先生は韓国語教育では絶大な存在で、音声・音韻学を専門にされている。私にとつては恩師であり、自分の成長につながつたと思います」

人前で話すのは苦手だったという李の番組はそれでも10年続き、その間にテレビのハングル講座でも講師をつとめることになる。2008年度からスタートしたが、番組が始まつてほどなく一大事が起きた。それは忘れもしない、4月21日のことだつた。

「先生、大変なことになつたので、とにかく今日はNHKに来てください」

突然の電話に、李は『決定的なミスをしたのだろうか……』と蒼白そうぱくになつた。ただちに渋谷の局へ向かうが、その道中もまっすぐ歩けないほど動搖し、緊張のあまり交差点の信号もぐるぐる回つて見える。どうにか駆けつけると、担当者は深刻な面持ちで切り出した。

「日本全国の書店に先生の本が1冊もありません」

瞬時には何を言つているかわからず、呆然としていると、

「完全に売り切れまして、増刷しても翌月の放送が始まるまでに間に合わないんです」

担当者としては李を喜ばせようと演出したはずが、本人にとつては嬉しいどころではなかつた。本当に泣きたい気持ちでいたので、言葉もなく啞然としたという。



駐日大韓民国大使館 韓国文化院で開催される「話してみよう韓国語」東京・中高生大会。
審査員講評、表彰後に参加者全員で記念撮影。撮影／畠尾朋子 写真提供／水科哲哉

「ただ、自分の人生を振り返ると、日本で韓国語教育に携わる節目のときに韓流ブームが重なつていた。私もラッキーだつたんですね」
韓国ドラマの『冬のソナタ』がヒットしたことで韓流ブームに火がつき、一気に語学への学習熱も高まつっていく。

若い世代に日韓交流の希望を託す

日本の大学でも韓国語教育のカリキュラムを設ける学部が徐々に増え、李は麗澤大学非常勤講師を経て、東京成徳大学で指導に尽力する。さらに若い世代に裾野を広げたいと考えるなか、「話してみよう韓国語」東京・中高生大会との出合いがあつた。

「話してみよう韓国語」とは駐日大韓民国大使館韓国文化院が主催するスピーチ大会で、2003年に東京と大阪で始まつた。東京大会では10年度から「中高生大会」と「大学生・一般部門」に分けて開催され、中高生大会の事務局長を担つてきたのが合資会社アンフィニジャパン・プロジェクト代表の水科哲哉だ。韓国関連の書籍制作を手がける傍ら、大会の発足から関わつた。

「当初は中高生から大人まで一緒に発表していましたが、韓国語を専攻する大学生や一般の人と比べると、中高生はせいぜい選択授業やクラブ活動などしかないので学習量に大きな差が出るわけです。いくら大会に参加したいという熱意があつても、事前のテープ審査でどうしても落とされてしまつ。ならば中高生のために日頃の学習成果を発表できる場を作りましょうという趣旨で始まつたのです」

こうして韓国語を学ぶ大学生、高校教員と社会人有志による実行委員会が独自に企画・運営するイ



イベントとしてスタート。13年度からは、李が審査委員長と実行委員会代表をつとめた。

大会は3部門あり、スキット部門では指定の台本を暗記して二人一組で韓国語の発音や表現力を競う。フォトメッセージ部門は、風景や植物、食べ物など5枚の課題写真から1枚選んで、その写真から連想するメッセージを詩やエッセイ、寸劇などで発表する。さらに審査の対象にはならないが、韓国に関わる歌やダンスなどのパフォーマンスを演じるステージアトラクション部門も人気だ。

少女時代やKARAなどK-POPの影響で韓流ブームが10代にも広がり、応募者は年々増加。テレビ審査で落ちる人はいるが、審査委員長の李はその通知にアドバイスを書きとめて送る。参加条件を知らずに小学生が応募してきたときは、「これからもがんばって」と手紙とテキストを添えて送った。

大会に参加したことが励みとなつて、実行委員として関わるメンバーも出てきた。かつて事務局長を務めた水科はその成長ぶりをこう見ている。

「回を重ねるほどに、大学生の子たちが自ら率先して動くようになつた。学生主導で任せられるようになってきて頼もしいですね」

中高生大会は寄付金で運営されるため、実行委員が協賛企業などをまわる。学生にとつては貴重な経験となるため、李が社会人としてのマナーや礼儀なども指導してきた。2014年度の大会に際しては、(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成金を申請。近年、100名以上の応募がある大会の開催費用や賞品代などに活かされた。

その後も応募者は増える一方、大会を存続するためには資金面の困難もつきまとうが、李の胸中にはこんな思いがある。

「日韓関係があまり宜しくない時だからこそ、若い世代に私たちの希望を託さなければならぬ。わ



韓国語通訳の講義ではパソコンを使ったCALLのシステムで正確な発音を指導する。

韓国の文化にも親しんでは
しいと李が始めた学園祭で
の茶礼を、毎年楽しみにし
て訪れる人たちがいる。



われわれ、大人がすべきことは中高生の韓国語教育をしっかりとサポートすることで、その成果を披露できる場があつてこそ、子供たちはがんばれます」

最初はK-POPやドラマがきっかけでも、そこから文化の違いに惹かれていく子も多い。また大会に参加した一人の女生徒は、自分が日本人の父と韓国人の母との間に生まれたことを知つて、その現実を見つめるなかで韓国と関わる希望を見出したことをスピーチで語った。

こうして韓国語を学ぶ意欲にあふれ、自主的に大会を運営する学生たち。毎月開かれる実行委員会の会議には李も参加し、懸命に活動に取り組む姿を見守つてきた。

「みんな必死なので、夜9時、10時になることもある。だから、ちょっとと早く終わった日は、『キムチチゲを食べに行こう!』と誘つて一緒に食べに行くんです」

今、李が何より大切にしているのは、若い世代の夢を育むこと。それが心にも温かな希望の灯をともすことを願つている。

（文中敬称略）

卓韋 希姪

京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻博士課程修了

朝鮮時代に描かれた巨大な仏画。

その模写や修復の技法は現代の韓国では正しく受け継がれていない。

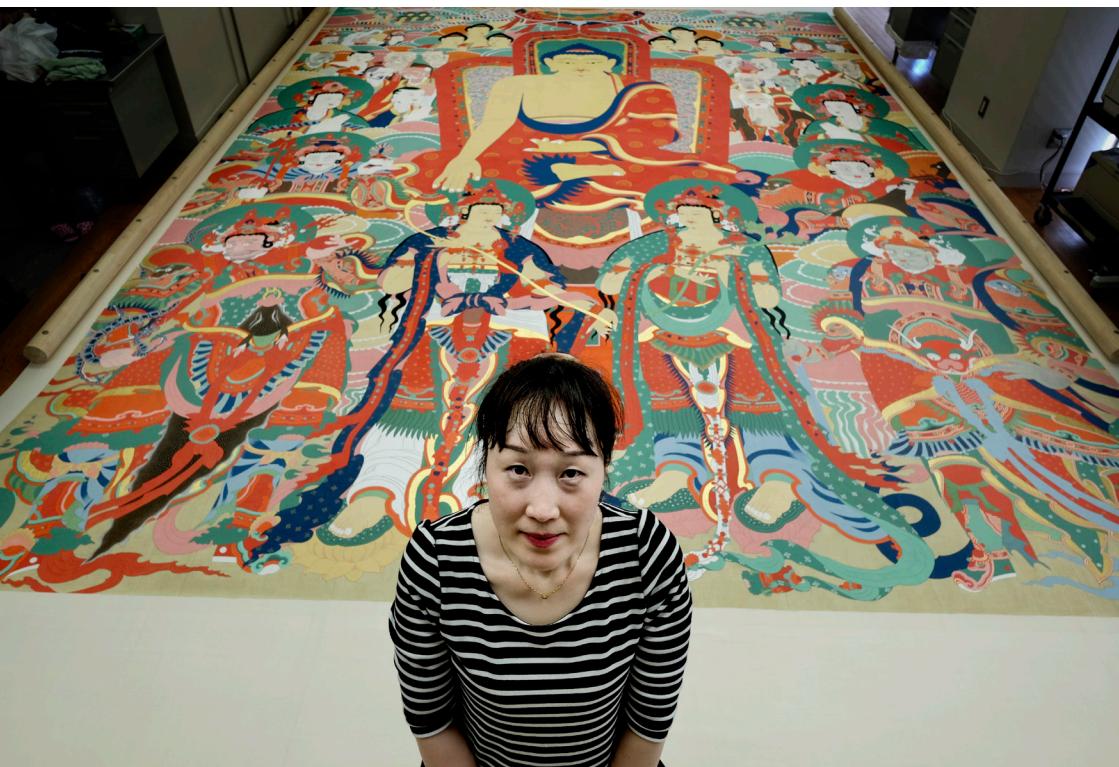
朝鮮仏画の素晴らしさに感激し、「自分が伝えなければ技術が途絶える」と日本へ留学し学んできた韓希姪。

たった一人で巨大な模写を完成させた。

文 千葉 望
写真 渡辺 誠



巨大な朝鮮仏画の伝統を受け継ぐために



ハン・ヒジョン◎1974年生まれ。韓国・東国大学校卒。同大文化芸術学院修士課程と京都市立芸術大学大学院修士課程を修了。京都市立芸術大学博士課程で博士号を取得。韓国と日本で多くの仏画や壁画の模写や修復に参加し、材料や技法の研究活動を行っている。

5人がかりで広げるほど巨大な朝鮮仏画

韓希姫と約束した9月末の日曜日、京都駅から車で20分ほどのところにある京都市立芸術大学のキャンバスは閑散としていた。日程調整に当たつて、韓からは、「休みの日でないと手伝つてくれる人が集まらないので、撮影ができないのです」と言っていたが、なぜ4人の手伝いが必要なのかよくわかつていなかつた。京都にはまだ蒸し暑さが残り、木陰がありがたく感じられる陽気だつた。

指定された広い研究室では韓が明るい笑顔で待つていてくれた。初めに倉庫に入つていろいろいくつかの仏画を見せてもらつた。古典絵画の材料や制作技法を研究するために行つた「模写」のひとつで、額装されており、ガラス越しの対面となつた。下に使われている絹の織りが浮き上がり、緻密な美しさに驚く。

「その織り目も実は描いたものなんです」

と言われ、さらに驚いた。もとの仏画は確かに絹に描かれているが、模写には紙が使われている。この仏画は「現状模写」を目的としたものであり、汚れや劣化も含めてありのままに再現するため、絹の織り目があるならそれも筆で描き出さなくてはならないのだという。実に緻密であり、注意力、集中力を必要とする作業なのである。

その後、韓が5年にわたつて取り組んできた、朝鮮仏画の大作「安心寺靈山会掛仏幀」（韓国清原安心寺所蔵）の模写を見せてもらうことになった。こちらの模写は「古色復元模写」と呼ばれるもの



で、制作当時の完成形を推定しつつ、色調だけは現状の色味に合わせている。

「模写にはもうひとつ、『復元模写』があります。この模写は制作当時の完成状態を、色調まで含めて推定して、原画とほとんど同様の素材と技法を用いて描きます」

次にいよいよ掛仏幀を見せてもらうことになつた。

これが大変だった。4名の手伝いの人たちと協力し合い、巻かれた研究室の幅いっぱいもの大きさのある仏画を、机や壁とぶつからないように、曲がつてしまわないように、声をかけあい、ゆっくりと広げていくのである。裏打ちされた仏画は大変重く、韓の額から汗が流れ落ちた。手伝いの人を必要とするわけである。

10分がかりの作業がようやく終わった時、眼に鮮やかな仏たちが現れた。大きい、横幅481センチメートル、縦が837センチメートルものスケール感で、これを京都芸大の博士課程に進んでから一人で描き続けたのかと思うと、正直なところ唖然とした。近寄ってみれば、緻密さは先ほど見せてもらった小さなサイズの仏画と変わりない。日々、どれほどの思いで描き続けてきたのかと、頭が下がる思いだつた。

人間の肉体の大きさをはるかに超える仏画は、17世紀の朝鮮時代に野外で行われる仏教儀式行事用として作られたものである。これだけ大きな絵画をゆるみのない完成度で描くという行為に対し、「いつたいどうやつて描いたのか?」

という素朴な疑問が湧いてくる。

実際には技術を持つ僧が9人で手分けをして描いたものだという。なるほど、一人で描くには大きすぎる。それを韓はたつた一人で模写した。

模写に対する考え方は国によつて違う。

「一昔前の韓国では、伝統的な技術を使つた正しい模写や修復を学べる大学はありませんでした。そもそもどのような模写や修復が正しいのか、誰もわかつていないので韓国の絵画文化財保護の現状です。自分がやらないと、そういう伝統的な技術が完全に途絶えてしまうと強く思いました」

韓国と日本で基本的な画材の種類や扱い方は変わらない。ただ、日本では伝統的な技術が守られ受け継がれているが、韓国ではほぼ途絶えてしまつた。

祖父母の篤い信仰心を受け継いだ孫娘

韓の母方の祖父母は大変に仏教の信仰の篤い人々だつた。寺院を創建して寄付し、祖母はあまりにも信仰心が強かつたため、亡くなるまでその寺院に住まわせてもらつていたほどだ。韓も仏教や寺院に親しみがあり、長い休みはお寺で過ごした。韓国では2002年から寺院文化体験プログラム「テンプルステイ」というお寺で過ごす休暇が盛んになつたが、そのようなプログラムがない頃から韓は山の中にある寺院で過ごす休暇が大好きで、子供心にも清々しく感じていたという。

「韓国では仏像の後ろに仏画をかける習慣が今でも受け継がれていて、それが古くなれば新しいものを描いてもらう習慣があるため、仏画を描いて食べていくことができるんです」

美大への進学をめざしたときも、いざれば仏画を描きたいと志していた。韓が進んだ東国大学校には仏画を学べる学科がある。学部では仏画を描く技術を学んだが、大学院の修士課程に進む頃には仏画の背景にある佛教思想や美術史についても学んだ。

部屋いっぱいの大きさの模
写をすべて一人でやりとげ
た。指導教授は「絶対無理
だ」と言ったという。





98年には1年間、東京に語学留学している。

「美術史は外国语の論文が読めないといけません。仏教美術では日本語の論文が多いので、日本語の読み書きができるようになりたいと留学しました」

今の韓は読み書きともに日本語が堪能である。

彼女が修士課程の2年目、「清原 安心寺掛仏幀」の展示作業に関わる機会があつた。こんな大きなものをいつたいいどうやつて描き、使つてきたのだろう。自分がこの研究をする時が来たら、絶対に再現し、研究して、制作工程を記録してみたい。ただ文献を集めて論文を書くのではなく、自分で描くのだ。そんな気持ちが頭をもたげた。

韓国で大学院に在籍していた時には韓国・釜山金剛仏教美術院の絵仏師を掛け持ちし、終了後はしばらく梁山通度寺聖宝博物館の学芸研究員としても働いた経験を持つ。通度寺では奈良の元興寺文化財研究所との共同プロジェクトとして、靈山殿の壁画修理に参加した。

その縁で研究留学生として京都市立芸大の修士課程に入学、その後、博士課程に進んだ。修復や模写の現場にも参加して、技術を磨いているうちに当時の絵師たちの心情にも思いが広がり、共感を抱くようになつたという。

「一人では絶対無理」と言われた模写に取り組む

韓には経験を積みながら考えたことがある。現在の日本では仏画よりも仏像のほうが親しまれているし、古ければ古いほどありがたがられる。修復する際も上からピカピカに塗りなおすことはしない。

「私も新しく塗ることには違和感を持つていて、日本のやり方の方が好きですね。新しいものを喜ぶ韓国の考え方は文化財処理にも影響していて、どれほど丁寧に修復しても、依頼したお坊さんたちがわかつてくれない（笑）。お金をかけたのに直っていないじゃないかと言われてしまうんです。その認識も変えないといけませんね」

今では昔から伝わってきた材料の作り方も途絶えようとしている。数年前にソウルの南大門^{ナムデモン}を修復したところ、塗り直した顔料が剥^はがれ落ちてしまつて大問題になつたが、韓によればその問題も昔からの材料を使った技術が途絶えてしまつたから起きたのだという。

「だから私は人生をかけて、古くから伝えられてきた良いものを受け継ぐうと思つたのです」

安心寺の掛仏幀の模写・復元に取り組もうとしたのは、京都芸大の博士課程に進む時だつた。試験の面接でこの目標を伝えたところ、教官たちから「絶対に無理だからやめたほうがいい」と諭されたという。

教官たちがそう言つたのもしかたがないと思えるほどの大きさなのである。それでも彼女はやめなかつた。時間はもちろん画材だけでも多額の資金がかかる。

「両親は独身を続ける私に結婚しろとも言わず、おまえの好きな道を進めばいいと応援してくれました」

ひとつひとつ、当時の手法を学びながら再現していく。たとえば仏画を裏打ちする韓国苧麻^{ちよま}を昔ながらの手法で作れるのは、釜山市無形文化財の仏画匠・権栄寬^{クォンヨンガクン}しかおらず、韓は権に直接指導を受けた。手間もお金もかかる大変な作業だというが、それだけに受け継ごうという若者がいない。自分がやらないで誰がやる、の意気込みだった。



韓 希 妍



韓が愛用する筆の数々。種類の多さに驚かされる。大きな仏画でも細部は実に精密に。そのための筆が必要なのだ。



119



長い時間をかけ、一人で絵の具を調合して描いていく大きな仏画。
色のトーンが変わってしまわないようにデータを記録し照合する。

118



しかし、個人が取り組むにはあまりにも大きなテーマだった。何度も資金が尽きて「もうダメかもしれない」と絶望的になつた。しかし不思議なことに、その都度助けの手が差し伸べられた。（公財）韓昌祐・哲学文化財団の助成金にも応募することにした。

資金が尽きかけたとき助成金が決まり、号泣

「私は当時の仏画師たちと同じ気持ちになりたいと、毎朝研究室に入るとまず経を読み、それから作業を始めました」

集中すると時間を忘れた。徹夜することも稀ではなかつた。模写していると、当時の仏画師たちと対話しているような気になる。あまり上手でない仏画師にもそれなりの頑張りがうかがえ、共感してしまうのだという。

それからいよいよ下絵描き、彩色へと進むが、絵の具を分析した通りに調合していくのも大変な手間がかかつた。

「作業は丁寧な計画のもとに進められた。まず安心寺の資料収集や基礎調査を行い、その後、他の寺院で壁画模写事業に参加した。ここでは韓国で行われている模写について学び、問題点も把握した。いよいよ安心寺掛仏幀の模写に取り掛かると、まず現物を20枚に分割した写真コピーを使って、原寸大の影印本を作製した。その後絵の具となる顔料を分析し、それを再現する下準備を行つた。何分にも絵が大きいため、絵を描くための紙のドーサ引き（膠液にミョウバンなどを加えて塗り、絵の具が滲んだり垂れたりするのを防ぐ作業）、裁断や紙継ぎも大変な作業となつた。



こちらも韓が模写した仏画。元の絵が描かれた絹の織り目まで筆で描いて再現した。



京都生活も長いがここ暮
らしが気に入っている。両
親はいつも「好きなことを
やれ」と応援してくれる。

選考結果を待つている間、韓には辛い出来事があった。母が乳がんを患つて手術し、釜山の病院で抗がん剤治療を受けたのである。このとき韓はちょうど釜山で仏画匠の指導のもと、掛仏の裏打ち作業に取り組んでいたため、昼は作業をし、夜は病院に付き添うという生活が3カ月間も続いた。

母を看病しながらも、一方では自分自身の今後への不安でひどく落ち込む日が続いていた。

「だから、選ばれたという連絡をいただいたときには嬉しさのあまり、病院で号泣してしまったんです」

当時の不安や選ばれたときの高揚感を思い出したのか、話しながら韓は涙を流した。実際、助成金が下りなければ志半ばで模写・復元を諦めなければならなかつただろう。

巨大な絵にもかかわらず、私たちが細部まで見事に模写されている。それを見ていると、韓の手を通して17世紀の朝鮮時代の仏教徒たちの祈りにつながつていくような気さえする。色は鮮やかだが自然の材料を使っているためか印象は柔らかく、全体の調和がとれていることも特徴だろう。

5年をかけた作業は模写だけではなく、論文としても結実した。「絶対無理だ」と言っていた教官たちはどうコメントしたのだろう。

『韓さんじゃなければできなかつた』と言われました（笑）』

今後は論文をまとめた本を韓国と日本で出版したいと考えている。そして、身につけた修復や模写の技術を生かして、韓国の人々にもそれを伝え、素晴らしい伝統を多くの人たちに受け継いでもらいたいという。

父親の事業が傾いたり、母親が病気をしたりと辛いことも多かつたが、それを乗り越えて完成させた掛仏幀の見事さが韓の努力を物語ついている。この成果が韓国でも認められることが、彼女の願いである。

（文中敬称略）

「子供たちに笑顔を」モットーに韓弓普及

上野 密

全国肢体不自由児者父母の会連合会常務理事・事務局長

韓弓(ハンゴン)ターツのように、的に向かって矢を投げる

韓国生まれのスポーツである。幼い子供から高齢者まで楽しめて、彼の地では大会も盛んだ。

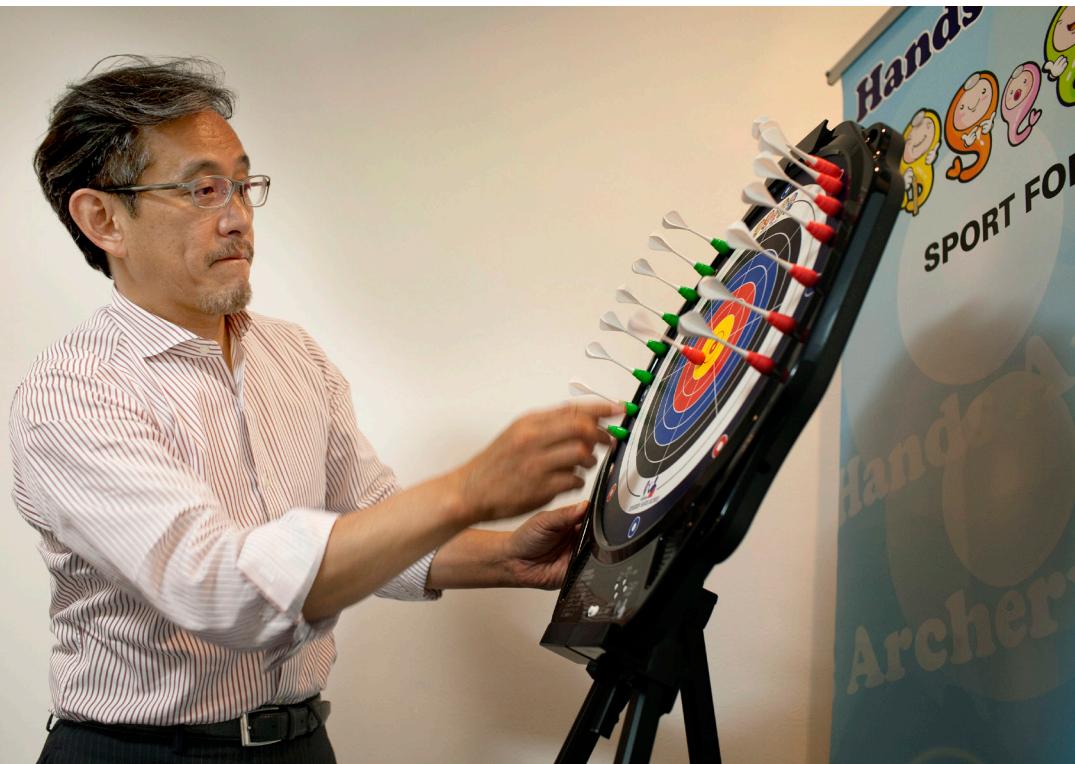
「参加できたら障害児たちもきっと喜ぶ」と

補助具を開発したのは、全肢連事務局長の上野密。

本家韓国で国際親善交流協議会を実現させ、

世界の子供たちに笑顔の輪を広げている。

写真：渡辺誠
文：村尾国士



うえの・みつる◎1959年生まれ。帝京大学卒業後、84年に社団法人全国肢体不自由児者父母の会連合会入職。初代事務局長の父のもとで海外障害者団体との交流事業などに取り組む。2004年事務局長、09年に常務理事就任。13年、韓国発祥の韓弓を導入、肢体不自由の子供でも参加できる補助器具を開発し、全国で普及活動を推進。

会場前のロビーは「ぱりあふりーフエスティバル」と名づけられ、各種車椅子から車椅子用の衣類、障害者向けの寝具、防災グッズなどが展示され、介護補助犬までいる。文字通り障害者の祭典だが、そのロビーでひときわ異彩をはなつのが「ハンドアーチエリーエクスperience」だ。イーゼルに架けられたカラフルな矢（ボード）に向け、これまたカラフルな矢（ピン）を投げる。一見ダーツに似ているが、ピンの先は針ではなく磁石なので危険性はまったくない。ピンがボードに当たると、軽快な音が鳴り、得点が表示される。大人、子供、高齢者用にボードまでの距離が分けられ、そのシートも敷かれている。

つまり、子供からお年寄りまで3世代にわたって楽しめるレクリエーションスポーツである。発祥

瀬戸内海に面してそびえ建つサンポートホール高松。3階に1500席の大ホールがあり、2015年9月中旬、そこで一般社団法人 全国肢体不自由児者父母の会連合会（以下、全肢連）の第48回全国大会が開催された。

ホール前のエントランスには障害者が描いたグラフィックアートが飾られ、揃いの赤いシャツを着た数十人のスタッフたちが北海道から九州までブロックごとに並び、受け付けを行っている。開会前から続々と集まつてくる参加者は中高年層が中心だが、松葉杖をつく人、車椅子の少年、少女らも混じっている。年1回の全国大会で久しぶりに顔を合わせる人たちも多いのか、笑顔で手を握り合う。

障害者の祭典・全肢連全国大会で



は韓国で、同国では韓弓(ハングン)と呼ばれ、高齢者の大会も盛んに行われている。これを日本に導入したのが全肢連だが、手足が不自由な子供でも参加できるよう独自に補助器具を開発したのが同事務局。

開発の先頭に立った事務局長の上野密(うえのひのぶ)は常務理事も兼ねており、全国大会の運営全般を取り仕切っている。国会議員、地元県知事や市長など来賓も数多く、上野はホール内外を行き来しながらスタッフたちにきべきと指示を与えていた。その上野がロビーに出てくるたび、目をやるのがハンドアーチエリー体験コーナーだ。自分たちが導入し、開発した遊具が参加者たちにどう受けとめられているのか、気にしているように見える。

体験コーナーのまわりには物珍しそうに人が集まるが、なかなか手を出そうとしない。数人の中年女性グループがやってきて、スタッフの説明を受けた1人が挑戦した。1回、2回とピンを投げる。ボードの中心近くに当たるにつれ音が長く鳴る。女性は歓声をあげ、別の女性が交代して挑戦。健常者の小学生、老人と続き、ボードに当たるたび、手を叩いて喜び合う。その様子を遠くから笑顔で見ていた上野は、やがて大会開始が近づき、会場に入つて行つた。

韓国の障害者団体と草の根交流を始める

現在、47都道府県に肢体不自由児者の父母の会があり、それを連合会として束ねてしているのが全肢連である。会員数3万5千人の大組織で、発端は1950年代に遡る。当時、ポリオが全国的に発生し、罹患した多くの子供が手足の自由を奪われた。また、先天性脳性麻痺や後天性の脳疾患などで肢体不自由になる例は戦前からあり、障害児をかかる父母は子供を家や病院に閉じ込めがちだった。これ

に対し、「療育」を提唱したのが東京大学医学部教授の高木憲次(たかぎけんじ)。「すべての子供に人権と幸せを」と肢体不自由児協会を立ち上げ、研鑽の勉強会を開いたりした。

これが各地に広まり、61年11月、全国的な組織をめざす全肢連が発足した。名誉会長に高木教授、初代会長には厚生大臣を務めた橋本龍伍(はしもとりょうご)が就任。橋本は橋本龍太郎元首相の父親であり、自身が腰椎カリエス患者でもあった。発足当初は24都道府県が加盟、現在の半分ほどの規模だったが、こうした組織が継続し、さらに発展するには、行政のバックアップに加え、財政的基盤の確立が不可欠となる。

そこで80年、常務理事・事務局長として迎えられたのが上野義雄(うえのよしお)、現在の事務局長の父である。義雄は長男・密が出生時に股関節脱臼を患つたこともあり、障害児に深い関心を抱いていた。また、貿易を手がけるビジネスマンであり、韓国産の麺を輸入し、障害者団体に販売したりしていた。上野義雄は全肢連本部事務所として東京の自宅を提供、事業部を立ち上げ、車椅子用の三輪自転車を開発販売するなど、さまざまな事業展開を行つた。

なかでも特筆すべきが海外の障害者団体との交流事業である。国際障害者年の81年秋、韓国脳性麻痺福祉会のチャリティー晩餐会(ばんさんかい)に招かれた義雄は、同国でベストセラーになつていて了崔京子(チエキヨンジヤ)の著書に出会つた。脳性麻痺児として生まれたわが子を社会的差別と闘いながら育てる記録で、感動した義雄は知人の在日韓国人と協力し、翌年、『この罪なき子に光を』のタイトルで邦訳出版した。これが反響を呼び、「同じ悩みを持つ日本と韓国の母親の懸け橋になれば」という共通の思いから、日本全肢連と韓国脳性麻痺福祉会の姉妹血縁の調印に結びついた。

ここから日韓の草の根的な交流が始まる。当時、海外渡航が厳しく制限されていた韓国から、毎年の全肢連全国大会に招待を受け、日本の障害児教育やリハビリテーションなどについてアドバイスを

3万5千人の会員を擁する全肢連の全国大会で、会場ロビーには障害者用の日常品が展示。





1500人の大ホールが埋まった全肢連全国大会で、上野は基調報告を行った。

行つた。また、韓国脳性麻痺福祉会の祭典「オットギ祭」（オットギは脳性麻痺患者の愛称）に、毎年、日本からの代表団を派遣、交流を深めていった。

全肢連の国際交流事業は、さらに加速する。84年、日本、韓国、英國の脳性麻痺の青少年たちが集まり国際親善交流キャンプ、全肢連結成25周年にあたる86年には、7か国350名の障害者同士の交流キャンプを日本国内5か所で開催した。この頃には企業の社会貢献活動の機運が高まり、コカ・コーラグループが全肢連の事業を支援するようになつた。ソウル五輪・パラリンピックを翌年に控えた87年、日韓親善車椅子バスケットボール大会、同じ年に日韓親善リハビリテーションシンポジウム開催と、めざましいばかりの活動ぶりである。

「子供たちの笑顔」を親子2代で支える

上野密は、父・義雄についてこう語る。

「海のない栃木県の子供たちに海を見せてやりたいと、大勢を引き連れて江の島に出かけたりしていました。そんな父でした」

全肢連は障害のある子供たちの親の会、「子供たちが笑顔で楽しむと、親御さんも笑顔になる」、これをモットーにさまざまな事業に取り組む父の姿を身近に見て育つた。

「学生時代、身体障害者が車椅子で海外に行く『翔んでる仲間』という事業が行われ、私も介護ボランティアとして参加しました。子供たちの生き生きした笑顔に感動しましたね」

大学卒業後、3年半ほど一般企業に勤めた密は84年、社団法人になつていた全肢連に入職し、事務



密の弟・上野賢がハンドアーチェリー補助具の使い方を指導。子供、大人、高齢者が体験。



財団助成を得て作成したハンドブック。遊び方やルールを見開きで詳しく説明している。



全国大会会場ロビーに設けた「ハンドアーチェリー体験コーナー」。的に当たると音が鳴り得点表示。



局員として父の下で働くようになつた。ちなみに密の弟・賢^{まこと}もそのうちに全肢連に入職する。こうして親子2代にわたる活動が始まつた。密の入社した時期は、前述したように全肢連の国際交流事業が本格化し始めた頃である。韓国との草の根交流の道を拓いた父の仕事を手伝いながら、密は中国の障害者団体との交流事業を実現した。

「車椅子の子供たちにとつては、まず外へ出ることが大切なんです。一般的の子供たちが行ける所に、ハンドルを下げれば障害のある子供も行けます。それには人的バックアップ、制度的なものが必要です。あるいは海外でイベントを行う際も、みんなで合理的に配慮すれば障害者も飛行機に乗れるし、乗り継ぎもできます。日本国内でも、まず車椅子で外へ出ることによつて、国内の社会環境が変わつてくるんですね」

全肢連事務局の仕事は、こうした交流事業の折衝や手配に始まり、機関誌の発行、政治家や行政への働きかけ、企業への支援依頼など実に多岐にわたる。いわば縁の下の支えを親子2代で30年余り続けてきた。2004年5月、上野密は3代目の事務局長に就任、その翌年、父の義雄が他界した。

「障害者をめぐる環境は、この30年余りで制度的に良くなつてきてはいますが、生活面ではまだまだ不安な部分が多いというのが実情です。そこをどう切り拓いていくか、父もそうでしたが、障害のある子供たちが笑顔になれば、親御さんも笑顔になれる。それを見る喜びが私の原動力ですね」

車椅子でも楽しめる韓弓開発・普及活動へ

韓国は「グンド（弓道）の国」としてつとに知られている。オリンピックのアーチェリー競技では

金メダル・メダル獲得数ともに世界1位を誇る。そんな韓国も高齢化社会を迎える。高齢者が気軽に楽しめるレクリエーションスポーツとして、09年に生まれたのが前述の韓弓。投げる運動によって脳が活性化しリハビリ効果もある。子供たちにとつては運動集中力や学習集中力を向上させることもできる。つまり、お年寄りが孫とともに楽しみながら競い合える新スポーツなのだ。

これに着目したのが全肢連事務局、韓弓を取り寄せたものの、大きな課題があつた。

「手足が不自由で車椅子に乗つた子供は投げることができません。でも、プレーに参加し、的に当てる達成感をなんとか体験してほしい。それにはどうすればいいのか……」

上野は事務局員たちと考え、ピンを飛ばすための補助器具の開発を思いついた。養護学校教師たちのアドバイスを受けたりしながら何度も試行錯誤を重ね、できあがつたのが「ハサス」と呼ぶ補助具である。反射的な振り子の原理を応用したもので、ラバー製の台（ペダル）を軽く手で押すだけでピンが飛ぶ。手が使えないなら肘を置いてもよく、これなら車椅子のままでもプレーできる。

この韓弓セットをハンドアーチエリーと改称、全国に普及する計画を立てた。まずルールなどを記した説明書作り、全国30か所での体験教室、そして韓国でのハンドアーチエリー国際親善交流競技会開催と夢がふくらんだ。その資金として上野は、（公財）韓昌祐・哲文化財団に申請し、助成を得た。財団に申請した事業内容はすべて達成され、その詳細な記録が全肢連機関誌「わ」14年2月28日発行号に掲載された。韓弓本体は韓国から輸入し、表示を日本語に変え、現在約300台が全国の支援学校や施設に導入されている。また、補助具ハサスは韓国に輸出され、まさに日韓合作の証しなつている。

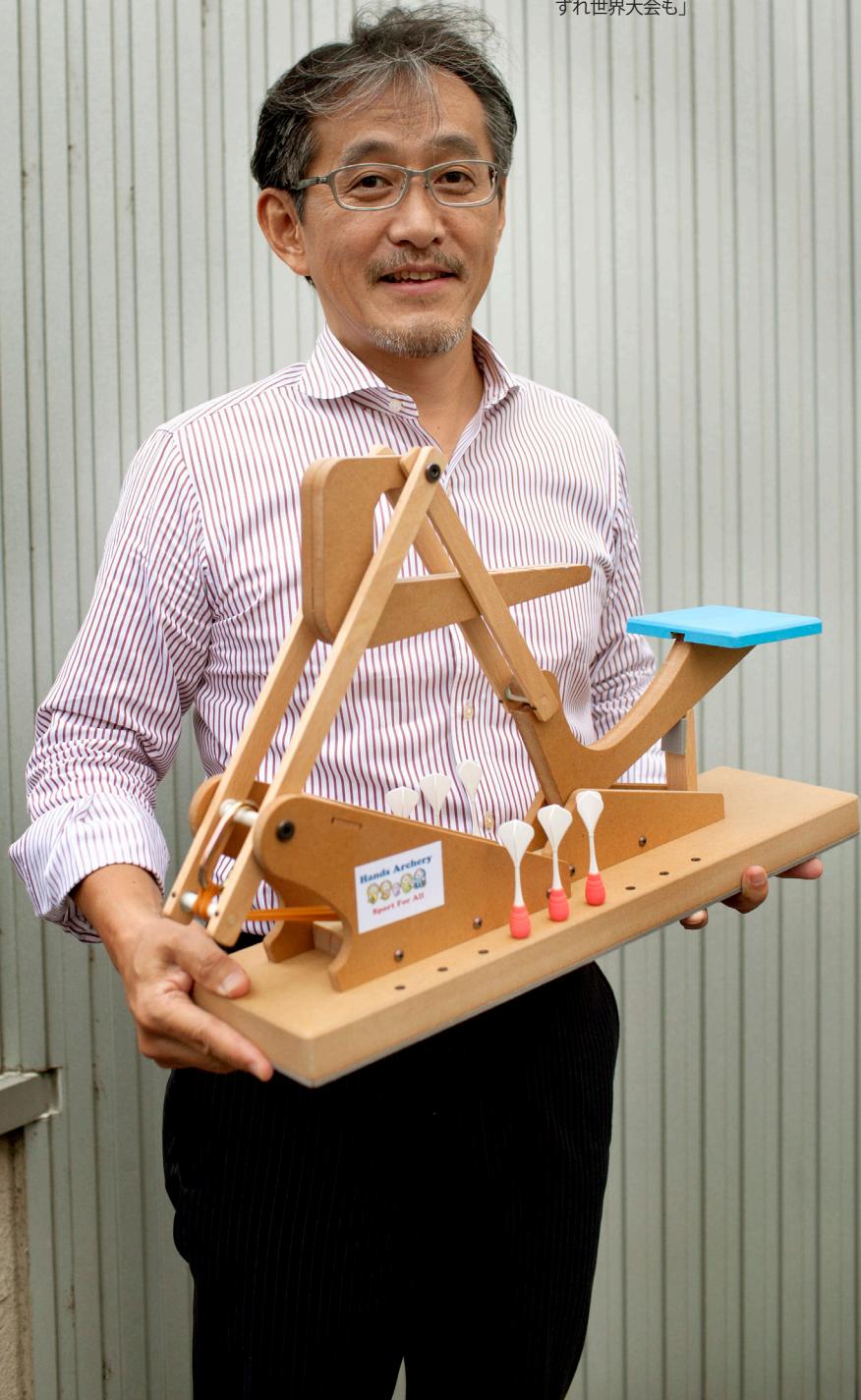
さて、話を冒頭の全肢連全国大会に戻す。大ホールがほぼ埋まる盛況のうちに大会は進行し、休憩

時間になつた。ロビーのハンドアーチェリー体験コーナーに人だかりがし、そこへ母親の押す車椅子に乗つた10歳くらいの少女がやつてきた。的をめがけて投げる子供たちを見ていた少女は、母親に「やつてみる?」と言われ、口をゆがめ上半身をよじつた姿勢でかすかにうなずいた。

ハサスの横に車椅子を止め、母親が少女の左手をペダルに置く。1回目、ピンはボードの手前で床に落ちた。2回目も届かない。まったく無表情のままの少女に「頑張れ!」と声がかかつた。上野密だつた。3回目、ピンがボードめがけて勢いよく飛び、的に当たつた。ピィという軽やかな音が鳴る。「やつたア!」上野が叫び、まわりの人たちも一斉に拍手した。母親は満面の笑顔で周囲に頭を下げ、無表情だった少女が頬と口元を動かし、上半身をはげしくのけぞらせた。全身で表す喜びがそこにあつた。

(文中敬称略)

事務局で開発した補助具
「ハサス」。韓国に輸出され、
日韓の障害者が楽しむ。「い
ずれ世界大会も」





中国の東北三省が米の名産地として歴史を刻むのは、今から100年ぐらい前のことである。農村の労働力の移動を研究テーマとする朴によると、その頃、稻作技術を担うたのは、植民地下で半島の農地を追われた朝鮮人移民、のちに朝鮮族と呼ばれる人々だった。

「実は、私の祖母もその一人です」今も国境を果敢に移動し、環境に順応する朝鮮族のパワーは、日中韓友好の礎になっているという。

文＝西所正道
写真＝菊地健志

木敬玉

学習院女子大学非常勤講師／一橋大学大学院特別研究員



パク・キョンオク◎1977年、中国吉林省延辺朝鮮族自治州生まれ。
2000年、現在の吉林財経大学を卒業し、帝京大学大学院を経て、
一橋大学大学院社会学研究科修士課程（04-06年）、同研究科博士
課程（06-11年）。09年、第5回太田勝洪中国学術研究賞受賞。現在、学習院女子大学非常勤講師、一橋大学大学院特別研究員。

「朝鮮族」というルーツに導かれて

人が生きていく中で巡り合う複数の「点」をどう結びつけていくかで、人生は違つたものになつていいく。

一橋大学大学院特別研究員、朴敬玉の場合、一つの「点」は、彼女の生まれ育つた中国吉林省延辺朝鮮族自治州で出あつた「日本」であろう。

「私の周りには、幼い頃から日本にまつわるものが珍しくなかつたのです。私の家の中には日本の絵本がありましたし、親戚のうちにも日本の童話集があつたのを覚えています。親戚の家は私が住む町からバスで1時間半以上かかる、田園地帯が広がるところにあつたのですが、そこに朝鮮語で書かれた、かなり分厚い童話集が置いてありました。小学生のときには、それを読むのを楽しみにしていました。浦島太郎の物語などが面白かつたですね」

よく考えれば、これらは吉林省含めた中国東北部一帯が、旧満洲であつた事實を裏付けるものなのだが、日本の絵本は忌避する対象とは捉えていなかつたようだ。

朴が生まれたのは1977年。1972年の日中國交正常化、78年の日中平和友好条約が調印とう、久々に訪れた日中蜜月の真っ只中であった。

「アニメでは『一休さん』、山口百恵さんのドラマ『赤いシリーズ』、中学3年のときには高倉健さんが出ていた映画『新幹線大爆破』を見まして、私たちの世代にとつては日本は憧れの国だつたのです」朝鮮族学校では朝鮮語で授業が行われていたが、小学2年から中国語の授業、そして中学、高校で



近現代東北アジア地域史研究会後の懇親会。慶應義塾大学日吉キャンパスで。

は、第二外国語の授業があつた。日本語、英語のどちらかを学ぶのだが、朴は日本語クラスに入った。全部で8クラスあつたが、日本語は5クラス、英語は3クラスで、日本語に人気があつた。

朴の父親は、発動機の設計が専門で、当時、中国農業部延辺農学院（のちに延辺大学に合併）農機学部で教鞭をとつていた。この学校には日本語学習センター（日语培训班）があり、ここには農業系大学や専門学校に勤務する人が日本語を勉強するために来ていた。受講者の何人かは日本への留学を果たしたという。母親も日本語学習センターで雑務を手伝つていた。

朴の家の近くには、延辺農学院農学部の試験田が広がつていたという。田植えから稻穂が青々と茂る風景、そして収穫されていくまでをなんとはなしに眺めていた。

その頃すでに、日本、水田という、将来の研究テーマを示唆するような「点」がちりばめられていたのだが、それらを結合する役割を果たしたものといえば、皮肉なことだが、その後に朴の身に降りかかる厳しい試練であつた。

朴が11歳（小学5年生）のとき、父親が他界したのである。

大黒柱を失つたことで、一家は窮地に立たされる。

母親は日本語学習センターの仕事をやめ、学生相手に漬け物を売る商売を開始。2人の兄も仕事に就き妹を支えた。彼女は成績優秀であつたため、大学への進学を希望していたからである。
「父が亡くなった頃、1番目の兄（大哥^{ダーリー}）は延辺大学経済学部4年生で、2番目の兄（二哥^{アーリー}）は中学校2年生。地元の水道局に就職した大哥と、高校を途中でやめて広東省深圳の韓国企業に就職した二哥、そして母の3人が力をあわせて、私の教育費などを捻出してくれました。母の苦労を思うと、いまも涙が出ます」



周囲の期待とは裏腹に、大学受験は思うに任せなかつた。北京大学を志望していたが、もう少しのところで不合格になる。挫折感を味わいながら、長春税務学院（現在の吉林財經大学）で大学生活を送るが、卒業後、学問の道に進むという夢を果たすべく、修士課程のある帝京大学大学院に留学する。同学院と帝京大が姉妹校という関係があつたのだ。日本への留学時には、大哥が100万円近い借金をして支度金を用立ててくれたという。

学費や日々の生活費、借金を返済するため、最大4つのアルバイトを掛け持ちした。東京・国立市に住んでいたため、JR中央線沿線にある弁当屋、居酒屋、牛丼店、レストランで働いた。多いときは月27万円を稼ぎだし、借金は1年半で完済した。

「ご想像のとおり、これだけアルバイトに追われていては研究なんてできません。本末転倒なんですが、当時はそつするしかなかつたのです。でも、こういうひどい状況に置かれたことで、いつか時間があつたら、思う存分研究がしてみたいという強い欲求がわいてきました」

日本に来て数カ月後、朴はいまの夫と知り合う。家の近所にある一橋大学は著名な国立大学であることは知つており、入学のための情報を得ようと、留学生課の掲示板を何気なく見ていた。すると、国費留学生の一次選考にパスした受験者の名前が貼りだされていた。そのなかに「崔學松」という名前を見つける。どう考へても朝鮮族の名前だと思い、留学生課事務局を通してつないでくれるよう頼んだのだ。

無事修士課程に入った崔は、朴が入学するまで全力でサポートした。なかでも同じゼミの先輩である権寧俊（現・新潟県立大学教授）を紹介されたことで、入学への扉が開かれた気がした。入試のための的確な指導を受けられたからだ。

そうして、みごと一橋大学大学院への入学を果たす。2004年のことである。

朴は、修士から再スタートを切ることを決断する。博士課程にいきなり行くより、修士で積み上げたほうがよいという崔や権の勧めもあつたからだ。

所属した社会学研究科の担当教員の専門は、歴史社会学だつた。一橋に入る前から朴は、「労働力の移動」ということに、少しづつ興味を持ち始めていた。

深い記憶に刻み込まれた話がある。それは幼い頃、祖母から聞いた話である。

祖母一家はもともと、いまの北朝鮮の北端にあたる咸鏡北道に住んでいた。

しかし1910年の日韓併合後、土地調査事業により、農民は土地を取り上げられてしまう。しかも穫れた米は日本に回すため、1910年代後半以降の朝鮮の農村社会は疲弊し、農民は食うにも困るような状況に陥る。

〈中国（東北部）に行けば食べ物には苦労しないようだ〉

そうした話が住民の中で流れていた。

「それは祖母がまだ小さい頃だつたようです。川を渡つて、延辺に来たのだという話をしていました。川というのは豆満江^{トウマンガン}だらうと思いますが、親族10数名が北を目指して1週間ぐらい歩いたようです。小さい頃というのはいつかは定かではありませんが、祖母は1911年生まれですから、1910年代だらうと思います」

研究テーマが決まつた。

〈農村における労働力の移動〉

祖父父母たちはまさに、農村における移動によつて未来を開いてきた人だつた。そのとき、朴ははつ

近現代東北アジア地域史研究会で発表する。演題は「近代における越境民族－朝鮮人移民をめぐる民族関係」。





きり意識していなかつたかもしれないが、研究は結果的に朝鮮族のルーツ、ひいては自らのルーツを探ることにもつながっていくのである。

大学院での生活が始まつて間もなく、前出の権寧俊から、一冊の本を渡される。

『近代満洲稻作の発達と移住朝鮮人』（ソウル国学資料院）。著者は金顥（キムヨン）（現遼寧大学教授）だつた。読み進めるうちに、中国東北地域の稻作が、中国、朝鮮、日本の近代史と複雑に絡み合っていることを初めて知る。

「従来の研究では、同じテーマでも、封建主義支配とか、地主と小作の対立といったことが強調される傾向が強かつたのですが、金先生が書いた論文は、漢人地主と朝鮮人の小作農との間には強い経済的結びつきがあつたこと、いわば共存関係が成立していたことが書かれていた。新しく、面白い視点だと思いました」

同時に、朴が子供の頃、日常的に見てきた水田が、実は祖先たちの移住史と密接につながつていたことも発見だつた。

「環境に適応するためには稻作に従事しながら、一生懸命に生き抜いてきた姿を知りたいと思いました」「生き抜く」という表現を彼女は使つたが、自分自身も日本という異国に移動ってきて、故郷の母や兄たちの思いを背負つて懸命に生き抜いてきた。その思いが、朝鮮族一世の気持ちと共振したのかもしれませんなかつた。

父親の没後、回り道ばかりしているとしか思えなかつた体験が、ちらばつていた日本、水田、祖母の歴史といった「点」を一つにまとめる力となつたのである。

民族の融和を生んだ稻作文化

朴は、関係する一次資料を集め、丹念に読みこんだ。崔も手を貸してくれた。関連資料を図書館から借りてくれたり、学会に同行して、親しい学者を紹介してくれたり、あるいは研究計画書を細かくチェックしてくれたり……。そうして研究を進めるなかで、先行研究者、松村高夫の唱える説に、違和感を持つ部分を見つける。

それは、「朝鮮人の二系列移動説」である。端的にいえば、1920年代後半以降、朝鮮北部出身者と南部出身者で、中国のどこに移動するかが違つており、それを分析すると、二つの傾向に分かれると唱えた説だ。

第1ルートは、北部朝鮮の出身者は畑作技術をもつていて、間島（カンド）、つまり朴の出身地延辺などの周辺地域に移り住んだ。

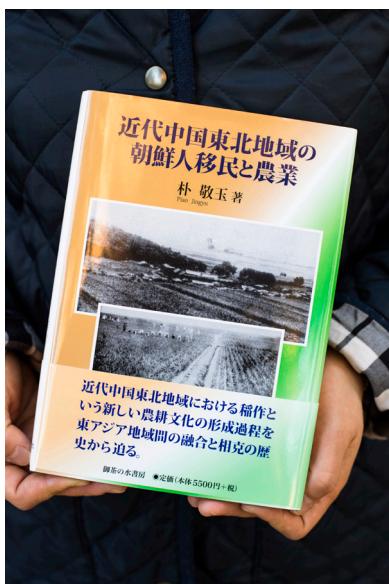
第2のルートは、南部朝鮮の出身者は、稻作技術を媒介して北満と南満、つまり今の黒竜江省や遼寧省といった地域に移動した。

しかし複数の資料をあたるうちに、それだけでは説明がつかない事実が浮かび上がってきた。そこで朴は、（公財）韓昌祐・哲文化財団から得た助成金などにより、移民一世らに聞き取り調査を展開した。

「黒竜江省の五常市という米どころでは、個別にアポなしで聞いて回つたのですが、かなり大変でしたね。ただ、吉林省海林市にある新安鎮という町は、父が育つたところなのですが、そこの鎮長を務



助成金で実現した中国黒竜江省延寿県での聞き取り調査の模様。
聞き取りの相手は『延寿県朝鮮族百年史』（北京・民族出版社、2005年）の編者・安承哲。写真提供／朴敬玉



初の単著『近代中国東北地域の朝鮮人移民と農業』（御茶の水書房）を2015年に出版。

めていた方に父のことを話すと、親しみを感じてくださったのか、いろいろな人に電話をして紹介してくださり、話を聞きました。とくに中国では、人間関係のあるなしが調査を左右します。それ以外には高齢者が集まる施設があつて、そこにも通つていろいろな昔話、エピソードを聞き取りました」
朝鮮族民族史を編纂している人がいて、そうした人からもかなり参考になる話が聞けたという。
そうした調査研究の中で見えてきたのは、次のようなことだつた。

1920年前半までは、北満には北部朝鮮出身者が88%を占めていた。しかも1922年当時、北満へ移住した朝鮮人を詳細に見ると、南満（間島を含む）からの移住者が約7割を占めていた。朝鮮出身者は北満に限らず、耕作しやすい場所を求めて、積極的に移動していたのだつた。前出・松村の説は貴重な分析ではあるが、朝鮮族はもつと頻繁に移動を繰り返していたのである。

稲作は1920年以前は、南満を中心だったが、札幌から移入した品種の札幌赤毛が北満での稲作を可能にし、20年以降、北満へと向かう人の数を増やす要因となつたのである（これについてはあとで詳述）。

「そういえば父が子供の頃、学校から自宅に帰つたら、家に誰もいなくなつていて、どこに行つてしまつたのかわからず困つた、という話を聞いていました。今回聞き取りをした漢族の人の中にも、近所の朝鮮出身の人が、家財道具も持たず突然どこかに移住したエピソードを語ってくれました。後者の例は、日本人がもともと住んでいた漢人や朝鮮人を強制的に立ち退かせて、そこに日本人開拓民や朝鮮人避難民を入れさせ水田を開拓させるということをしていたので、怖くて逃げたのだと教えてくれましたが、父の例に関してはまつたくわかりません。言えることは、とにかく頻繁に移動を繰り返したものだということです」



移動と直接結びついているかは不明だが、日韓併合以降、日本の臣民のような朝鮮人、日本の侵略の手先である朝鮮人を小作人として雇つて水田を耕作してはいけない、というような規制が、中国政府から地主である漢人に出でていたようだ。

しかし、聞き取りをしてみると、地主である漢人は、朝鮮人を憎んではおらず、むしろ稻作という収益性の高い農業を持ち込んでくれることを評価し、また美味しいお米を作ってくれることを喜んでいたという話を得た。

「地主と朝鮮人の間には経済的依存関係があつたからか、政府の指示など聞かず、稻作をそのまま続けていた。地方にはそれなりの対策があつたということです」

中国には「上に政策あり、下に対策あり」という言葉がある。国民は国の政策にそのまま従わず、抜け道を探す国民性を表現した言葉だが、それを如実に表す出来事である。

こうした国の政策と国民とのズレは、在満洲の日本人の間でも起きていたようだ。満洲国成立後は、満洲でたくさんのお米をつくると、日本内地米に脅威を与えるのではないかという危惧を農林省が訴え、満洲における米の生産を規制した。しかし現場の日本人たちはその規制に必ずしも従つていなかった。

「満鉄（南満洲鉄道）の品種改良をする技術者たちは、いざというときのために、満洲でのお米の品種改良を続けていたのです」

前記したように、品種改良の中で、日本の品種が採用されている。最初は朝鮮在来種だが、うまく栽培できないこともあつたのだ。そこで1913年には、吉林省各県の代表30人が、北海道旭川市の水田開拓事業を視察してから、札幌赤毛という品種を吉林省立農学校付属試験場で試作させてい

る。最初は全滅に近い状態だつたが、日本人と朝鮮人移民が力をあわせ、数年のうちに収益をあげる状態にまでなつたという。それが移住する朝鮮出身者の手によって北満各所に水田技術を伝播していくのである。

戦後は稻作へ参入した漢人たちが、東北三省での米作りの発展に寄与した。そしていまや、東北三省は中国全土の米生産量の約1割を供給する生産地となり、前出の黒竜江省五常市などは美味しい米をつくる生産地として有名だという。

こうした事実関係が明らかになるにつれ、朴には思うことがあつた。

「日本の帝国主義のもとでは、日本と朝鮮を、支配と抵抗というような対立関係の中でとらえる傾向があります。しかしお米という視点から見ていくと、まったく違う面が見えてきた。一言でいえば『民族の相克と融合』。つまり、稻作という文化を通じて、政治的には対立しているはずの日本人と朝鮮人、中国人が、一緒になつて美味しいお米を作り上げていった。長い歴史の中を見ると、友好の一過程だつたとも言えます。戦後70年が過ぎて、こうした視点も含めて、もつと多様な視点で東アジアの未来を考えてもいいのではないかと思います。もちろん侵略を美化するわけではないのは言うまでもありますね」

さらに祖先に対する想いもあつた。

「国家の規制などが緩い地域、いわば社会のすき間みたいなところで花を咲かせて一生懸命生きる自分の祖先たちの姿を知つて、そういう生き方に興味を覚え共感しました。私もそういう生き方に影響を受けていました」

この研究は朴にとって自らのルーツをたどることになつたが、朝鮮族の本質を見つめ直すきっかけ

ともなつた。

それは朝鮮民族は移動の民であるということである。朴自身も2007年、日本で崔と結婚をし、子供ももうけた。崔は静岡文化芸術大学講師を務め、朴も学習院女子大学でも非常勤講師を務めている。故郷の人たちも、北京や上海、韓国に働きに行つたりしている。結果として、生まれ育った町では過疎が起きているわけだが、いまも朝鮮族は流動していることにあらためて気付く。

「1930～40年ぐらいに日本人が書いた本を読むと、『朝鮮人はよく移動して、大きなお金を目指す』と書いてあるんですね。少ないお金には満足せず、もつと大きなお金を目指して移動すると。それに對し『漢人は、定住して、わずかなお金でもためて一生懸命に暮らす』と書いてある。なるほどなと思ひましたね。いまも変わつていなないな、とも」

朴はこの研究を始めて、自分の内面で生じたある変化を実感している。

「それは、自分は朝鮮民族であるという気持ちですね。研究を始める前ももちろんありましたがあ、その思ひがよりは強くなっているかもしれません」

（文中敬称略）



2016年4月から日本学術振興会外国人特別研究员に就任予定。男児2人を保育園に預けての研究生活が続く

青鶴

7

学術論文集

内藤陽介

K-BOOK振興会

筑波大学体育・スポーツ史研究会

切手・郵便物で再構成する朝鮮戦争

成城大学文芸学部非常勤講師
内藤陽介

「メディア」という語は、現代の日本語では主に「報道（機関）」の意味で用いられることが多いが、本来の意味は「（情報伝達などの）媒体」である。その意味では、郵便はきわめて興味深いメディアと考えることができる。そもそも、通信手段としての郵便は、それ自体がメディアであるわけだが、郵便に使用される切手や消印なども、本来の郵政業務とは別の次元においてメディアとして機能しているからである。

日本の郵政は株式会社化されてしまったが、歴史的に見ると（現在でも多くの国では）切手は国家の名において発行されてきた。政府というものは、ありとあらゆるチャネルを使って自分たちの主義主張や政策、イデオロギーなどを宣伝しようとするのが本来の姿であるから、

政府が切手を通じて、自己の政治的正統性や政策、イデオロギーなどを表現しようとすることはきわめて自然なことである。

たとえば、多くの国は、戦時には国民に対しても戦争への協力を求め、戦意を昂揚させるための切手を発行するし、領土問題を抱えている国であれば、切手に取り上げられる地図は自国の主張に沿つたものとなるのが当然である。もちろん、オリンピックなどの国家的行事に際しては記念切手が発行される。日本では明治の元勲・伊藤博文を暗殺した犯罪者として認識されている安重根が韓国では「義士」として切手に取り上げられているように、歴史上の事件や人物が切手に取り上げられる場合、そこには発行国の歴史観が投影される。

また、特段に政治プロパガンダ臭の感じられない切手であっても、その国を代表する風景や文化遺産、動植物を描く切手は盛んに発行されており、こうした切手が郵便物に貼られて全世界を流通することによって、全世界の人々はその国の片鱗に触れることができる。

一方、郵便料金前納の証紙として郵便に使用されるという面にも着目すれば、消印の地名から切手の使用地域を特定し、発行国の実際の勢力範囲を特定することが可能となる。郵便局という「役所」を設置し、官営事業としての郵便サービスを独占的に提供するということは、そのまま、権力の行使にほかならないからである。

『新約聖書』の「マタイ福音書」22章には、ナザレのイエスがローマ皇帝の肖像が刻まれたコインを手に「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に」と答えたという一節がある。これは、通貨（貨幣・紙幣）の発行と流通が国家権力の行使と密接に結び付いてきたことを示す言葉として知られているが、通貨の場合には、一部の特殊な例外を除き、いつ・どこで使用されたかという、その痕跡が残ることはまずない。

これに対しても、切手の場合には、原則として再使用を防ぐために消印が押されるから、（地名・日時などの情報が）これに對して、切手の場合には、原則として再使用を

報が明瞭に判別できる状態であれば、という条件はあるものの）資料として搭載している情報量は、通貨に比べて飛躍的に拡大すると考えてよい。

また、外国郵便では、相手国の切手の有効性は相手国そのものの正統性を承認することと密接に絡んでおり、非合法とみなされた政府の切手の貼られた郵便物は、受け取りを拒絶されたり、料金未納の扱いをされたりする。さらに、郵便物の運ばれたルートやその所要日数、検閲の有無などからは、当時の状況についてのより深い知識を得ることもできる。このような場合、郵便活動の痕跡そのものが、その地域における支配の正統性を誇示するためのメディアとして機能していると考えてよい。

切手・郵便物の読み解き方は他にもある。

すなわち、印刷物としての切手の品質は発行国の技術的・経済的水準をはかる指標となるし、郵便料金の推移は物価の変遷^{（へんせん）}と密接にリンクしている。そして、こうした切手上に現れた経済状況や技術水準についての情報もまた、その国の実情を、切手の発行国が望むと望まざるとにかくわざわざわれに伝えるメディアとなっている。このように、切手を中心とする郵便資料は、さまざま

くれる。しかも、切手を用いる郵便制度は、19世紀半ば以降、世界中のほぼすべての地域で行われているから、各時代の各国・各地域の切手や郵便物を横断的に比較すれば、各国の国力や政治姿勢などを相対化して理解することができる。

したがって、資史(史料)としての切手や郵便物は、歴史学・社会学・政治学・国際関係論・経済史・メディア研究など、あらゆる分野の関心に応えうるものである。そうした郵便資料を活用することで、複合的かつ多面的なメディアとしての「郵便」、すなわち、ポスター・メディアという視点から国家や社会・時代や地域のあり方を再構成する試みが、筆者の考える「郵便学」である。

さて、こうした郵便学の興味・関心からすると、1945年以降の朝鮮半島現代史、特に、朝鮮戦争（韓国戦争）を中心とした時代は実に魅力的な対象といえる。

朝鮮半島の現代史は、日本の敗戦とともに伴う米ソの分割占領から始まるが、当時の切手や郵便物は（特に米軍政下の南朝鮮および大韓民国において）1945年の解放以前、すなわち日本統治時代の遺制を継承することなしには、その後の朝鮮半島現代史も成立しえないことわざわざ明らかにしてくれる。これは、ともすると、

下のイデオロギー論争から「国連軍」を批判する左派陣営が積極的な活動を行つていたし、朝鮮戦争の特需によつて急激な戦後復興を果たし、講和独立を達成したわが国のような事例もある。

それゆえ、「国際内戦」としての朝鮮戦争は、文字通り、世界的な規模の事件として、きわめてスケールの大きな戦いだったわけで、当然、その影響は関係諸国の切手や郵便物にも及んでいる。

以上のようなことを踏まえ、本研究では、朝鮮半島現代史の原点ともいいうべき時代として、1953年7月の朝鮮戦争休戦にいたるまでの歴史的経緯を、さまざまに切手・郵便物を用いて再構成を試みた。その具体的な成果物としては、2014年8月に上梓した拙著『朝鮮戦争ポスタルメディアから読み解く現代コリア史の原点』（えにし書房）と、内外の切手展に出品した作品「Korea and the Cold War 1945-1953（邦題：朝鮮戦争）」があるが、本稿では後者の内容を抜粋して紹介したい。

切手・郵便研究の分野においては、研究成果の発表形式として「展示」が重要視される。

すなわち、A4判よりやや大きめの台紙に資料の実物を貼り込み、その周囲に研究成果などを書き込んだもの

“日帝強占期（韓国での日本統治時代の呼称）”と“解放後”的連続性から目を背けがちな、朝鮮半島現代史のイメージに対するカウンターとなるのではないかと思われる。

また、東西冷戦という国際政治の文脈の中での分断国家であるがゆえに、南北双方の発行する切手には、それぞれの立場やイデオロギーが明確に反映されているほか、郵便(物)の上にも、さまざまなかたちで明瞭な痕跡が残されている。なお、韓国と北朝鮮は、ともに、朝鮮民族の国家として近代以前の歴史的背景や文化的伝統を共有しているため、同じ題材を取り上げた切手もしばしば発行されているが、それだけに、こうした切手を比較することによって、両者の置かれた状況の差異がより明確に感知できるのも興味深い。

さらに、朝鮮戦争には、本来の当事者である韓国軍と朝鮮人民軍（北朝鮮軍）のほか、国連軍の名の下に米軍を中心とする十六ヵ国が部隊を派遣し、これに対抗して、北朝鮮国家の崩壊を防ぐために中国人民志願軍も参戦している。さらに、部隊を派遣しなくても医療チームなどを派遣するというかたちで参加した国もあつた。ヨーロッパでは、直接、戦場に人員を派遣しなくとも、冷戦

（リーフ）を一定数集めて構成・展示するという形式である。この「展示」による発表が全国規模の展覧会で行われる場合、それぞれの展示は総務省ないしは同省所管の財團法人によって認定された専門の審査員による審査の結果、出品者の獲得した点数に応じて、金（85点以上）、金銀（75点以上）、銀（65点以上）などの各賞によって業績としての格付けがなされる。そして、ここで金銀賞（最低点は75点）以上を獲得した「展示」は、国際切手収集・郵便研究連盟（Federation Internationale de Philatélie）の主催する世界展覧会において発表する資格が与えられる。

こうして世界展覧会での発表資格を得た「展示」は、各々の国際展覧会の事務局（主として切手・郵便研究の専門家で構成される）に「展示」の要旨・概要を提出し、事前の書類審査を経た上で国際展覧会での発表が認められることになっている。国際切手展においても、専門の審査員により業績としての評価・格付けがなされるが、その点数とメダルとの関係は、金賞が90点以上、金銀賞が80点以上というように、国内展に比べて5点の差がある。なお、国際切手展出品作品に割り当てるフレーム数（リーフ数）は、初出品もしくは84点（金銀賞の上

限)以下の作品は5フレーム(80リーフ)、過去に85点(大金銀賞の最低点)以上の評価を得た作品は8フレーム(128リーフ)である。

今回の助成による研究成果(の一部)としての作品「朝鮮戦争」は、2012年11月に開催の全国切手展〈JAPEX〉に「冷戦と朝鮮」の題名で金賞(85点)を受賞し、国際切手展の出品資格を得た後、翌2013年8月にタイ・バンコクで開催の世界切手展〈Thailand 2013〉に『Korea and the Cold War 1945-1953』の題名で初出品し、大金銀賞(88点)を受賞し、以後、8フレームでの出品資格を獲得した。

作品は英文で、1フレーム(16リーフ)、「①The Origin of the Cold War in Pacific Asia (アジア太平洋における冷戦の起源)」、②Division by the 38th Parallel North (北緯38度線での南北分割)、③Regime Change in the Far East (極東における新国家の樹立)、④Internationalized Civil War (国際内戦)、⑤Cease-Fire in the Context of the Cold War (冷戦という文脈における休戦)から原則編年体の5部構成で、1945年から1953年の朝鮮戦争休戦までの朝鮮半島史を軸に、背景となる国際関係についても、

関連する切手・郵便物を展示した。

世界切手展〈Thailand 2013〉の後、「朝鮮戦争」の作品は、部分的な修正を加え、2014年の全国切手展〈JAPEX〉ならびに2015年の〈日韓国交正常化50周年記念・韓国切手展〉にも出品し、現在は、8フレームに規模を拡大して世界切手展に出品すべく、準備を進めている。

本稿では、以下、本誌別稿の記事(42~59頁)で紹介した切手との重複をなるべく避けつつ、作品全体の構成がつかめるように、全80リーフのうち40リーフを抜粋して紹介していただきたい。

第1章 アジア太平洋における冷戦の起源

第1フレーム(リーフ番号I-16)は、作品全体の構成と関連の地図を示したタイトルページに続き、朝鮮半島現代史の前提として、アジア太平洋地域における冷戦の起源についてまとめている。また、展示の全体を通じて、各章の冒頭には、その章の内容を年表化するとともに、その章で取り扱っている時代を象徴するようなマテリアルを展示する章扉を設けている。このため、第1章の実質的な内容は4リーフ分になる。

1910年以来、日本の統治下に置かれていた朝鮮半島を、日本の降伏後、どのように取り扱うかについて連合諸国が初めて言及したのは1943年11月、ローズヴェルト、チャーチル、蒋介石の三国首脳によつて発せられたカイロ宣言が最初である。同宣言では、中国の要請により、「朝鮮人民の奴隸状態に留意し、しかるべき順序を経て朝鮮を自由かつ独立のものとする」という一項が盛り込まれ、のちに、ソ連もこれを承認。ともかくも日本降伏後の朝鮮の独立といふことが、連合諸国的基本方針として確定した。

ところで、日本の降伏は1946年以降にずれ込むものと考えていた米国は、実際に日本が降伏した1945年8月の段階では、朝鮮については信託統治下に置くという以外、なんら具体的なプランを持つておらず、1945年6月に確保した沖縄を最前線として、来るべき九州上陸作戦の準備を進めていた。

これに対して、ソ連は、早くから、来るべき日本との戦闘を想定し、満洲から逃ってきた中国人および朝鮮人の遊撃隊員による第88独立狙撃旅団(88特別旅団)を編成し、ハバロフスク郊外のヴァツコエで軍事訓練を行い、金日成^{キム・イルソン}こと金成柱^{キン・ジョン}もそこに参加していた。

1945年8月6日、広島への原子爆弾投下により日本敗戦が決定的になると、同9日、ドイツ降伏後3ヶ月後の対日参戦というヤルタ会談の密約に従つて、ソ連は日ソ中立条約を破つて日本に対して宣戦を布告。満洲の国境を越えて南下し、16日には朝鮮北部の清津港を占領した。

この間、15日に昭和天皇の玉音放送によつて日本の降伏の意思がラジオで公表され、日本の朝鮮統治も終了することになつた。しかし、急速に南下するソ連軍が朝鮮全土を占領することを危惧した米国は、朝鮮を米ソの共

KOREA AND THE COLD WAR

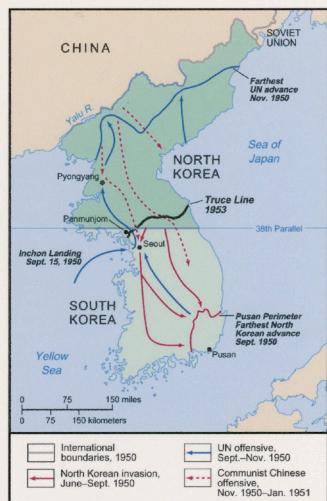
1945-1953

This collection is an historical survey of Korean peninsula and its surroundings from the end of WWII in 1945 to the cease-fire of the Korean War in 1953.

PLAN OF EXHIBIT

1. The Origin of the Cold War in Pacific Asia

- 1-1 Korea during WWII
- 1-2 The Allies Planning for the Post-War Regime
- 1-3 Soviet entry into the War against Japan
- 1-4 Japanese Surrender



2. Division by the 38th Parallel North

- 2-1 The U.S. Military government of South Korea
- 2-2 North Korea under the Soviet Occupation
- 2-3 Moscow Agreement
- 2-4 Soviet Preparations for de facto Two Koreas

3. Regime Change in the Far East

- 3-1 Establishment of Republic of Korea
- 3-2 Establishment of DPRK
- 3-3 Chinese Communist Revolution in 1949

4. Internationalized Civil War

- 4-1 Outbreak of the Korean War
- 4-2 Defense against the North Korean Invasion
- 4-3 Counterattack by the U.N. Forces
- 4-4 Chinese Entry of the War

5. Cease-Fire in the Context of the Cold War

- 5-1 Dead Rock of the War
- 5-2 Japanese Re-Independence
- 5-3 End of the Korean War

1 タイトル・リーフ

切手展の出品作品では、冒頭に、作品の題名と全体の構成（プラン）を示したタイトル・リーフを展示することになっており、本作品もそれに従っている。また、全世界から集まる審査員・参観者は朝鮮半島の地理や韓国戦争の推移についての知識に乏しいことが予想されるので、戦争の大まかな推移を示した地図も掲載している。

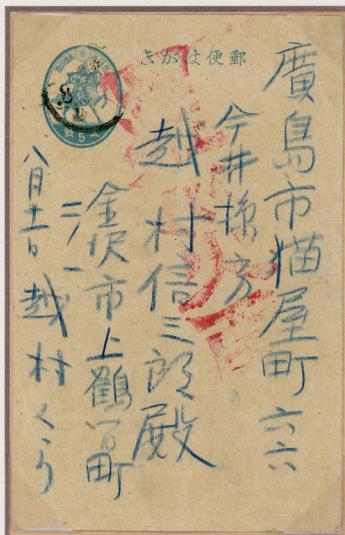
同管理に持ち込むためには、ソウルを含むだけ広い範囲を占領することが必要と考え、ソ連に対し、日本本土をアメリカが単独占領する代わりに、朝鮮については北緯38度のラインで両国が分割占領することを提案。こうして、同年9月2日、東京湾停泊中のアメリカ軍艦ミズーリ号上で日本の降伏文書が調印されると、連合国軍最高司令官のマッカーサーは、各地の日本軍の降伏を受理する担当国を指定するために、連合国（軍）最高司令官総司令部一般命令第一号（一般命令第一号）を発し、朝鮮半島に関しては、北緯38度以北はソ連極東軍司令官が、同以南は合衆国太平洋陸軍部隊最高司令官が、それぞれ、駐留日本軍の降伏受理を命じた。

年表

1943年11月	米英中のカイロ会談で、戦後の朝鮮独立の方針が決定。 米英ソのテヘラン会談はそれを承認
1945年02月	米英ソのヤルタ会談
1945年05月	欧州大戦の終結：ソ連の対日参戦予定が8月に決定
1945年06月	米軍が沖縄本島を占領
1945年07月	ポツダム宣言
1945年08月	広島に原爆投下 ソ連の対日参戦：ソ連軍、朝鮮半島北部に進駐 昭和天皇による終戦の玉音放送：朝鮮半島の解放
1945年09月	降伏文書の調印

1-2-5 ATOMIC BOMBS ON HIROSHIMA AND NAGASAKI

On 6 August 1945, the United States, which planned to secure its superiority in the Pacific-Asian area after the war, dropped an atomic bomb on Hiroshima in order to deal Japan a fatal blow and to force it accept the Potsdam Declaration before the Soviet entry into the war. On 9 August, another one was dropped on Nagasaki. Both of them killed more than 200,000 people.



A postcard mailed to Hiroshima immediately after the atomic bomb. It was returned to the sender with a red cachet saying, "Catastrophe! Return to Sender."



A postcard mailed to Hiroshima three days after the atomic bomb. Although the address was near ground zero, the addressee had narrowly escaped and went to a refugee camp, where this card was transferred.



← imperf

9 広島への原爆投下

敗戦直前の日本に決定的な打撃を与えた広島への原爆投下を扱ったリーフ。左の葉書は被爆直後の1945年8月11日、爆心地近く宛に差し出されたものの、配達不能のため「罹災戻」の印を押して返戻された葉書。一方、右側の葉書の宛先も爆心地近くだったが、名宛人は九死に一生を得て宮島口に避難していたため、避難先に転送された葉書である。下段の切手は「広島平和祈念都市」の記念切手の下辺目打漏れエラー。

1-2 THE ALLIES PLANNING FOR THE POST-WAR REGIME

1-2-1 THE CAIRO CONFERENCE

In November 1943, Roosevelt, Churchill and Chiang Kai-shek met in Cairo to discuss the "new order" in the Pacific-Asian area following the war. As a result of the conference, it was decided that Korea should be liberated from Japan.



three leaders at the Cairo conference

The decisions of the three nations were accepted by Stalin, who met Churchill and Roosevelt at the Teheran Conference.



A German forgery criticizing "Marriage of kingdom with communist at Teheran?"



original of the above



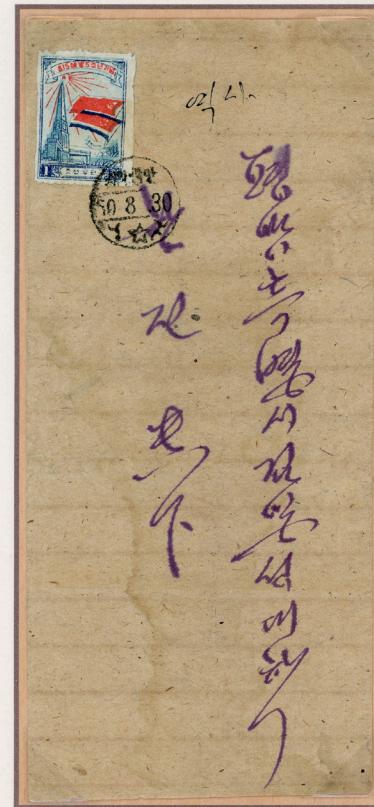
In July 1943, extraterritorial rights of the United States and the United Kingdom were abolished in advance of the Cairo Conference.

5 カイロ会談

連合諸国によって戦後の世界秩序が決められていった経緯を示したリーフのうち、カイロ会談について扱ったリーフ。カイロ会談については、韓国・北朝鮮には関連の切手が発行されていないので、中国の不平等条約撤廃の記念切手が貼られた郵便物や台湾の記念切手を中心に構成した。左上は、カイロ会談の内容を承認した米英ソのテヘラン会談を「野合」と皮肉ったドイツのプロパガンダ・ラベル（上）と、その元になった英国の切手（下）。

1-3-3 SOVIET OCCUPATION OF NORTH KOREA

The Soviet Army reached Unggi, one of the northern end cities of Korea on 12 August 1945, and continued to go southward. It expanded its occupation area in Korean until 15 August.



A cover, mailed from Seoul to New York on 15 August 1946, has 20 commemorative stamps of the 1st anniversary of the liberation. The rate of foreign mail for the United States is 10 won, that is, half won x 20.

A cover, mailed from Anju to China on 5 January 1953, has North Korean Commemorative stamps of the 7th anniversary of the liberation. Rate of regular mail for China is 20 won.



13-14 朝鮮解放

1945年8月15日の日本敗戦による朝鮮解放を表現したリーフ。左は光復1周年に際して米軍政下の南朝鮮で発行された記念絵葉書。日章旗を踏みつけながら、太極旗を掲げて行進する韓国人を描いている。葉書の印面に描かれた李舜臣の亀甲船とあわせて、「日本からの解放」を強調するデザインとなっている。行進しているのは韓服の人物が多いが、日本統治時代の学生服や国民服を着ている人物も描かれており、解放後も日本統治時代の生活様式が人々の間で残っていたことが結果的に明らかになっている。一方、右側は、南朝鮮で発行された解放1周年の記念切手（額面は50チョン）が20枚貼られた米国宛の郵便物。米軍当局によって開封・検閲されたため、左端は米軍のセロハンテープによって再度封をされた痕跡も残っている。

12 ソ連軍の北朝鮮進駐

1945年8月13日、ソ連軍は国境を越えて雄基から朝鮮半島に侵入し、半島北部を制圧。9月2日の降伏文書の調印後は北緯38度以北を占領下に置いたが、このことは「ソ連による朝鮮の解放」と称された。このリーフでは、ソ連の強い影響下にあった北朝鮮が、ソ連による朝鮮解放の周年記念切手の貼られた郵便物を2点並べているが、どちらの切手にも、ソ連軍に感謝して平壌に建てられた解放塔が描かれている。



15-16 降伏文書の調印

1945年9月2日の降伏文書調印を表現したリーフ。上段左は、降伏文書調印の会場となつた米軍艦ミズーリ号に設けられた郵便局から、調印当日に差し立てられた郵便物で、『TOKYO BAY』、『JAPANESE FORMAL SURRENDER』(日本の公式な降伏)の文言が入つてゐる。なお、日本では一般に8月15日が『終戦の日』とされているが、世界的に見ると、降伏文書調印の9月2日が対日戦勝記念日とされることが多く、上段右のフィリピンの郵便物でも9月2日付の記念印が押されている。

一方、下段は日本が連合国に占領下に置かれたことを示している。左側は、連合軍の一員として日本占領に参加した英連邦軍(オーストラリア軍を中心に構成)の野戦郵便局から差し立てられた郵便物で、オーストラリア切手に『B.C.O.F. JAPAN 1946』(英連邦占領軍/日本/1946年)の文字を加刷した切手が貼られている。一方、右はGHQが差し出した料金無料の『連合軍郵便』の実例である。

第2章 北緯38度線での南北分割

第2フレーム(リーフ番号17-32)は、朝鮮半島が米ソによって南北に分割占領された後、それぞれの地域で占領行政が行われていた時期についてまとめている。

降伏文書の調印とマッカーサーによる一般命令第一号を受け、1945年9月8日、米軍は仁川港に上陸。

翌9日、京城(現ソウル)の朝鮮総督府第一会議室で降伏文書の署名が行われ、朝鮮半島の北緯38度線以南の地域での米軍政が始まった。当初、米軍当局は旧朝鮮総督府の機構とスタッフを基本的に継承して占領行政を円滑に進めようとしたが、このことは南朝鮮の人々の大きな反発を招いたため、米軍は朝鮮総督府を廃止して米軍政府による直接統治を実施した。

一方、第二次大戦後のソ連は、自国の周囲を藩屏(はんぺい)となる衛星国や友好国で固めることで自国の防衛を図る方針を立て、朝鮮を自立させるまでの暫定的な占領地域の境界であった北緯38度線を封鎖したうえで、赤軍大尉だつた金日成こと金成柱を擁立してソヴィエト体制化による

衛星国建設を目標とした占領行政を展開する。

CHEONGHAK

南北朝鮮の占領行政が始まつたことを受けて、1945年12月27日、米・英・ソ3国外相が戦後処理を協議するためモスクワで会談し、いわゆるモスクワ協定がまとめられた。同協定では、5年間を限度として朝鮮を信託統治下に置き、その後、南北統一の民主的政府を樹立することが決められていたため、即時独立の世論が強かつた南朝鮮では激しい反託(信託統治反対)運動が展開され、社会的に大きな混乱が生じた。

これに対しても、ソ連は北朝鮮内の信託統治反対の世論を抑え込むとともに、米国との話し合いにより南北統一臨時政府を樹立することは不可能と判断。北半部を衛星国として確保すべく、1946年2月8日、事実上の北朝鮮単独政府となる北朝鮮臨時人民委員会(長・金日成、土地改革(日本人や親日派の所有地と、5町歩以上の朝鮮人地主の所有地、さらに全ての継続小作地が没収されて土地なき農民に無償で分配された)、重要産業の国有化などの社会主義化を急速に進めていった。

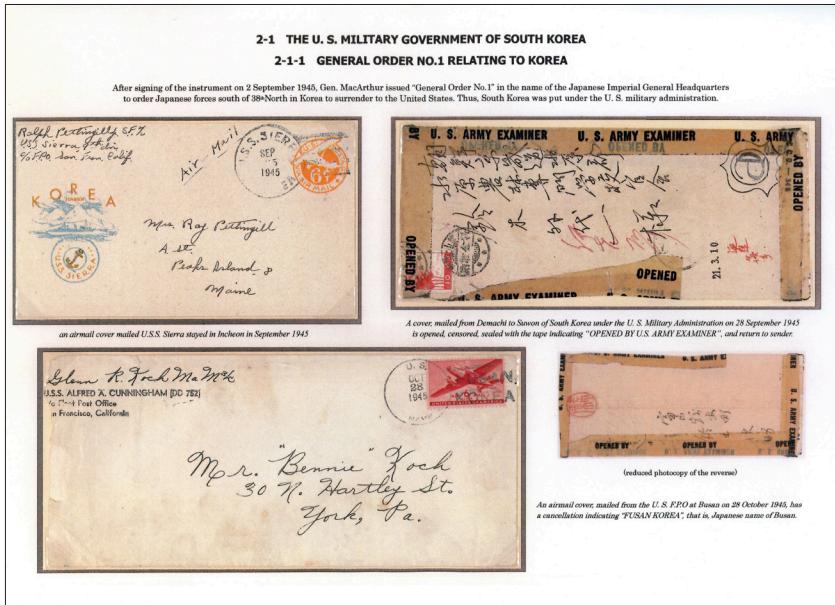
これに対して、南朝鮮でも、東西冷戦の深刻化という国際状況の変化を踏まえて左派勢力の排除が進み、1947年6月には南朝鮮過渡政府が設立され、単独政権樹

立に向けて大きく舵を切ることになる。

南北統一政府の樹立が絶望的になつていく中で、1947年9月、米国は朝鮮問題を国連総会に上程。

その結果、国連臨時朝鮮委員会が設置され、1948年3月末までに同委員会の監視下に総選挙を実施するとの決議が採択されたが、すでに北朝鮮のソヴィエト化をほぼ完成させていたソ連は、朝鮮半島からの米ソ両軍の同時撤兵を主張し、選挙監視のために国連委員会が北緯38度以北に立ち入ることを拒絶する。このため、1948年2月、国連総会中間委員会は“選挙の可能な地域”での選挙実施を決議し、同年5月、南朝鮮での単独選挙が実施されることになった。

これに対して、北朝鮮側は“南北分断”的動きを批判していたが、実際には、1947年11月、北朝鮮側は、南朝鮮とは別の政府を樹立すべく、太極旗とは別の国旗の制作を開始。また、1948年2月には朝鮮人民軍が創建されるなど、着々と独自の政府樹立のための準備を進めていた。



18-19 米軍の南朝鮮進駐

米軍の南朝鮮進駐を表現したリーフ。上段左は1945年9月、米海軍の駆逐艦母艦『シエラ』から差し出された郵便物で、停泊地が“KOREA JINSEN”と表示されている。米軍の認識では、仁川の発音は、あくまでも、日本語風の“ジンセン”であって、朝鮮語の“インチョン”ではなかったことがわかる。同様に、下段の同年10月、釜山に駐留していた米海軍の駆逐艦『アルフレッド・A・カニンガム』からの郵便物の消印も日本語をローマ字化した“FUSAN”となっている。右側の郵便物は、1945年9月28日、富山県の出町（現・砺波市）から米軍政下の水原宛に差し出されたものの、郵便物が水原に到着したときには、おそらく名宛人は日本に帰国していたため、差出人へと返送されている。途中、米軍によって開封・検閲された後に封緘されたテープには“OPENED BY U.S. ARMY EXAMINER（合衆国陸軍の検閲官が開封した）”の表示があり、南朝鮮が米軍の直接軍政下におかれていることを示している。

年表

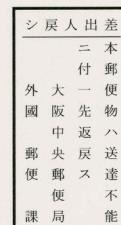
1945年09月02日	降伏文書の調印：一般命令第一号で朝鮮半島は分割占領に
1945年09月12日	南朝鮮で米軍政府成立
1945年12月12日	モスクワ協定：南朝鮮で反託鬪争が激化
1946年02月08日	北朝鮮臨時人民委員会成立
1946年03月05日	北朝鮮の土地改革法令施行
1947年06月03日	南朝鮮過渡政府成立
1947年10月17日	国連臨時朝鮮委員会樹立
1947年11月05日	1948年3月末までに臨時朝鮮委員会監視下での総選挙実施が決定
1948年02月08日	北朝鮮で朝鮮人民軍創建
1948年02月26日	北朝鮮への選挙監視団立ち入り拒否のため、南朝鮮での単独選挙決定

2-2-2 BEGINNING OF THE SOVIET RULE IN NORTH KOREA

According to "General Order No.1" of 2 September 1945, the Soviet Army formally occupied the north of 38°North in Korea. It strictly limited communications between its occupied area and outside and sent Kim Il-sung, a Korean Major in the Soviet Red Army in Far East, to Pyongyang and organize the puppet government.



Kim Il-sung immediately
After returning to Korea



Return to Sender

This mail is undeliverable
and return to sender.
Osaka Central Post Office
Foreign Mail Section

A cover(domestic rate: 10sen), mailed from Otaka (Japan) to Pyongyang on 10 August 1945, 5 days before the Japanese surrender, was returned to the sender because the Soviet Occupation Forces strictly closed the border with the U. S. Zone, and refused the exchange of mails outside the area.

24 ソ連の北朝鮮進駐

北朝鮮を占領したソ連軍は北緯38度線を封鎖し、往来を厳しく制限した。郵便物に関しても、日本から北朝鮮宛には1946年8月まで送ることができなかつた。この封筒は、終戦直前に平壤宛に差し出されたものの、「本郵便物ハ送達不能ニ付一先返戻ス」との事情説明の印が押されて返送されている。右は北朝鮮が発行した解放1周年の記念切手で、当時は南北統一政府樹立を目指すとの建前が生きていたため、背後に太極旗が描かれている。



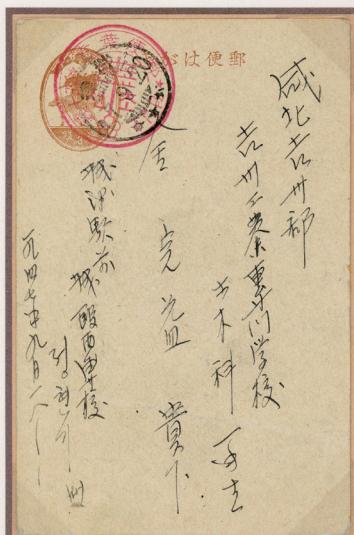
21-22 解放直後の南朝鮮の切手と郵便

解放直後の南朝鮮では日本時代の郵便制度がそのまま継続され、当時の為替レートでは、日本円と南朝鮮ウォンは等価だったこともあり、日本時代の切手がそのまま発売・使用されていた。その後、1946年2月1日、日本時代の切手に「朝鮮郵票」を意味するハングルと新たな額面を加刷した暫定切手が発行され、同年5月1日には「解放切手」と称する6種類の切手が発行された。解放切手は、デザイナーの金重鉉がソウルで作成した原画をもとに、日本の印刷局で印刷し（左下には「大日本帝国印刷局製造」の銘版がついた解放切手を展示している）、ソウルで自打（切手周囲のミシン目）の穿孔作業が行われた。また、解放切手の発行に伴い、日本切手やハングル加刷の暫定加刷切手は1947年6月30日限りで使用禁止となった。左上の郵便物は解放切手と暫定加刷切手を貼ったもの、右は、有効期限内に日本切手を貼って差し出したものの、無効と誤解されて返戻された郵便物。

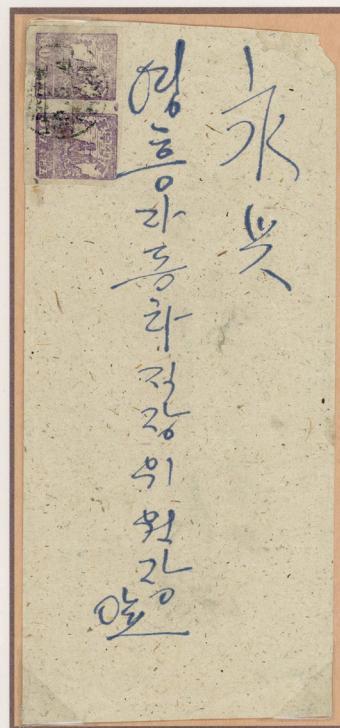
2-4 SOVIET PREPARATIONS FOR DE FACTO TWO KOREAS

2-4-1 PROVISIONAL PEOPLE'S COMMITTEE OF NORTH KOREA

Facing with strong opposition of South Korean People against the Moscow Agreement, the Soviet Union gave up the foundation of the unified Korean government, and established the "Provisional People's Committee of North Korea", that is, the de facto North Korean Government separately from the South, in February 1946.



An ex-Japanese postcard, provisionally surcharged "50chon" under the Provisional Committee, was mailed from Songjin to Kilju on 20 September 1947.



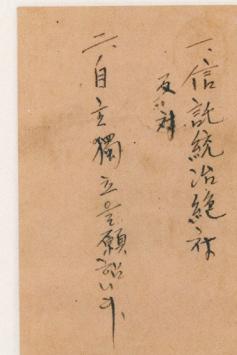
A cover, mailed to Yonghung, has stamps issued by the Postal Administration of the Provisional Committee.
Domestic Postal Rate: Iwon (50chon stamps x 2)

28 北朝鮮（臨時）人民委員会の成立

1946年2月、事実上の北朝鮮単独政府として北朝鮮臨時人民委員会が成立したことを受けて、同年3月以降、北朝鮮では南朝鮮とは別の切手・葉書が発行された。切手と郵便では、以後、北朝鮮と南朝鮮（韓国）は別の国という扱いになる。左は日本統治時代の葉書を接収して、ハングルの「朝鮮」の文字などを加刷したもの。右は金剛山を描く50銭切手2枚を貼った郵便物。

2-3 MOSCOW AGREEMENT

On 27 December 1945, the Allies Nations agreed that Korea should be put under mandatory administration of the United States, the United Kingdom, the Soviet Union and China in five years before the unified independence. This decision caused the strong opposition of the South Korean people, who expected independence would be realized immediately.



(reduced photocopy of the reverse)

3sen : face value of Japanese postcard
2sen : Japanese postage-paid mark
+ 45chon : USAMGIK postage-paid mark
50chon : postcard rate under USAMGIK
(from 1 April to 30 September 1947)



A petition against the mandatory administration according to the Moscow Agreement was systematically mailed to the U.S.-U.S.S.R. Joint Commission on Korea in Seoul by South Korean People in 1946-47.

Imperforate block of South Korean 2won stamps of 1946, appealing the unification and independence of Korea, that is, the ultimate goal of the Moscow Agreement.



27 モスクワ協定

朝鮮の信託統治をうたつたモスクワ協定の後、南朝鮮では反託管争が盛り上がったが、その一環として、ソウルの徳寿宮内に置かれていた米ソ共同委員会宛に信託統治反対の葉書を送ることも盛んに行われた。上段の葉書はその一例で、日本統治時代の印面はそのまま有効として、当時の葉書料金との差額分を徴収した後、そのことを示す料金収納印を押して使用している。下段は、統一朝鮮をイメージして当時発行された地図切手。

大韓民国政府の樹立を受けて、8月25日、ソ連軍政下で、それらを並べてみると、切手を通じて韓国の成立をたどることが可能となる。

CHEONGHAK

このような強権的な政治姿勢に加えて、李承晩政権の選挙から8月の大韓民国政府成立までのプロセスに対応して、南朝鮮および韓国は逐次記念切手を発行しているので、それらを並べてみると、切手を通じて韓国の成立をたどることが可能となる。

第3章 南北両政府の成立

第3フレーム（リーフ番号33-48）は、1948年に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）政府が正式に発足した前後の状況を取り上げている。

1948年5月10日、朝鮮史上初の本格的選挙が南朝鮮のみで行われ、大韓独立促成国民会（1946年2月に米軍政庁の支援を受けて組織された李承晩系の組織）が53議席を獲得して第1党となつた。5月31日には憲法制定のための制憲国会が開院し、6月25日、国連の臨時朝鮮委員会は南朝鮮国会の成立を正式に認定した。7月17日には、政府組織法とともに前文と103条からなる第1共和国憲法が公布され、7月20日、李承晩が初代大統領に選出された。こうした手順を経て、8月15日、大韓民国政府が正式に成立する。1948年5月の第1回

の北朝鮮でも総選挙が実施され、9月8日の朝鮮民主主義人民共和国政府の成立宣言を経て、翌9日には金日成が首相に就任した。以来、9月9日が北朝鮮の建国記念日となつていてある。

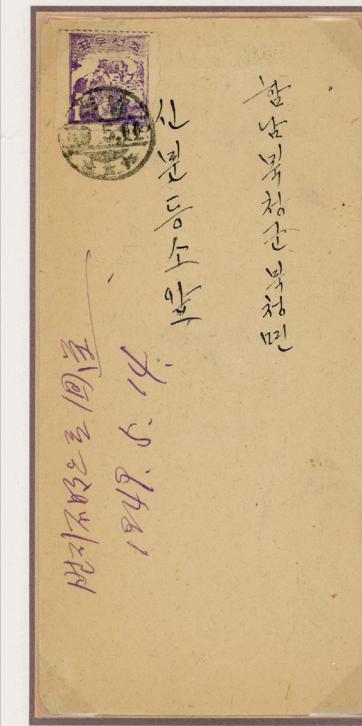
南北両政府の成立を受けて、12月12日、国連総会は、
 ①臨時朝鮮委員会の報告を承認する、②大韓民国政府は、臨時朝鮮委員会が観察した選挙で樹立された、朝鮮にある唯一の合法的な政府である、③臨時朝鮮委員会の任務を継承する組織として朝鮮委員会を設置する、ことを骨子とした総会決議195（Ⅲ）が採択され、国連の場では韓国が朝鮮半島の正統政府として認知された。

ところで、大韓民国政府発足以前の1948年4月から、濟州島では四三暴動が起つていていたことにくわえ、政府発足後の同年10月には、暴動鎮圧の出撃命令を受けた国軍部隊が麗水・順天で反乱を起こしていた。これに対して、李承晩政権は「共産分子一掃」の名目で国軍の1割を超える8000名を肅清することで軍部のコントロールを握る一方、政府に対して批判的だった大物政治家・金九は、1949年、李承晩派の陸軍将校により暗殺された。

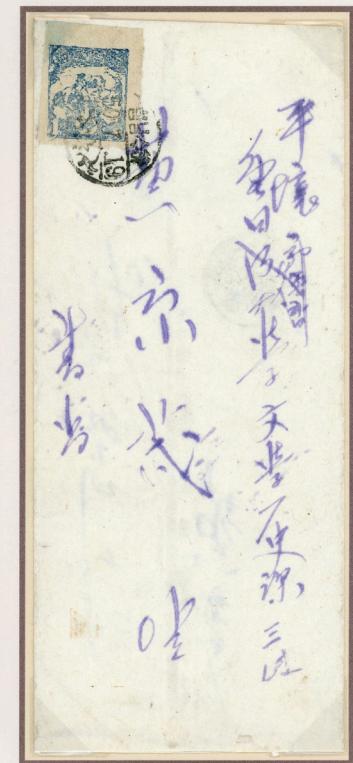
2-4-2 LAND REFORM BY THE PEOPLE'S COMMITTEE

On 5 March 1946, land reform was instituted as the land from Japanese and collaborator land owners was divided and handed over to poor farmers. The landlords possessing more than 50,000 square meters of land were to have it expropriated and distributed to existing tenant farmers for free.

There are many varieties of color and paper among North Korean commemorative 1won (=rate for domestic mails) stamp of the land reform.



A cover, mailed from Ranam to Pakchong on 11 May 1949, has a violet stamp printed on brown paper.



A cover, mailed from Suha to Pyongyang on 19 July 1950, has a indigo stamp printed on white paper.

29 北朝鮮の土地改革

日本敗戦時の北朝鮮では全農家の4%の地主が総耕作地の58・2%を所有していたが、1946年3月に始まった土地改革により、全耕作地面積の半分を超える100万3025町歩が地主から没収され、50万戸以上の農家に無償で分配された。北朝鮮人民委員会は土地改革の成果を宣伝する1ウォン切手を発行し、日常的に使わせたが、切手の刷色や紙質にはかなりのばらつきがある。左の切手の郵便物の消印は、日本時代のものがそのまま転用されている。

経済運営は失政続々で諸物価は暴騰。独立により米国から支援も減額され、国民は苦しい生活を余儀なくされた。

こうした状況の下で、1950年5月、任期満了に伴う国会の総選挙が行われ、与党・李承晩派は定数210議席中30議席しか獲得できず惨敗。国民の不満を前に李承晩政権の退場は必至の情勢とみられていた。

韓国の混乱をよそに、1949年3月、金日成はモスクワでスターリンと会談し、南侵計画を相談。これに対して、ソ連側は、朝ソ経済文化協力協定を結び、北朝鮮の新国家建設に対して各種支援を行つたものの、軍事支援に関しては北朝鮮の暴走を危惧して最小限にどめられた。しかし、1949年10月の中華人民共和国成立を経て、翌1950年1月、米国のアチソン国務長官が韓国・台湾をアメリカの不後退防衛線より除外するとの演説を発表すると、同年4月頃までにスターリンは金日成の武力南侵に承諾を与え、北朝鮮の戦争準備を本格的に支援するようになった。また、中国もソ連と北朝鮮の決定に追従し、戦争開始の環境が整えられていく。

3-1 ESTABLISHMENT OF REPUBLIC OF KOREA

3-1-1 THE FIRST GENERAL ELECTION ONLY IN THE SOUTH

Facing with strong opposition against the Moscow agreement, the United States entrusted the solution to the Korean problem to the United Nations, which decided to organize the special committee for Korean problem and to hold the 1st general election in November 1947. But the Soviet Union refused the U. N. entry into the north of the 38th parallel. Thus, the election was held only in the South Korea on 10 May 1948, and the 1st parliament started on 31 May.



A FDC of the commemorative stamps of the 1st general election was mailed from Seoul to New York on 10 May 1948



Type I
There is a period between "5" and "31"
Type II
There is not period between "5" and "31"

A pair of Type I and Type II of the commemorative stamps of the opening of Korean Parliament

34 南朝鮮の第1回選挙と制憲国会開院

上段は1948年5月10日、第1回総選挙の投票日当日に発行された記念切手5種を貼り、記念印を押して米国宛に送った郵便物。米軍政下で封開・検閲を受けている。下段は国会開院の記念切手。切手上の表示は5月31日となっているが、実際に切手が発行されたのは7月1日である。なお、この切手には日付の月と日の間にピリオドがあるタイプ1とないタイプ2があるが、ここでは、それらがつながったペアの状態のものを展示している。

年表

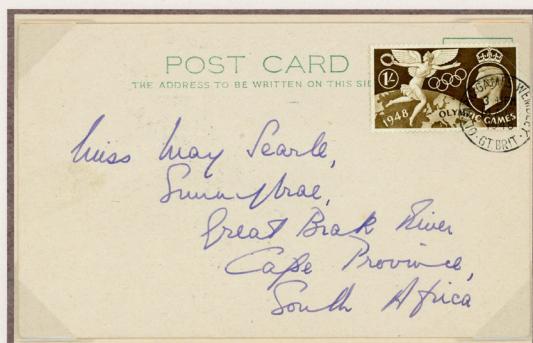
1948年05月10日	南朝鮮の単独選挙
1948年05月31日	南朝鮮、制憲国会開院
1948年07月17日	大韓民国憲法公布
1948年07月20日	李承晩、大韓民国初代大統領に就任
1948年08月15日	大韓民国成立
1948年09月09日	朝鮮民主主義人民共和国成立
1948年12月12日	国連総会、韓国を朝鮮半島唯一の正統政府として承認
1949年03月17日	北朝鮮、ソ連と経済文化協力協定締結
1949年10月01日	中華人民共和国成立宣言
1950年05月30日	韓国で第2回総選挙。与党が惨敗

3-1-3 KOREAN NATIONAL TEAM FOR OLYMPIC GAMES 1948

On 20 June 1947, the International Olympic Committee admitted Korean membership, but the definition of "Korea" remained vague because of the conflict between the South and the North. After the general election of May 1948, South Koreans dispatched the "National" Team except North Koreans to the Olympic Games from 29 July on.



South Korea issued commemorative stamps of the Olympic Games on 1 June 1948 before the Korean National Team left Seoul for London.



A postcard, mailed from the P.O. at the main stadium of the Olympic Games to South Africa on 14 August 1948, has a 1s of the British commemorative stamp of the Olympic Games of 1948.

36 ~KOREA、代表、五輪に初参加

1947年6月20日、「KOREA」の国際五輪委(IOC)加盟が承認されたものの、南北分断が進行していく中で、全朝鮮の統一的なスポーツ組織の結成は、事実上、不可能となつた。このため、1948年7月29日に開幕したロンドン五輪には、米軍政下の南朝鮮のみで代表チームを構成し、独立した存在として五輪初参加を果たした。切手はそれを記念して南朝鮮で発行されたもの。下段の五輪競技場内郵便局から差し出された葉書と組み合わせて展示した。

3-1-2 PROMULGATION OF THE CONSTITUTION OF 1948

The parliament of the South Korea proclaimed the 1st Constitution on 17 July 1948. According to the regulations of the Constitution, Rhee Syngman was elected to the 1st President by the indirect election of the Diet member on 20 July.



commemorative stamps and a special cancellation of the first Constitution.



A FDC of the commemorative stamp of installation of the 1st President of Republic of Korea

35 憲法公布と初代大統領就任

上段は憲法公布の記念切手2種セット。憲法公布1週間前の1948年7月10日、軍政終了後の国号を「大韓民国」とすることが正式に決定されたことを受け、この切手から、国名表示が「大韓民国」となった。下段は、初代大統領としての李承晩の肖像を描く切手。米国との関係を強調するためにスーツを着用することが多かった李承晩だが、この切手では韓服姿の肖像になっている。

3-1-6 RECOGNITION BY THE UNITED NATIONS

On 25 June 1948, the U.N. Provisional Commission on Korea authorized the result of the general election in May, and approved the Republic of Korea as the sole legitimate government in Korea. Then, the U.N. Commission on Korea started its activities on 12 February 1949.



A commemorative stamp of the 15th anniversary of the U.N. Recognition of the Republic of Korea

the original drawing of the commemorative stamp of the U.N. recognition



The U.N. Commission on Korea started its activities on 12 February 1949.

40 国連、韓国を朝鮮半島唯一の正統政府として承認

上段は1963年の「国連韓国承認15周年記念」の切手とその原画を並べたが、原画では、当初、デザイナーが記念の日付を「1963年10月12日」と誤記して修正した痕跡が残っている。なお、切手に描かれているニューヨークの国連本部ビルは1952年の完成で、韓国を承認した1948年の会議はパリで開催されている。下段の切手は新設された国連朝鮮委員会（切手の表記は「UN韓委、を意味するハングル）のソウルでの活動開始を「歓迎」するために発行されたもの。

3-1-5 MILITARY REFORM

As a result of the establishment of the Republic of Korea (ROK), the "South Korean Coast Guard" under USAMGIK (est. 11 November 1945) was reorganized as "ROK Navy" on 15 August 1948, and the "South Korean Constabulary of Police Reserve" (est. 15 January 1946) was reformed as "ROK Army" on 5 September. The ROK Marine Corps was newly organized on 15 April 1949, and the ROK Air Force on 1 October.



A cover, mailed from Jinhae to Pusan on 14 September 1949, was censored by ROK navy.



An airmail, mailed from Jinhae to Kochi via Osaka on 15 April 1959, has a commemorative stamp of the 10th anniversary of the ROK Marine Corps.

39 大韓民国の軍事改革

1948年8月15日の大韓民国政府成立を受けて、国軍の組織が整備されたことを表現したリーフ。上段は鎮海の海軍統制府実務教育隊から釜山宛の郵便物で、米軍政時代の「朝鮮郵票」表示の50ウォン切手2枚と「大韓民国郵票」表示の14ウォン切手が貼られているが、図案はいずれも慶州の瞻星台を描く。大韓民国成立後も、米軍政の切手はしばらく有効だった。下段は海兵隊創設10周年の記念切手が貼られた大阪宛の航空便。

3-2 ESTABLISHMENT OF DPRK

3-2-1 THE DPRK GOVERNMENT IN PYONGYANG

On 9 September 1948, the communists of North Korea, who already established "the Provisional People's Committee of North Korea" as the de facto government separately from the South, declared the establishment of the Democratic People's Republic of Korea. Thus, Korea became divided nations.



A cover, mailed from Haksong to Kilju on 18 October 1949, has two commemorative stamps of the establishment of the DPRK. Rate: 1won



a registered cover, mailed from Chungwha to Pyongyang on 29 September 1950, has a stamp depicting not the Korean traditional flag but the new one of DPRK. Registered letter Rate: 6won

43 朝鮮民主主義人民共和国の成立

1948年9月9日の朝鮮民主主義人民共和国成立を扱ったリーフ。左の郵便物（咸鏡北道鶴松から吉州宛）に貼られている切手は『朝鮮民主主義人民共和国中央政府樹立記念』の切手。あえて『中央』の文言を加えているのは、国連の決定を否定し、自分たちこそが正統政府であるとの意思を示そうとしたものと思われる。国旗などで半島南半部がさりげなく隠されているのも見せない。

3-1-8 SOCIO-ECONOMIC CONFUSION UNDER PRES. RHEE

The base for powers of the 1st President Rhee Syngman was so weak that the socio-economic situation was not stable. There were leftist riots in Jeju Island and uprising of ROK Army in Yeosu and Suncheonin 1948. The social confusion caused the serious Inflation and industrial production fell rapidly. Thus, the ruling party suffered a crushing defeat in the general election on 30 May 1950, and the government fell into the critical situation.



A cover, mailed from Seoul to Suma (Japan) on 30 May, has a commemorative stamp of the 2nd general election. The period of 30won rate of airmail for Japan is only 27 days from 30 May to 25 June 1950, the day the Korean War broke out and the airmail service was suspended.



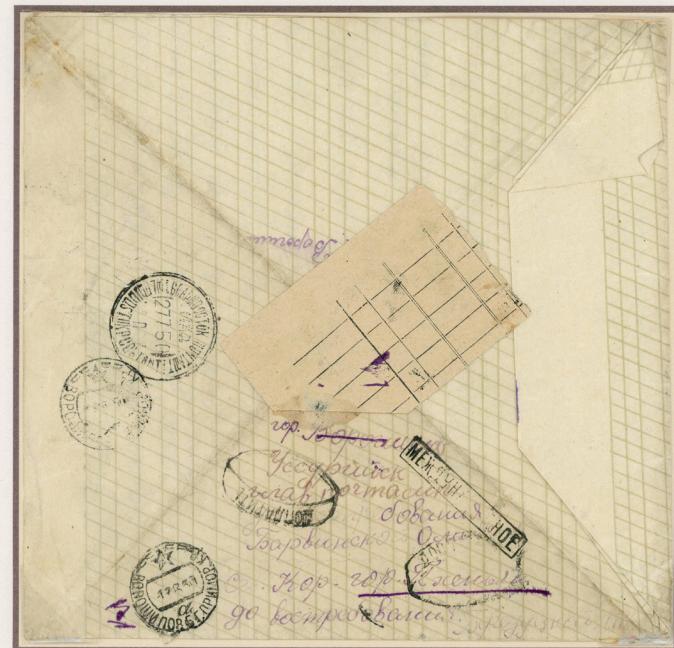
the imprint block of the commemorative stamps of the 2nd election has a plate number "6".

42 第2回総選挙

朝鮮戦争直前の1950年5月30に行われた第2回総選挙の投票日当日に発行された記念切手をまとめたリーフ。この切手は、発行後1ヶ月もせずに朝鮮戦争が勃発したこともあり、実際に郵便に使われた例はきわめて少ないが、ここでは、神戸宛の航空便を持ってきた。また、下段には『朝鮮書籍印刷株式会社』の銘版と版番号「6」のついた田型ブロックを展示している。

3-2-2 AGREEMENT BETWEEN USSR AND DPRK

In March 1949, Kim Il-sung visited Moscow, and required Stalin to approve the plan of "Unification War" and to support the war industries in North Korea. Stalin did not give any answer for the Kim's war plan, but signed agreement about economic cooperation and loan to support for economic construction of DPRK.



Soviet engineers, dispatched according to the agreement with DPRK, have a privilege to send free mails
This is one of such privileged letters from Pyongyang to Ussuriysk via Vladivostok June 1950.

44 朝ソ経済文化協力協定

朝ソ経済文化協定調印を受けて、ソ連から北朝鮮に派遣された技術者が祖国との連絡のために郵便物は、朝鮮戦争の勃発までは、無料で受け付けられた。この郵便物はその一例で、平壤に派遣されていたソ連人技術者が、1950年6月、ウスリースク（ラジオストク）の北方100kmの地点に位置し、シベリア鉄道と中国および北朝鮮からの鉄道が合流・分岐する宛に差し出したもの。

第4章 朝鮮戦争の勃発

第4フレーム（リーフ番号49-64）は、1950年6月25日の朝鮮戦争勃発から同年10月の中国人民志願軍参戦までの、戦争初期の状況を扱っている。

1950年6月25日、朝鮮人民軍（北朝鮮軍）が38度線を越えて韓国領内に侵入。朝鮮戦争が始まった。開戦翌日、国連安理会は北朝鮮の南侵を侵略行為と規定し、北朝鮮に対して38度線以北への撤兵を要求したが、北朝鮮軍はこれを無視して南侵を続け、6月28日、ソウルを占領した。

このため、トルーマン米大統領は極東海・空軍に38度線以南の北朝鮮軍への攻撃を指令。国連安理会も米軍の介入を追認する。さらに、7月7日、国連安理会は国連軍の創設を決議し、翌8日、マッカーサーが国連軍司令官に就任した。なお、当時の国連加盟59ヶ国の中派兵に賛成したのは52ヶ国で、米国以外にも、英連邦5ヶ国を含む総計21ヶ国が兵員を派遣しており、"国連軍"は当時の国際世論の意向を反映していたとみてよい。

しかし、一連の安保理決議は、ソ連欠席（ソ連は、中

CHEONGHAK

華人民共和国に国連への代表権を与えられなかつたことに抗議して安保理への出席を拒否していた）の中で採択されたため、東側諸国は反発し、米国を非難するとともに、自らの陣営を“平和勢力”と称して、‘朝鮮人民との連帯’をアピールしはじめる。

一方、ソウルを占領した北朝鮮はその後も南侵を続け、7月4日には水原を、同20日には大田をそれぞれ占領。韓国・国連軍は敗走を続け、8月に入ると最終防衛ラインとして設定された釜山橋頭堡（サンミネトウボ）（ナクチヨリ＝ヨンドク）の攻防をめぐつて、文字どおり背水の陣に追い込まれた。

こうした状況の中で、9月15日、マッカーサーは、兵站線の伸びきった北朝鮮軍の後背地となつて仁川へ奇襲上陸作戦を敢行。作戦は完璧な成功を收め、国連軍は翌16日までに仁川を奪還し、28日にはソウルを奪還した。

勢いに乗る韓国・国連軍は、10月に入ると38度線を突破し、10月19日には平壤を占領。10月26日、韓国軍の一部が楚山で鴨緑江に到達した。

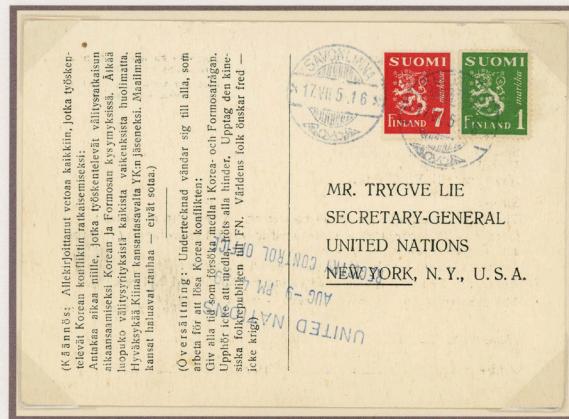
韓国・国連軍の進撃により、北朝鮮国家潰滅の可能性が現実味を帯びるようになつたため、10月8日、中国は

「脣滅べば歎寒し」として、中国人民志願軍の派兵を決定。10月25日、中国人民志願軍と国連軍の戦闘が小規模な遭遇戦としてはじまった。

抗日戦争・国共内戦の経験からゲリラ戦に秀でていた中国側は人海戦術を展開。銅鑼を鳴らし、ラッパを吹いて、喊声を上げながら波状攻撃を繰り返して国連軍を包围分断していった。こうした中で、11月30日、トルーマンは、定例記者会見後の質疑応答で、「保有するあらゆる兵器」を使用する用意があり、「原爆の使用についても、常に積極的な考慮が払われている」と発言し、全世界に衝撃を与えた。最終的に、米国は朝鮮戦争での核兵器の使用を断念したが、このことは、米国による朝鮮“侵略”を非難していた東側諸国にとって格好の攻撃材料となり、いわゆる進歩的知識人の影響力が強かつた日本でも、核の力で朝鮮を支配しようとするアメリカとその傀儡・李承晩政権という北朝鮮側のプロパガンダが一定の支持を生む素地を作ることになった。

4. INTERNATIONALIZED CIVIL WAR

	North Korean Army	UN Forces	China
25 Jun. 1950	Noth Korean Invasion started → outbreak of the Korean War		
28 Jun. 1950	Fall of Seoul	Dispatch of the UN Forces	
07 Jul. 1950		Landing Incheon	
15 Sep. 1950		Recapture of Seoul	
28 Sep. 1950		Advance into the North	
01 Oct. 1950		Dispatch of the Volunteer Army	
24 Oct. 1950			Truman's announcement about using atomic bombs
30 Nov. 1950			



A Finish postcard of the petition, mailed to Trygve Lie, the Secretary General of the U.N. on 17 July 1950, appeals "The people of the world want peace – not war (in Korea)."

49 国連事務総長宛の嘆願の葉書

第4章の章扉には、国連事務総長トリグヴ・リ宛の嘆願の葉書を展示した。葉書に印刷された嘆願の文言は「署名人は朝鮮での戦争に関わる全ての人に、次のように訴えます／朝鮮ならびに台湾問題を交渉によって解決する用意がある人々に対して、時間を与えてください／いかなる障害にも負けず、仲介を諦めないでください／中華人民共和国に国連の代表権を与えてください／世界の人々は、戦争ではなく、平和を望んでいます」とある。

年表

1950年06月25日	北朝鮮の南侵により朝鮮戦争勃発
1950年06月28日	ソウル陥落
1950年07月07日	国連軍の派遣
1950年09月15日	仁川上陸作戦
1950年09月28日	国連軍、ソウル奪還
1950年10月01日	韓国軍、38度線を越える
1950年10月19日	国連軍、平壤占領
1950年10月25日	中国人民志願軍と国連軍の戦闘始まる
1950年11月30日	トルーマン、朝鮮での原爆使用の可能性に言及

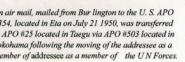
4-2 DEFENCE AGAINST THE NORTH KOREAN INVASION

4-2-1 DISPATCH OF THE U.N. FORCES

When the Korean War broke out in June 1950, the United States proposed a resolution blaming North Korea as invader to the Security Council of the United Nations. The resolution was approved and the U.N. Forces were dispatched to Korea on 7 July.



undesigned design for the Korean commemorative stamp of the 15th anniversary of the U.N. Army during the Korean War in 1950. The national flag of Sweden on it was depicted in the wrong color.



An air mail, mailed from Bar Ilong to the U.S. APO #354, located in Eta on July 21 1950, was transferred to APO #2 located in Taegu via APO #303 located in Yokohama following the moving of the addresses as a member of addresses as a member of the U.N. Forces.



(reduced photocopy of the reverse)

This cover was mailed from Monreal to the British A.P.O. in Hong Kong, that transferred to the F.P.O. #949 in Korea via A.P.O. #182, following the move of the addresses as a member of the U.N. Forces.

53-54 国連軍の参戦

国連軍の参戦を表現したリーフ。左の上段は、国連軍参戦15周年の記念切手の原画（不採用）と実際の切手。不採用となった原画ではスウェーデン国旗の色が間違っている（青地に黄色の十字のところが青地に白十字になっている）ほか、旗の組み合わせも異なっている。上段の郵便物は朝鮮戦争勃発後もない1950年7月21日に米国から江田島に駐留していた米兵宛（宛先の住所表示は機密保持のため、サンフランシスコ第354軍事郵便局となっている）に差し出されたものの、郵便物の到着時には、名宛人が朝鮮に派遣された後だったため、彼を追いかけて、横浜経由で大邱に送られた。一方、右側の郵便物は、国連軍に参加したカナダ軍の将校宛にモントリオールから差し出されたもので、香港に設けられた英国の軍事郵便局を経由して朝鮮の戦場まで運ばれている。

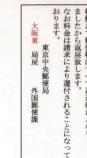
4-1 OUTBREAK OF THE KOREAN WAR

4-1-1 DPRK INVASION OVER THE 38th PARALLEL

On 25 June 1950, the Korean People's Army, that is, the North Korean Army attacked the "border" of the 38th parallel, and invaded into the ROK. The Korean War broke out.



A letter mailed from Osaka to Seoul on 27 June 1950, was returned to sender because of the outbreak of the Korean War. Postal rate of 64yen (= 30yen x 2 + 2yen x 2) means international airmail surcharge from Japan to Korea.



Translation of a slip on the cover
Return to sender because all service for Korea is suspended.
The postage is to be refunded on your demand
Tokyo Central Post Office Foreign Mail Section
Return to Osaka-Higashi (Eastern Osaka) Post Office

(reduced photocopy of the reverse)



This cover, mailed by a Korean in Nevelk Coal Mine in Sakhalin to Cheongdo in South Korea on 15 June 1950, arrived in Vladivostok on 27 June, and in Pyongyang on 1 July. But it was destined in the North Korea because postal service to South Korea was suspended after the outbreak of the war. postal rate of 64yen (= 30yen x 2 + 2yen x 2) means international airmail surcharge from Japan to Korea.



(reduced photocopy of the reverse)

50-51 朝鮮戦争の勃発

朝鮮戦争の勃発により、開戦以前の郵便ルートが途絶したことを示す郵便物を2点を展示了。左側は、開戦2日後の1950年6月27日に大阪からソウル宛の郵便物で「朝鮮宛郵便物はすべて送達停止となりましたから返戻いたします」との事情説明の付箋をつけて差出人に返送されたもの。右側は、第二次大戦以前に樺太に渡ったものの、終戦後、帰国できなくなった韓国人の「サハリン棄民」が、1950年6月15日、サハリンから「南朝鮮」宛に差し出したものの、朝鮮戦争勃発のタイミングと重なったため、ウラジオストクを経由して平壌まで到達したところで留め置かれていた郵便物。なお、この郵便物は、平壌を占領した米軍によって押収され、米国に運ばれた後、北朝鮮の動向を探るための資料としては重要性が低いとして、市場に払い下げられたもののひとつである。

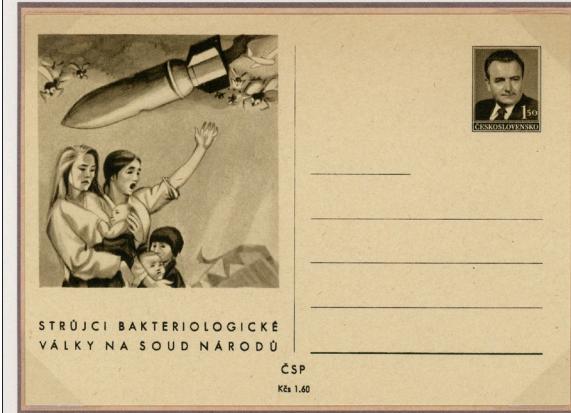
4-2-3 COMMUNISTS' OPPOSITION AGAINST THE U.N.FORCES

The U. N. Security Council decided the dispatch of the U. N. Forces to Korea during the absence of the Soviet Union. Thus, the world communists, complaining of the decision without the Soviet Union, blamed the United States and the U.N. Forces of "invasion" into Korea.



(reduced photocopy copy of the reverse)

A Hungarian Military PPC, mailed from the FPO #1902 located in North Korea to the Soviet Union, depicting world children with the slogan "Save the Korean Children"



Czechoslovakian postcard, blaming the US Army of using biological weapon during the Korean War.

56 共産側の国連軍批難

東側諸国が展開したプロパガンダ葉書の例。上段はハンガリーが制作したもので、『朝鮮に平和を (koreaert a bekeert)』の文言とともに朝鮮人と思われるアジア系の子供を中心とし白人および黒人の子供を並べている。北朝鮮国内の軍事郵便局からソ連宛に送られている。下段はチェコスロバキアが発行したもので、米軍が朝鮮で細菌兵器を使用したことを批難する内容だが、後に、細菌兵器使用の事実はなかったことが明らかになった。



61-62 中国人民志願軍の参戦

中国人民志願軍の参戦を表現したリーフ。左は中国人民志願軍の兵士が差し出した軍事郵便。中央上段は中国から北朝鮮に対する支援物資として提供された封筒を使用した朝鮮人民軍の軍事郵便で、封筒の上部には、中国側の参戦スローガンである「抗美援朝 保家衛國」のスローガンが印刷されている。一方、中国の参戦により国家消滅の危機を脱した北朝鮮は、1951年以降、中国との連帯をアピールする切手を発行するようになった。中央下段の郵便物は1953年3月、平壤から東ドイツ宛に差し出されたもので、中朝両国の兵士が共に戦う様子を描く20ウォン切手が2枚貼られている。右側の切手は1951年に『解放6周年』を記念して発行されたもので、中朝ソ三国の労働者の連帯が表現されている。

第5章 勝者なき休戦

最後の第5フレーム（リーフ番号は65-80）は、1951年以降1953年の休戦までを取り扱っている。

1950年12月、韓国・国連軍は中國人民志願軍の攻勢により総崩れとなり、約2週間の間に、38度線以南まで後退した。いわゆる「12月の撤退」である。さらに、中国側の正月攻勢により、1951年1月4日には国連軍はソウルを放棄し、平沢^{ヒヨクサ}・丹陽^{ダニヤン}・三陟^{サンチク}を結ぶラインまで撤退した。ただし、作戦区域の急激な拡大により中国側の補給も伸びきり、1951年2月以降、国連軍は攻勢に転じ、3月15日にはソウルの再奪還に成功し、戦線は膠着化した。

こうした状況の中で、米本国は停戦を模索し始めるが、マッカーサーは大統領の意向に背いて野党・共和党的議員に台湾の国民党政府軍を朝鮮戦争に参加させるべきだと書簡を送ったため、軍律違反を問われて4月11日に解任された。

マッカーサーの解任後、6月23日に国連安保理でソ連代表マリクが休戦を提案。中国がこれに同意するかたち

で、7月10日、開城^{ケソン}で休戦交渉が開始されたが、会談は議題の設定をめぐって最初から難航。8月22日に一時中断の後、10月25日に板門店^{ボンムンド}に場所を移して会談が再開されたが、会談は紛糾が続き、1953年7月に休戦協定が調印されるまで、1076回にも及ぶ会談が延々と繰り返された。

一方、第二次大戦の終結以来、連合軍の占領下で非軍事化が進められていた日本では、東西冷戦の進行に伴い、しだいに反共の防波堤として経済復興が優先されるようになり、朝鮮戦争が勃発すると、占領軍が朝鮮に派遣された軍事的空白を埋めるために警察予備隊が組織され、再軍備が開始された。また、1951年に調印された対日講和条約では、講和条約と同時に日米安保条約を調印することで、日本側が米軍の駐留継続を認める（引き続き、日本が朝鮮に派遣される米軍の兵站基地となる）ことで問題の解決が図られた。

その後も、朝鮮戦争は戦線・休戦交渉ともに膠着状態が続いたが、1952年11月4日の米大統領選挙で、朝鮮戦争を早期に平和的に解決することを公約（のひとつ）として掲げるアイゼンハワーが当選。さらに、翌1953年1月にアイゼンハワー政権が正式に発足して間もなく

い3月5日にはソ連の独裁者スターリンが亡くなり、ソ連も中国・北朝鮮を説得して早期休戦を強く求めるようになった。

国際情勢の変化を受けて、1953年4月以降、朝鮮戦争の休戦が現実味を帯びてきたが、北朝鮮の一方的な南侵により多大な損害を被つた韓国は侵略者に対する徹底的な勝利を求めて休戦に反対していた。しかし、最終的に、米国は、米韓安全保障条約の締結、韓国軍の20個師団増設、戦後復興に対する援助などの代償として、韓国側も休戦に反対しないことを約束させた。

こうして、1953年7月27日、板門店の休戦会談本会議場において、国連軍首席代表のハリソンと北朝鮮軍代表の南日^{ナムイル}の間で休戦協定が調印された。しかし、韓国は、休戦に反対しないが署名もしないとの李承晩の姿勢を反映して、協定の調印を拒否する。こうした事情を反映して、朝鮮戦争の休戦を記念する切手・葉書類は、韓国側では発行されず、北朝鮮・中国側が発行するのみとなつている。

CHEONGHAK

年表

1951年01月04日	中国側の攻勢により、韓国・国連軍、ソウルを放棄
1951年03月15日	韓国・国連軍、ソウルを再奪還
1951年04月11日	マッカーサー解任
1951年07月10日	開城で休戦交渉開始（8月22日にいったん中断）
1951年09月09日	サンフランシスコ対日講和条約調印
1951年10月25日	休戦交渉、板門店で再開
1952年11月04日	アイゼンハワー、米大統領に当選
1953年03月05日	スターリン没す
1953年07月27日	北朝鮮・中国と国連軍の間で休戦協定調印（韓国は調印せず）

5-2 JAPANESE REARMAMENT AND INDEPENDENCE

5-2-1 JAPANESE REARMAMENT

After the outbreak of Korean War, most of the U. S. occupation troops in Japan were transferred to the Korean front, leaving Japan virtually defenseless. Thus, encouraged by the occupation authorities, the Japanese government authorized the establishment of a National Police Reserve to guarantee the nation's external security in August 1950.

Chinese covers with slogan cachets against Japanese rearmament



A cover, mailed from Shantou to Chaoan on 8 June 1951, has a slogan cachet “記憶八年血淚深仇 我們要堅決反對 美帝重新武裝日本(=Remember eight years of bloody battle. We raise a strong objection to the Japanese rearmament under the U.S. control.)”

A cover, mailed within Shanghai on 3 September 1951, has a slogan cachet “堅決反對美國 重新武裝日本 (=We raise a strong objection to the Japan's Rearmament under the U.S. control.)”

69 日本の再軍備

朝鮮戦争の日本への直接的な影響としては、1950年8月の警察予備隊の創設が挙げられる。事実上、日本の再軍備が始まることに中国・ソ連は強く反発したが、中国では、日本の再軍備を批難するスローガンが郵便物に押されることもあった。こうしたスローガン印は各地で調整されたため、文言や形式にさまざまなヴァラエティがあるが、ここでは、汕頭と上海での使用例を展示した。

5. CEASE-FIRE IN THE CONTEXT OF THE COLD WAR

	Japan	US	Korea	China	USSR
Dec. 1950			December Retreat of the UN Forces		
Apr. 1951	Dismissal of Gen. MacArthur				
Jul. 1951		Peace Negotiation of Korean War started			
Sep. 1951	Japanese Peace Treaty				
Jan. 1952	ROK invasion to Japanese Takeshima				
Jan. 1953		Pres. Eisenhower Inauguration			
Mar. 1953		Cease-Fire Pact of the Korean War			
Jul. 1953		Korea-US Defense Treaty			
Oct. 1953					Death of Stalin
Oct. 1958				Return of Chinese Volunteer	



This postcard, mailed by a Czechoslovakian sender in Taegu in South Korea, on 7 July 1954, was delivered to Czechoslovakia via Kaesong on 8 October. The city of Kaesong belonged to the South Korea before the Korean War, but put under the rule of the North Korea as a result of cease-fire pact in 1953.

Rate for the North Korean airmail postcard: 85won (5won + 40won x 2)

65 開城からの葉書

朝鮮戦争以前、韓国領だった開城は、休戦後、軍事境界線の北側に編入され北朝鮮領となつた。このため、休戦後の1954年10月に開城から差し出された葉書には北朝鮮の切手が貼られているが、用いられている絵葉書の用紙には“PRINTED IN U.S.A.”の表示があり、戦争の結果、この地の主権が韓国から北朝鮮に移ったことがうかがえる。休戦までの状況を扱った第5章の内容を象徴する葉書として、章扉に展示した。

5-3 END OF THE KOREAN WAR

5-3-1 PEACE NEGOTIATIONS

It was on 10 July 1951 that the peace negotiation between the U.N. Forces and the communists started at Kaesong under the communists' occupation. But the negotiations were suspended on 22 August because of the U.N. violation of DPRK's airspace, and resumed in Panmunjeom on 25 October. The ROK, regarding itself as "invaded" nation, required the dismantling of DPRK and the peace talks did not progress for more than two years.



Slogan cancellation of "Unification through Crushing Communism"
Jeju, 15 August 1952



A South Korean postcard, overprinted "Unification through Crushing Communism", was issued on 25 December 1952 during the peace negotiations.



This cover was delivered by the U.S. Helicopter from Munsan-ni to the then venue of Peace negotiation in Kaesong, then to New Jersey on 10 September 1951.

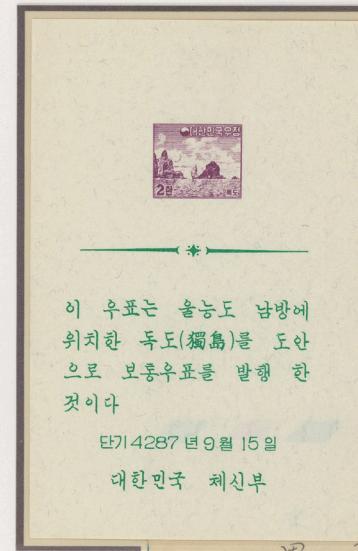
73 休戦交渉

1951年6月以降、本格的に始まった休戦交渉についてまとめたリーフ。上段は休戦の成立に危機感を抱いた韓国の李承晩政権下で使用された「滅共統一」のスローガンが入った消印と、同スローガンと戦時インフレに伴う新額面を加刷した切手。下段は開城の休戦会談場から当時の国連軍の最前線だった汶山里までヘリコプターで運んだ後、米国宛に運ばれた郵便物。

5-2-3 SOUTH KOREAN OCCUPATION OF TAKESHIMA

The Peace Treaty of 1951 stipulates that Japan, recognizing the independence of ROK, renounces all right title and claim to Korea. Upon learning of the content of the Treaty, the ROK requested to add Takeshima as one of the regions for which Japan would renounce, but the Allies rejected the request. In January 1952, the ROK issued a declaration concerning maritime sovereignty, with which he installed the "Rhee Syngman Line", and occupied Takeshima.

The Republic of Korea issued "Dokdo" (Korean name of Takeshima) stamps appealing the Korean "sovereignty" of Takeshima in 1954.



이 우표는 울릉도 남방에
위치한 독도(獨島)를 도안
으로 보통우표를 발행 한
것이다

단기 14287년 9월 15일
대한민국 체신부



misperforation of
"Dokdo" stamp

(1) A cover, mailed from Jinhae to Tokyo on 8 January 1955, has two "Dokdo" stamps issued by ROK. The Japan post tried to refuse the acceptance of Korean mails bearing this kind of stamp, but couldn't as this.



72 竹島問題の発生

韓国は国際的には対日戦勝国と見なされなかつたため、日韓の正式な国交は日本の講和独立後、あらためて樹立する必要があつた。その過程で、1952年1月、韓国は日本海に「平和線」を設定し、日本領・竹島（韓国名・独島）を占拠。休戦後の1954年にはその領有権を主張する切手を発行した。日本側は竹島切手が貼られた郵便物の受取拒絶を検討したが、実際には、ここに示すように、竹島切手の貼られた日本宛郵便物は無事に到着している。

5-3-4 REPATRIATION OF POW

On 8 June 1953, about a month before cease-fire treaty, the U. N. Forces and the communists signed the agreement of repatriation of POWs within 60 days.



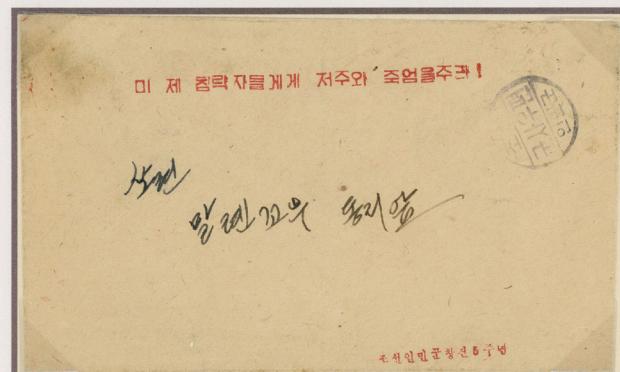
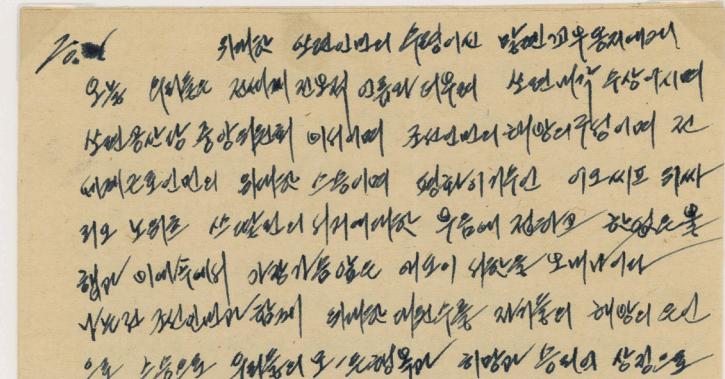
This POW letter sheet was mailed by a Japanese volunteer of Korean ancestry, who joined the U.N. Forces during the Korean War, and was detained at Camp #5 in the North Korea. The letter was mailed on 17 May 1953, and arrived at Aichi, Japan on 2 July via the U.S. APO #100, located in Yokohama, Japan. This is one of a few POW letters mailed by Japanese volunteer ever known.

76 在日義勇兵の捕虜郵便

朝鮮戦争の勃発後、642名の在日コリアンの若者が、独立後まもない祖国を守るべく、志願して義勇兵として朝鮮の戦場に赴き、135名が戦死もしくは行方不明となったほか、共産側の捕虜となつた者も少なくない。ここに展示しているのは、戦争末期の1953年5月17日、共産側の捕虜となつた在日義勇兵が日本在住の母親宛に差し出した捕虜郵便。北朝鮮第5収容所から、横浜駐留の米野戦郵便局を経て、7月2日、名宛人の元に届けられた。

5-3-3 DEATH OF STALIN

On 5 March 1953, Stalin was dead. Thus, there was no reason for the communists to continue the Korean War which he authorized, and the peace negotiations with the U. N. Forces got being successfully conducted.



A military free letter, mailed by a North Korean Soldier to Malenkov, the successor of Stalin, expresses his mourning to the death of Stalin and the loyalty to the new leader of communists in March 1953. In North Korea, soldiers were systematically ordered to write this kind of letter as a part of brainwashing.

75 スターリンの死

スターリンの死は、結果的に、朝鮮戦争の休戦交渉を大きく前進させることになったが、北朝鮮当局は、一般兵士の士気の低下を恐れ、新たにソ連の指導者となったマレンコフ宛に社会主义の首領として忠誠を誓う文言の手紙を組織的に書かせる思想教育を行つた。ここに展示している郵便物はその一例で、料金無料の軍事郵便でソ連まで届けられた。封筒の上部には「アメリカ帝国主義、を批判するスローガンが印刷されている。

5-3-5 SIGNING OF CEASE-FIRE PACT

After the two years of the deadlock, the U.N. Forces, China, and North Korea concluded the cease-fire pact on 27 July 1953. South Korea, which was invaded by the North, refused to sign the pact though tolerated it. Thus, division of Korea was fixed and the front line of the Cold War was fixed in Northeastern part of Pacific-Asia.



77-78 休戦協定の調印

1953年7月27日の休戦協定調印を表現したリーフ。左半分は共産側による「勝利」を記念したマテリアルで、上段は北朝鮮が発行した記念切手（目打にバラエティがあることを示している）、下段は休戦成立を喜ぶ朝鮮人民軍の兵士たちを取り上げた中国の軍事郵便葉書。なお、休戦協定に調印しなかった韓国では、休戦を記念する切手・葉書類は発行されなかつた。右側は停戦監視に関する郵便物で、上段は1953年12月19日、中立国停戦監視委員会のメンバーがインド軍の野戦郵便局から専用の加刷切手を貼ってスイス宛に差し出したもの。下段は1953年12月6日、板門店に駐在していた同委員会のメンバーがスイス宛に差し出したクリスマスカードで、ソウルの米野戦郵便局を経て送された。作品は、この後、第79・80リーフで、戦後の韓国の状況、中国人民志願軍の帰国などについても触れて締めくくっている。

「日本語で読みたい韓国の本——おすすめ50選」 ブックカタログ事業報告

K-BOOK振興会

1 「日本語で読みたい韓国の本」 ブックカタログ事業概況

K-BOOK振興会は2013年にK-文学振興委員会として韓国文学作品を日本語へ翻訳するためのブックカタログ制作の事業を始めた。2000年代に入り、日本と韓国の間の文化的環境は大きく変化している。20年ほど前まで韓国は「近くで遠い国」と言われた。軍事独裁政権下にあった韓国の文化は、ほとんど日本に紹介されることはなかつた。また韓国では日本の映画、ポップス音楽など大衆文化の輸入は禁止されていた。しかしながら、日本文学などハイカルチャーと考えられた分野での日本文化研究は盛んにおこなわれていた。日本文化およ

び日本文学は日本の大衆文化の輸入禁止時代にあつても、相当量が翻訳され出版されてきた。それにくらべ韓国文学および韓国文化に関する書籍の日本語での翻訳出版はごく限られたものであつたと言わなければならぬ。「近くで遠い国」という言い回しには、そうしたアンバランスな状況を指し示す側面もあつた。また、日本では韓国に限らずアジアへの関心が、米国、欧州に比べて乏しいという点もこのアンバランスを作り出す要因となつていた。

韓国が軍事独裁政権から民主化へと転換することで「近くで遠い国」という状況が変化する。日韓の文化交流が多様な分野で盛んになつた。次に大きく状況が変わつたのは、1998年の金大中大統領による日本文化

開放だ。韓国で輸入が禁じられていた日本の大衆文化が開放される。一方、この時期を境にして日本へ韓流ドラマが紹介された。文化交流が、文化をビジネスとして双方で取引される状態が醸成され、やがてそれは日本国内で韓流ブームおよびK-POPの大きな受容を生み出した。こうした韓国文化流入の背景には、韓国政府による積極的な文化輸出の政策がそれを支えていたことも指摘しておかなければならない。2000年代に入つてから、文化交流から文化をビジネスコンテンツとして積極的に輸出する時代が訪れたのである。

しかしながら出版の分野においては、日本から韓国語への翻訳に比べ、韓国語から日本語への翻訳は極めて少ない。韓流ブームと言わながら、アンバランスは依然として解消してはいない。これは日本の関心が米国や欧洲へ傾きがちであることと無関係ではない。そしてそこに情報不足が生じる。

こうした考え方からK-文学振興委員会では「日本語で読みたい韓国の本」というカタログによつて韓国文学の最新情報を紹介するという事業を開始した。日本国内の出版社を配布対象としたカタログ「日本語で読みたい韓国の本」第1集は2013年5月に刊行された。カタロ

グ刊行にあたつては、韓国文学研究者、韓国語翻訳などの積極的な協力を得た。日本から韓国への留学生、韓国から日本への留学生、いずれも増加しており、韓国語から日本語への翻訳者も増えている。また韓国映画、韓流ドラマ、K-POPの受容と並行して韓国文学への関心を持つ層も日本社会の各層に広がりを持つていてこれが実感された。

2013年12月にK-文学振興委員会はK-BOOK振興会と名称を変更した。日本の読者のために、文学という領域に限らずに広く韓国の出版物を紹介する必要性からの名称変更である。

K-BOOK振興会としてブックカタログ「日本語で読みたい韓国の本」第2集を刊行した。第2集では韓国の出版事情、日本での翻訳本の需要状況などの記事の充実も図つた。「日本語で読みたい韓国の本」の内容については第2章で詳細を記す。その第2集記事から、迫田い子「日本で出版された韓国の児童書」を第3章に再録する。同じく第2集記事から館野哲「日本で翻訳出版された韓国の『歴史・社会』部門」を第4章に再録する。いずれも現在の韓国語から日本語への翻訳出版の現状に対する論考である。ブックカタログが刊行された201

3年12月6日に駐日大韓民国大使館・韓国文化院で刊行発表会を開催し、多くの出版人の関心を集めることができた。

2013年は、東京国際ブックフェアのテーマ国が「韓国」であった。K BOOK振興会では東京国際ブックフェアに積極的に参加した。詳細については、「日本語で読みたい韓国の本」第2集のK BOOK振興会編「2013 東京国際ブックフェアを振り返る」を第5章に再録した。東京国際ブックフェアでのK BOOK振興会の活動については、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞、週刊読書人などの新聞各紙に報道されたので新聞記事を添付する。東京国際ブックフェアは多くの出版社と読者の関心を集めることができた。

・朝日新聞2013年6月16日「本だつて韓流」
・読売新聞2013年6月30日「韓国文学は今」
・産経新聞2013年7月24日「K(韓流) 文学を伝える試み」

・東京新聞2013年8月13日「来るかK文学ブーム」
その他多数

2013年(平成25年)6月30日(日曜日)
韓国文学の魅力
国際ブックフェアを前に

影響を与える隣人へ

出版社を設立して発信

金 承福

中沢けい

なかざわ けい

金 金

韓国文学 ブーム来る？ 作家ら来日し交流

韓国文化への深い興味や関心を持つた人々による文化交流は、より多くの広がりを持った文化ビジネス、コンテンツビジネスとしての発展を遂げている。こうした現状の中で、K BOOK振興会によるブックカタログ発行事業は、学術、芸術とビジネスの間を繋ぐ事業として有意義な活動をすることができたことを自負している。この事業は幸いなことに(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成を受けることができた。この事業に理解を示してください。

ブックカタログ発行により助けることができた。

この事業は幸いなことに(公財)韓昌祐・哲文化財団の助成を受けることができた。この事業に理解を示してください。

中沢けい氏インタビュー

日本と韓国 同じ根から咲かせる違う花

孤立して文化は展開しない



2 ブックカタログ 「日本語で読みたい韓国の本」の詳細

韓国の出版物の中から50冊を選んで日本語翻訳への紹介をするブックカタログ「日本語で読みたい韓国の本」は以下のような書籍を紹介した。

第1集

書籍名	著者名	出版社名
高齢化家族	チヨン・ミヨングアン	文学トンネ
旅をする猫	マリー・キャット	メディアセム
やじ馬たち	ユン・ソンヒ	文学トンネ
私のTOEIC満点手記	シム・ジェチヨン	ウンジン知識ハウス
わたしの恋愛のすべて	イ・ウンジョン	民音社
私の舌が口の中に閉じ込められているのを拒否するなら	キム・ソヌ	チャンビ
君の声が聞こえる	キム・ヨンハ	文学トンネ
オオカミ	チヨン・ソント	チャンビ
たつた一度の愛	ソン・ソクジョ	ヒューマンアンドブックス
桃の木	ク・ヘソン	ウンジン知識ハウス
西の森へ行つた	ピヨン・ヘヨン	文学と知性社
時間を作る店	キム・ソニヨン	子音と母音
ワンドゥギ	キム・リヨリヨン	チャンビ
ワイザード・ベーカリー	ク・ビヨンモ	チャンビ
おやすみママ	ソ・ミヒ	ノーブルマイൻ
古代ギリシャ語の時間	ハン・ガン	文学トンネ
幸せな晚餐	チヨン・ソンク	タル
私の人生に勇気を与えてくれた一言	チヨン・ホスン	ピエ
地球という星の大人が星の王子様に出会つ	チヨン・ヒジエ	知識の森

お花畠	ユン・ソクジュン	パランセ
雪のはら しないふりのおひめさま	ユン・ソクジュン	パランセ
チエ・スツキの童話CD付き絵本セット	チエ・スツキ	本を読む熊
おじいさんを喜ばせる12の方法	チエ・スツキ	ウンジンジユニア
都会のママに贈る田舎の教育法	チエ・スツキ	パランセ
1日3時間、ママの匂い	チエ・スツキ	パランセ
キムチ愛国主義	キム・インジャ	パランセ
私が読んで出会った日本	キム・インジャ	パランセ
身長103cmヒアの奇跡	イ・ウォンホン	クルダム
寂しい時は山に行け	イ・ヒヨンス	キムヨン社
韓国式の産後ケア100日の軌跡	チエ・ソギヨン	人物と思想社
健闘を祈る	キム・ユシク	グリンビ
男の空間	イ・ヒア	パランセ
脳美人	キム・ソンミ	ヘネム出版社
銭湯で出会つた億万長者の金持ちの話	チエ・ソンジュン	イエダム
ダーヴィンの知能	チエ・ジエチヨン	サイエンスブックス
戦う人文学	キム・オジュン	緑の森
私の文化遺産踏査記	ソ・ドンウク	21世紀ブックス
東洋と西洋のお茶物語	イ・ホンジュン	チャンビ
ユ・ホンジュンの国宝巡礼	ナ・ドクヨル	ウイズダムハウス
協同組合は素晴らしい	パク・ソンジュン	イルビッ
都市生活者の政治白書	チエ・ジエチヨン	バービ
ユ・ホンジュンと西洋のお茶物語	キム・ヒヨンデ	青い知識
ハ・ホングと一緒に歩く	ソ・スンワ	ブルワ
映画が好きだ	ハ・ホング	ブックハウス
踊る韓方医チエ・スンの自分で作る韓方薬	チエ・スン	ハンギル社
美肌をダメにする42の真実	ハ・ホン	コムドゥンソ
料理になつたトップボッキ	イ・ヒヨンギヨン	モミの木の森
SNOWCATのひとり遊び	クォン・ユンジュ	ウィズタムスタイル
陶磁器	ホヨン	OPENBOOKS
お風呂の神	ハ・イルグォン	エニブックス
	チエミニ主義	チエミニ主義

第2集

ブックカタログでは第1集では概況、著者略歴、目次、主な登場人物、日本でのアピールポイント、目次などを紹介した。第2集では第1集の項目に加えて短いながら試訳を加え、原文の味わいを伝える配慮をした。

書籍名	著者名	出版社名
お力ネ〜ある新入社員の危険なマネーフーム	チヤン・ヒヨンド	セウム
ふるさと写真館	キム・ジョンヒヨン	ウネンナム
探偵は死れない	イ・スルギ	ロックメディア
レテの恋歌	李文烈	アチムナラ
睡がたまる	キム・エラン	文学と知性社
生姜	チヨン・ウニヨン	チャンビ
世界の終わり、彼女	キム・ヨンス	文学トンネ
アンニヨン、エレナ	キム・インスク	チャンビ
Zombies	キム・ジュンヒヨク	チャンビ
ワンダーボーイ	キム・ヨンス	文学トンネ
殺人者の記憶法	キム・ヨンハ	文学トンネ
古びた日記	李承雨	チャンビ
キルヴァル男爵の城	チエ・ジェフン	文学と知性社
詩で味を出した幸せの韓国料理	ホ・ヨンジャ	文学世界社
心の辞書	キム・ソヨン	心の散策
もうすぐ、大人の時間が始まる	ペク・ヨンオク	ウンジン知識ハウス
アトリエの猫	コ・ヨンウォン	アートブックス
オ・ジユソクが愛した韓国の伝統絵画	オ・ジユソク	月刊美術
対話——ある知識人の生と思想	リ・ヨンヒ	ハンギル社
私の文化遺産踏査記 日本編1・2	ユ・ホンジュン	チャンビ
金剛山一万二千峰	パク・ウンスン	宝林出版社
私は大韓帝国最後の皇太子妃、李万子です	カン・ヨンジャ	知識工作所

韓国人の食卓（韓国）に古くから伝わる味の記録	ファン・キヨイク	SEEDPAPER
食卓の上の韓国史	チユ・ヨンハ	リコーマースト
韓国ミュージカル史	パク・マンギュ	図書出版ハンウル
ヤーンヤーン	キム・スンヨン	テキストコントキスト
五歳庵	チヨン・チエボン	セクト
風のように走った	キム・ナムジュン	ウンジンジユニア
火星からやってきたミール	イ・ソンスク	文学と知性社
昔の人たちはどのように暮らしたのだろうか	チヨ・ウンス	チャンピ
もう一度子どもを育てるとしたら	パク・ヘラン	木を植える人たち
ママと一緒に英語遊び100	英語「コントンツ」研究所	アップルビー
整理整頓は自分のため	パン・ジョンファン	図書出版ミヨンジュ
世界で一番おいしい化学の本	チエ・ミファ	シンクハウス
答えを出す組織	キム・ソンホ	サム&バーカース
一畠創意工夫の達人	チエ・ギュ	Book21
観点をデザインせよ	パク・ヨンフ	フロムブックス
もつと近くで笑って話そう	フロムブックス	サムソン出版社
整形手術なしで小顔作り	ジョン・サンヒヨ	PurpleCow
確かにダイエットが必要なとき	スランチ、ウナスキッチン	ブチュボム
玄米菜食	ホン・ソンテ	トド
奇跡の野菜	ソン・グアンイル	ネクサスブックス
今日からあなたも水美人	ユ・テウ	ウンジンリビングハウス
男性の下っ腹	チヨ・エギヨン	ビタブックス
一食3品ダイエットごはん	センガン	東亞日報社
こんなに美味しくて素敵な菜食	キム・ウェスン	チャンニム出版
キムチはかんだん	ナンダ	エニラックス
アコースティックライフ1	ユン・テホ	ウイズダムハウス
未生（ミゼン）	ムルソ	エニラックス
きみに飛ばすホームラン		

3 「日本で出版された韓国の児童書」 追田けい子

（「日本語で読みたい韓国の本」第2集からの再録）

韓国の児童書（翻訳書）のうち、日本によく知られた本に、1965年に刊行された『ウンボギの日記』あの空にも悲しみが（李潤福著、塚本勲訳、太平出版社）がある。しかし、その後はほとんど韓国の児童文学や絵本が翻訳出版されることはなかつた。

90年代になると、素人社（大津市）がシリーズ「コリア児童文学選」を続けざまに出すようになつた。そこには李元寿・馬海松作品集『ちつちやなオギ』、権正生・康正勲作品集『木綿のチョゴリとオンマ』、済州島民話『力持ちのマクサニ』（玄吉彦著、梁民基ほか訳）などが含まれている。90年代の後半から2005年にかけては、仲村修十オリニ翻訳会の編訳で、『子どもたちの朝鮮戦争』（李元寿ほか著）、『日本がでてくる韓国童話集』（魚孝善ほか著）、韓国現代童話集『鬼神のすむ家』（安美蘭ほか著）などが出版され、続いて『北十字星文学の会』編訳、韓丘庸監修で、『にわとりを鳳凰だといって売つたキムソンダル－南北朝鮮の昔ばなし集』など、10冊ほ

どが刊行された。

このほか90年代には『ペラン江の流れる街』（朴洪根著、仲村修訳、新幹社）、『オンマの白いチョゴリ』（権正生著、高正子訳、海風社）、『わら屋根のある村』（権正生著、仲村修訳、てらいんく）が出ており、2000年代に入ると『モンシル姉さん』（権正生著、卞記子訳、てらいんく）、『庭を出ためんどり』（黄善美著、卞記子訳、平凡社）、『悲しい下駄』（権正生著、卞記子訳、岩崎書店）などの児童向け読み物も刊行されている。

これらの書き手のうち、現代韓国の児童文学を代表する権正生は、1937年に日本で生まれ、解放後帰国し、苦しい生活と自身の病を抱えながら、子ども向けてに情感あふれる作品を相次いで生み出した。『悲しい下駄』は、10歳まで過ごした東京下町での子ども時代を題材にし、『わら屋根のある村』は、朝鮮戦争当時の子どもたちを描いた印象深い作品である。

その後2005年には、汐文社が「いま読もう！韓国ベスト読みものシリーズ」を刊行した。『おばけのウンチ』（権正生作、片岡清美訳）、『ソヨニの手』（チエ・ジミン作、金松伊訳）、『問題児』（パク・キボム作、金松伊訳）などであり、つい先頃、2008～11年には、現文メディア

アが「韓国人気童話シリーズ」と銘うち17冊を続けざまに刊行している。

主なものを挙げると、『チャリンコ・ヒコーキ・ジャーヤー麺』（イ・サンベ文、高橋宣寿訳）、『心に刺さったガラスの破片』（ファン・ソンミ文、高橋宣寿訳）、『帰ってきた珍島犬ペック』（ソン・ジエチャン文、榎原咲月訳）、『ぼくのすてきなお兄ちゃん』（コ・ジョンウク文、吉田昌喜訳）、『北からやつてきた・女の子』（ウォン・ユソン文、榎原咲月訳）、『幼い王様の涙』（イ・ギュヒ文、榎原咲月訳）などとなる。これらは現在の韓国社会を背景に描き出された人気の児童書である。また、このほかに岩崎書店から『ドラゴンラージャ』（イ・ヨンド作、ホン・カズミ訳）、『ねこの学校』（キム・ジンギヨン作、ホン・カズミ訳）などのエンターテインメント系の作品も刊行されている。

韓国の絵本や児童書が質的に大きな変化を遂げたのは、1988年のソウルオリンピック前後からで、その原動力となつたのが、いわゆる「3・8・6世代」、60年代に生まれ、80年代に大学に通い、90年代半ばに30代の働き手だつた作家、画家、編集者たちである。

さらに、1978年から2008年にかけて、日本の

ユネスコ・アジア文化センターが開催した「野間国際児童日本で翻訳出版された韓国の児童書日韓出版交流展」韓国人が読んだ日本の本、日本人が読んだ韓国の本27本原画コンクール」も、韓国の新人画家の発掘にいくばくかの貢献をしている。1988年に出了『さばくのきようりゅう』（講談社）の作者康禹鉉、1990年の『山になつた巨人白頭山ものがたり』（福音館）の作者柳在守は、いずれもこのコンクールで入賞を果たし、続いて日本でも絵本作家としてデビューした。

1997年には、韓国のポリム出版社が、英語・フランス語・ロシア語・中国語・日本語・韓国語の6カ国語の「韓国民話絵本シリーズ」を発行した。こうして『おにの金棒』（韓炳浩絵）、『力持ちのパンチヨギ』（李億培絵）など6冊が日本の読者にもお目見えした。

その後も韓国の創作絵本の日本での翻訳出版が続いている。ここで注目すべきは、1998年の『マンヒのいえ』（クオン・ユンドク絵・文、みせけい訳、セーラー出版）である。次いで翌99年には『あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかも』（イ・ヨンギヨン絵・文、かみやにじ訳、福音館書店）、さらに汐文社からも、田島伸二の監修で『ウサギとカメ』（パック・セホ作画）、『牛

になつた寝太郎』（ホン・ソンチャン作画）、『ノルブとフンブ』（リュウ・チエス作画）の3冊が出ている。

そして2000年に、国際子ども図書館が開館を記念して「韓国絵本原画展」を開催した。この時に展示紹介された絵本の多くが、のちに日本語になつて出版された。2000年刊行の『ソリちゃんのチュソク』（イ・オクベ絵・文、みせけい訳、セーラー出版）は、「青少年読書感想文全国コンクール」の課題図書になつたことでよく知られている。それに続いたのが『こいぬのうんち』（チヨン・ソンガク絵、権正生文、卞記子訳、平凡社）、「せかいいちつよいおんどり』（イ・オクベ絵、イ・ホベク作、おかげだゆりこ訳、新世研）、『なかよしむら』（ホン・ソンチャン作・絵、うめさわかよこ訳、新世研）、『うしとトッケビ』（ハン・ビヨンホ絵、イ・サン文、おおたけきよみ訳、アートン）、『へチとかいぶつ』（ハン・ビヨンホ絵、チヨン・ハソプ文、おおたけきよみ訳、アートン）などである。

2004年に刊行されたアートンのシリーズ、2005年にはじまる少年写真新聞社のシリーズのように、、『くらやみのくにからきたサプサリ』（チヨン・ソンガク絵・文、おおたけきよみ訳、アートン）などである。

2004年に刊行されたアートンのシリーズ、2005年にはじまる少年写真新聞社のシリーズのように、、『くらやみのくにからきたサプサリ』（チヨン・ソンガク絵・文、おおたけきよみ訳、アートン）などである。

CHEONGHAK

セット形式による出版も見られるようになつた。「あづきがゆばあさんととら」のような昔話を題材にしたもの、『ソルビム お正月の晴れ着』（ペ・ヒヨンジュ絵・文、卞記子訳、セーラー出版）のように伝統文化を伝えるものもある。文学作品を題材にしたものとしては、『かあさんまだかな』（李泰俊著、キム・ドンソン絵、チヨン・ミヘ訳、フレーベル館）、『とんぼ』（チヨン・ジョンチョル詩、イ・グアンイク絵、おおたけきよみ訳、岩崎書店）などがある。

先に紹介した権正生の作品を絵本化したものとしては、『ゆらゆらゆくよ』（キム・ヨンチヨル絵、金広子訳、小峰書店）、『キジのかあさん』（キム・セヒヨン絵、卞記子訳、平凡社）をはじめ6点ほど刊行されている。

以上、紹介したように、力強く、ユーモラスで、日本とはちよつと色使いの違う韓国の絵本の数々、これからも目を離すことはできそうにない。

※ この原稿は、2013東京国際ブックフェアテーマ国韓国特別展示「日韓出版交流展」の冊子に掲載されたものです。

4 「日本で翻訳出版された韓国の『歴史・社会』部門」

館野 哲たての あきら

（「日本語で読みたい韓国の本第2集からの再録」）

日本での韓国書の翻訳出版は「文学」がもつとも多く、それに続くのが「歴史」である。

この両者は「韓流ブーム」の影響もあり、いまも刊行点数が目立っている。ここでは「歴史」から「社会」にまで範囲をひろげ、主に2000年以降に翻訳刊行された17点（この分野の選定書）を中心に紹介してみたい。

「歴史・社会」となれば、「東洋文庫」（平凡社）の書目を挙げるのに異議を唱える人はいないだろう。『白凡逸志』を筆頭に、『東学史』『海遊録』『懲毖錄』『三国史記』『看羊錄』『択里志』『熱河日記』『朝鮮獨立運動の血史』『洪吉童伝』『訓民正音』と続き、その数は朝鮮関係だけでも20点を超えている。古典をきちんと校訂してから翻訳し、丁寧な訳注と解説を施したこのシリーズは、東アジアの近現代史を知るための必読書で、公立・大学図書館の常備図書くなっている。

次に、1945年以後の韓国現代史を扱った、徐仲錫

たとえ政治と社会は民主化されても、世の中には依然として様々な矛盾や葛藤が存在する。現代韓国の未解決の課題を摘出し、解決の方向を示しているのが、禹哲薰・朴權一『韓国ワーキングプア88万ウォン世代』（明石書店）と、権仁淑『母から娘へ、ジェンダーの話をしよう』（梨の木舎）で、前者は若者が求職難にあえぐ現場をレポートし、後者はジェンダー意識がどうつくられるかを娘への語り形式でまとめたものだ。

他方、より身近に韓国社会の断面を描き出したのが、キム・ナンド『つらいから青春だ』（ディスクガーデン）、キム・ジョンウン『私は妻との結婚を後悔している』（サンマーク出版）である。この2冊を読むかぎり、若者や一般市民の暮らしや思考方法は極めて日本と似通っている。読んでいくと共感するところが多い。先の見えない社会を生きる何らかの示唆が得られるだろう。

世界各地で活躍している韓国人、そのひとりにプロサッカーの朴智星がいる。『名もなき挑戦、世界最高峰にたどり着けた理由』（小学館・集英社プロジェクト）は、成功者の自己顯示的な自伝ではない。努力と反省を重ねてトップスターになつた、彼の謙虚で誠実な人柄が読者をひきつける。

『韓国現代史60年』（明石書店）、「韓洪九の韓国現代史」（平凡社）、朴明林『戦争と平和、朝鮮半島の1950年』（社会評論社）、金東椿『朝鮮戦争の社会史』（平凡社）、金聖七『ソウルの人民軍（歴史の前で）』（社会評論社）がある。解放後、朝鮮半島の南と北では激しい戦争が起り、その結果、南北の分断が固定化してしまつた。これらの本の著者は独自の切り口で鋭く韓国現代史の真実に迫つており、知られざる東アジア史を学ぶための必読書といえる。この70年に近い歴史を知らずに、日本や東アジアの未来を語ることはできない。

韓国では解放後にも、強権政治・軍事政権の時代が長く続いた。それに反対する人々の民主化・分断克服の闘いが粘り強く展開された。1987年、これらの運動の多くは終息を迎えるが、その戦いと痛みの過程を詳しく語つたのが『金大中自伝』（I・II、岩波書店）、韓勝憲『分断時代の法廷』（岩波書店）である。民主化運動が輝かしい成果を収めるまでには、大きな犠牲がともなつた事実を、この2冊は教えてくれる。さらに白楽晴『朝鮮半島統一論』（クレイン）、同『韓国民民主化2・0』（岩波書店）は、南北分断構造をいかに克服し、統一を成し遂げるか緻密にそのプロセスを展望する。

韓国では宗教家の著書がしばしばヒットする。法頂の隨筆集『無所有』（東方出版）は、宗教家の著書としてはひろく読まれた本だつた。しかし、法頂僧侶は自分の著書はすべて絶版にせよと遺言して旅立つた。だからいま韓国の書店では、『無所有』も他の著書も入手できかない。この本はあらゆる物欲を排し、心穏やかに生きることの意味を説いて静かな感動を呼び起こさせる。

俞弘濬『私の文化遺産踏査記』（法政大学出版局）このシリーズの日本語版は3冊刊行されたが、韓国では北朝鮮編をふくめて既刊7冊、2014年8月に「日本編（九州と近畿）」2冊が加わつた。著者が韓国内外を訪ね歩き、その土地の歴史や文化、人びとの暮らしぶりを書き綴つた記録で、飾らない率直な語り口が魅力的。韓国文化の深み、味わいを知りたい人にお勧めしたい。

朴永濬ほか『ハングルの歴史』（白水社）は、ハングルの歴史と特徴を語つて尽きることがない。韓国人のウリマル自慢を是認したい気持ちにもなつてくる。韓国語を学ぶ者にとっては必読書だろう。

最後に、李御寧『縮み志向の日本人』（講談社学芸文庫）、著名な文明批評家の鋭利な觀察力が、日本人と日本社会を「縮み志向」と喝破した。ロングセラーなので、すでに

CHEONGHAK

に読まれた方が多いかもしない。著者は今回の東京国際図書展で、立花隆氏と対談している。

推薦したい書物は、この17点のほかにもたくさんある。とりわけ学術研究書部門では、法政大学出版局の「韓国共同研究叢書」（全30巻）と、慶應義塾大学出版会の「日韓共同研究叢書」（全21巻）を推薦しておきたい。前者は『私の文化遺産踏査記』をはじめ、歴史・社会・文化における第一級の研究書を厳選し翻訳したもの、後者は日韓両国の研究者が結集し、七つの課題について共同研究を重ねた成果で、両シリーズともに日韓両国の知的交流と相互理解のために大きな役割を果たしている。

また、韓国併合、竹島（独島）、日本軍「慰安婦」、教科書問題などで、韓国側の主張をありのまま伝える書籍も何点か刊行されている。

さらに、固執的とも思える韓国の主流言論に、敢えて異説を唱えた朴裕河『和解のために』（平凡社）、『反日ナショナリズムを超えて』（河出書房新社）、李榮薰『大韓民国物語』（文藝春秋）が出ていていることも記録に留めておきたい。

※この原稿は、2013東京国際ブックフェア「韓国特別展示」「日韓出版交流展」の冊子に掲載されたものです。

5 「2013東京国際ブックフェアを振り返る」 K-BOOK振興会

（「日本語で読みたい韓国の本第2集からの再録）

今年で20回目を迎えた2013東京国際ブックフェアが、7月3日から6日まで東京ビッグサイトで開催された。20回という節目の年に相応しく、同時開催された5つの展示会を合わせると、25カ国から1360社が出展、前回を大きく上回る過去最大規模の展示会となつた。

今回のブックフェアで特に目を惹いたことが2つあつた。一つは、紙の書籍と電子書籍という正反対の存在が生み出した大きなうねりに影響されて、日本の出版業界が過渡期を迎えているという点である。ブックフェアと同時開催されていた電子出版EXPOや、今年から始まつたコンテンツ制作・配信ソリューション展は、新商品の発表や電子書籍で動画を配信するデモンストレーションなどで賑わい、それに真剣な眼差しを向ける来場者で大盛況だつた。当然ながら技術の導入を目的とした商談も、至るところで行われていた。

電子書籍に関連するビジネスが好調なのは、アメリカの通販サイト、アマゾン・ドット・コム（以下「アマゾ

テーマ国・韓国主催の多彩なイベント

ン」）が、電子書籍サイト「Kindle（キンドル）ストア」を2012年日本でオープンさせ、日本語電子書籍の販売を開始したことが大きく影響していると見られる。アメリカでは、2007年から始まつたKindle本（電子書籍）の販売数が、2011年に紙の本の売り上げを超えて、2013年は紙の本の2倍に迫る増加率を示している。日本はサービスを立ち上げてまだ1年ということで、紙の書籍の販売量には遠く及ばないが、MM総研が推計した今年3月末までの1年間に出荷された電子書籍専用端末の台数は、前年比42.4%増の47万台、トップはアマゾンでシェアは38.3%という結果が出た。見るべき作品が少ないといわれてきたKindleストアの日本語書籍蔵書数も、この1年間で約3倍の14万8千点に、コミックは約3.5倍の5万3千点にまで増加している。

出版不況の影響もあるのか、同時開催のフェアが増えたたびに、東京国際ブックフェアのスペースが狭まっているようだ。これまで電子書籍の後進国といわれてきた日本だが、読書や出版の未来はどこへ向かっているのだろうか。

今回、もうひとつ見所は、今年の東京国際ブックフェアのテーマ国に韓国が選ばれたことだつた。「本で結ぶ日韓の「こころと未来」をスローガンに、5000m²のスペースを確保、個別スペースには出版社など27社が出演した。パビリオン内の特別コーナーには、韓国の世界遺産から現代のIT技術までが一目で分かる歴史、日韓の出版交流史、伝統文化、芸術、料理、観光などを網羅した書籍が多数展示され、会期中多くの人が訪れた。

また、展示に合わせて開催された対談や講演会には、日韓両国を代表するオピニオンリーダー、重鎮作家、若手作家などが集結。これだけの顔ぶれが一堂に会する機会は滅多にないだけに、来場者の注目度は一段とアップしたようだ。こうした広範囲にわたる熱っぽい議論・交流が、会期中の4日間休みなく続けられた。

今回の各種イベントのうちで、核心をなすものが「デジタル時代、なぜ本なのか？」のテーマを掲げて行われた対談で、韓国側は李御寧氏、日本側は立花隆氏と知名度の高い2人が選ばれた。両者は心中期するところが多くつたのだろう、その「高説」に聴衆は戸惑いを隠せ

ないよう見受けられたが、何らかの示唆を得られたのなら喜ぶべきだろう。

出版セミナー「韓日の出版業界の現状と韓日翻訳出版の成功事例」は、第1部を「韓日出版産業の座標と課題」、第2部を「韓日翻訳出版の成功事例」と題して行われた。翻訳出版の成功事例では、報告者が分野ごとに事例を紹介し、それをめぐつて討論する形式が取られた。「文学」は、ウネンナム出版の李貞臺氏と集英社の岩本暢人氏、「児童・実用」は、ハンリム出版の朴燦洙氏とディスカヴァリー・トゥエンティワンの原典宏氏、「一般教養」は四季節出版のカン・マクシル氏と明石書店の黒田貴史氏が発表者として登壇し、これまでの翻訳出版の問題点や今後のあるべき姿について意見交換を行つた。

日本側の発表者からは、より多くの韓国書籍を日本で翻訳出版するには、韓国の出版全般に関する多彩な情報を日本語で紹介していくことが必要、とする意見が多く提出された。第1部で報告した星野涉氏（文化通信編集長）は、全世界で2千万部の売り上げを誇る韓国生まれの人気科学漫画『サバイバルシリーズ』について言及。同シリーズはこれまでに37冊が朝日新聞出版から翻訳出版されており、累積販売数が170万部に達することから

も、コンテンツに固有の競争力をさえあれば、日本の出版市場の壁を打ち破ることは十分に可能である」と述べた。集英社の岩本氏も、日本で翻訳出版される韓国文学が少ない理由として「大衆的なコンテンツの不足」を指摘。「多样性・大衆性・娯楽性を兼ね備えた作品であれば、日本市場でも十分に勝算はある」と心強いアドバイスをしていた。

韓国文化への熱い視線

K BOOK振興会の企画、韓国文学翻訳院の主催で行われた日韓の作家による対談など7つのプログラムも、連日多くの聴衆が参加し、立ち見ができるほどの盛況ぶりだつた。初日は現代の韓國の人文科学をリードしてきた高麗大学名誉教授の金禹昌氏、日本側は韓国でも人気の高い哲学者の柄谷行人氏が登場。長年交流をしてきた両氏は90分間にわたり「東アジア文明の普遍性」をテーマに意見を交わした。東アジア文明の伝統が現代に至りどのように破壊され、またどのように伝承されたのか、民主主義を含む社会の定義をどのように打ち立てるべきか、現在の日韓関係や文学の位置、政治的関係を回避し

た文化交流のあり方などを本と文化と歴史を通して知ることのできる、非常に意義深い対談だつた。

日韓の現役作家（小説家・詩人）によるその他の座談会も、以下の豪華メンバーにより活発なトークが繰り広げられた（敬称略）。

「韓国文学を語る」——韓国側から李承雨、日本側から小説家でK BOOK振興会会长の中沢けい。司会は川村湊。

「女性のアイデンティティと文学」——韓国側から吳貞姫と韓江、日本側からは中上紀。司会は波田野節子。

「わが人生、わが詩」——韓国側から詩人の崔勝鎬と安賢美、日本側からは詩人の佐川亜紀。司会は沈元燮。「都市と物語」——共同体的な生き方を考える——韓国側からは具孝書と朴晟源。日本側からは中村文則。司会は吉川凪。

「文学における疎通とは〈生きること〉を受け入れる勇気について」——韓国側から金衍洙と金愛爛、日本側からは川上未映子。司会はきむふな。

「韓国文学の夜、朗読会」（韓国文化院 ハンマダンホル）では演劇俳優たちと著者本人による（吳貞姫、崔勝鎬、李承雨）朗読が行われた。

韓国パビリオンでのプログラム

韓国パビリオンの中に40席ほど設けられたミニ会場では、クオン出版社の企画・進行によるトークショーが開催された。色々な分野から韓国を日本に紹介し、みずから日韓友好に尽力している方々が「韓国を語る」というテーマで幅広いトークを展開された。

迫田けい子氏（韓国絵本の世界）、永田金司氏（儒教の国！韓国の不思議）、岡崎暢子氏（日本語環境での韓国語DTP）、『韓国語ジャーナル』を例に10年の軌跡を語る）、西田栄子氏司会で芦原伸氏（旅と鉄道）編集長）とシン・グンソプ氏（韓国鉄道マガジン『RAILERS』

編集長）の対談、黒田福美氏（韓国ぐるぐるソウルを出よう）、松本昌次氏（韓国・朝鮮の出版を通して日本を問う）、朴光洙氏（韓国図書販売50年）、趙美良氏（『わが家の闘争』の全貌）、加賀谷浩子氏（韓国絵本の読み聞かせ）八田靖史氏と西田栄子氏の対談（オススメ韓国（食べて、遊んで、ちょっと学んで）、古谷正亨氏（K-POPの世界戦略と課題）、井上美知子氏（写真を通じて見た韓流10年の歩み）田代親世氏（ふるい立つ、感動。韓ドラの魅力）、藤原倫己氏（藤原流！机に座らない韓国語学習！）

いずれの方々も、それぞれが出会った韓国と自身の体験を率直に語られており、聴衆が韓国をより身近に感じることのできる絶好の機会となつた。

ドラマやK-POPなど、大衆文化の韓流ブームは変わらぬ勢いを見せているが、残念ながら韓国の出版コンテンツの場合は、それらに遠く及ばないのが現状である。昨年、韓国語に翻訳された日本の書籍は3948点、それに対して日本語に翻訳された韓国の書籍は約100点。ほぼ40対1という結果になつていて。

書籍名	著者名	出版社名
1 「世界の果て、彼女」	キム・ヨンス	クオン
2 「民族文化財を探し求めて」	ヘムン	影書房
3 「奇跡の自然栽培」	ソン・グアンイル	自然食通信社
4 「協同組合は素晴らしい」	キム・ヒョンテ	彩流社
5 「ハン・ホングと一緒に歩く」	ハン・ホング	彩流社
6 「1945年朝鮮をあとにして」	イ・ヨンシク	明石書店
7 「ワンドーボーイ」	キム・ヨンス	クオン
8 「五歳庵」	チヨン・チエボン	クオン
9 「飲食の国ではピピムパップが民主主義だ」	韓国詩人協会	クオン
10 「反日モンスター」	チエ・ソギヨン	講談社
11 「未生」	ユン・テホ	サンマーク出版
12 「1日3時間、ママのにおい」	イ・ヒヨンス	講談社
13 「自然主義文学論」	カン・インスク	クオン
14 「対話」	リ・ヨンヒ	明石書店
15 「マザーテレサのいる動物病院」	キム・ハウ	彩流社
16 「ソクラテスのいるサッカー部」	キム・ハウン	彩流社
17 「トルストイのいる古本屋」	クォン・アン	彩流社
18 「アリストテレスのいる薬屋」	パク・ヒヨンスク	彩流社
19 「シェイクスピアのいる文房具屋」	シン・ヨンラン	プロンズ新社
20 「長寿湯仙女」	ペク・ヒナ	明石書店
21 「戦後の誕生」	クォン・ヒョクテ	明石書店
22 「朝鮮引き揚げと日本人」	イ・ヨンシク	大月書店
23 「抵抗と絶望」	キム・チヨル	出版メディアパル
24 「韓国出版発展史」	キム・ドウヨン	北沢図書出版
25 「本でつくるコートピア」	キム・オノ	竹書房文庫
26 「錢の戦争（上・下）」	パク・イングォン	PHPエディターズグループ
27 「孤独だから強くなれる」	カン・ソヒヨン	

日本での翻訳出版を増やし市場規模を広めるために、韓国サイドとしては日本など海外市場でも通用する、競争力を持つたコンテンツを生み出すことが急務だろう。これは、韓国の出版物が海外に進出する原動力になるだけなく、韓国内の出版市場の活性化にもつながる大切な使命なのである。同時に、日本の出版関係者がセミナーの席上で一様に述べていたように「韓国の書籍や出版市場に関する情報を日本語で持続的に提供できる」体系づくりも必要不可欠だろう。これが可能になれば、韓国書籍の翻訳出版を手がける出版社もかなり増えてくるのではないかだろうか。

今はまだ原石にすぎないK-BOOKであるが、日本で燐然と輝くダイヤモンドになる日はそう遠くはないはずだ。そのために「今やることを着実に進めていく」必要性を、改めて強く感じる4日間であつた。

6 「日本語で読みたい韓国の中の本」の成果

以下の書籍の日本語への翻訳出版の契約が成立し、出版された。

日本語訳翻訳出版のカタログからもわかるように翻訳

の分野は多岐にわたり、分野の広がりから単純な文化交流では得られない日韓相互のつながりを感じることができる。経済の分野では「人、物、金」の三つの要素が緊密に連携することが重要だといわれるが、それらの要素が自然な連携と相互協力が形成されつつあることが日本語翻訳された出版物の種類からも窺うことができる。

近年、ビジネスと文化を分けて考える態度から、ビジネスを支える基盤としての文化という考え方への転換が多様な分野で起きている。当初、K-文学振興委員会として出発したブックカタログ制作の事業は考え方としてはビジネスと文化を分けたものであった。そこでは、利益を挙げられるビジネスコンテンツとしての映画、テレビドラマ、軽音楽などとは一線を画す韓国文学の紹介を意図していた。ビジネスコンテンツとして成立しえない文学作品の紹介では、文化を根底から支える精神的産物である文学が、分割され特殊なものとして一般的の多くの人の目から隠されてしまうというデメリットが発生する。それらはごく一部の専門家のものになってしまふのである。そうした状態は決して好ましい結果を生まない場合もある。娯楽的な文学作品と純文学を分けた習慣を1920年代頃から確立した日本の書籍市場で

多くの人々の関心を集めコンテンツビジネスとして成立する出版物と、ごく限られた専門家が関心を持つ出版物であるが、文化形成には重要な出版物を混在させて紹介することによって、そこに人の集まりができる。また人の集まりは情報交換の場となる。情報交換の場には、新時代にふさわしい精神的な活動が生まれてくる。という良い循環を作り出す場としてブックカタログ制作が機能を発揮するのは、予想外の出来事であった。

日韓双方に留学生は増加している。日韓双方で観光客も増加している。もちろんビジネスを目的として訪韓する人も訪日する人も多い。ブックカタログは、日本の出版人に韓国の出版物を紹介し、版権契約を促進しながら日本語翻訳出版物を作るという目的をもつて刊行されたのだが、複次的に日本国内で韓国語を学習する人々に、

日韓の間の活動は変化しているのである。そうした現状にふさわしいブックカタログを作ることができたものと自負している。

7 ブックカタログ事業の今後の展望

（公財）韓昌祐・哲文化財団による支援によつて2013年に「日本語で読みたい韓国の本」第1集、第2集を刊行することができたので、実際的な効用を知つてもらうことができた。K-BOOK振興会では、2014年に「日本語で読みたい韓国の本」第3集、2015年に「日本語で読みたい韓国の本」第4集を刊行し事業を継続する事が可能となつた。それぞれ50冊を日本の出版社のみならず一般読者にも紹介することができた。出版は一時的な事業ではないので、過去に紹介した書籍の中からも今後、日本語への翻訳契約が成立することがあらえる。しかし、日本から韓国への翻訳物のバランスがとれた状態とはまだ言い難い現状を考えると、「日本語で読みたい韓国の本」の刊行の意味合いはこれからも大きなものとなつてゆくに違いない。

環境問題や金融市场などに象徴されるように、それぞれの文化的背景を持つた個人の活動へと、今日の

CHEONGHAK

現在、日韓両国の中には活発な経済活動が行われている。活発な経済活動とともに生まれてくる文化は、おそらく国を超えたものになるであろう。国と国の交際から、

今日的課題は国境を超えた人類共通の課題として受け止められなければならないものが多い。こうした課題は文化的背景が異なる人々の相互の協力によって解決への道筋がつけられることであろうと考える時、国境を超えた出版流通の道筋をつける必要が生まれてくる。ブックカタログはその小さな一步として確実に継続されて行くことが望まれる。

デジタル技術とインターネットの登場によつて、出版は産業としての衰退期を迎えていたといわれるとは日本だけではない。世界的な傾向と言つても過言ではないだろう。しかしながら、人間精神の発露としての本の役割が終わつたわけではない。時代精神の形成の場としての本の役割も終わつたわけではない。デジタル技術とインターネットはまだメディアとしては生まれたばかりの技術で、急速に発展しているとはいえ、文化形成のための機能と役割には未知数なところが多くある。登場したばかりのメディアとしての未熟さと経験の浅さに比べ、紙と印刷で作られる書籍は長い歴史と経験を持つている。この二つの技術を文化形成の場でどのように運動させ、それぞれの特性にあつた機能を使いこなしてゆくのかは実践的な試みによつて、しだいに明らかになるであろう。

日本での翻訳出版を目指す編集者の皆さまのご尽力があり、実際の翻訳出版に繋げることができた。御礼を申し上げる。ブックカタログ発表の場を作つてくださった韓国文化院の皆さまにも御礼を申し上げなくてはならない。ブックカタログ制作とその発表会、さらには関連した行事では常に熱っぽい活力がみなぎっていた。その活力は国と国の関係を超えて、新しい時代を切り開こうとする人々の熱意から生まれたものであつた。今、わずかに姿を現しつつある新しい時代の息吹と熱を、ブックカタログ刊行の事業を通して確かに感じ取ることができた。人間の未来の仕事の端緒を開いてくださった(公財)韓昌祐・哲文化財団に重ねて御礼を申し上げて、この拙い報告を閉じる。

韓国の出版物をブックカタログによつて紹介することを軸としたK-BOOK振興会の事業は、ネットの有効な利用と従来型の書籍との役割分担を視野に入れながら継続して行くことになるであろう。

8 謝辞

韓国で出版された書籍紹介のブックカタログを作り、日本の出版社および読者の最新情報を届けるという事業に理解を示された(公財)韓昌祐・哲文化財団に感謝を申し上げたい。韓昌祐・哲文化財団の助成によつてブックカタログ「日本語で読みたい韓国の本」は単なるプランに留まらずに、実際の刊行物となることができた。商業的な成功を期待できる書籍と文化的な価値の高い書籍を混在させるという新たな試みに、多大な理解を示してくれださつた(公財)韓昌祐・哲文化財団である。資金助成を得たことでブックカタログは継続的な刊行の端緒を開くことができた。また、ブックカタログ制作にあたつては、韓国に関して各分野の専門家、研究者、韓国語の翻訳者などの方々に多大な理解とご協力をいただいた。御礼を申し上げる。さらにブックカタログ刊行後には、

日韓体育・スポーツ交流史年表

筑波大学体育スポーツ史研究会代表

大熊廣明

古代史に関心がある人なら、『日本書紀』や『続日本紀』に日本と朝鮮半島の交流に関する記事がたくさんあることはよくご存じであろう。その中には身体運動文化に係わる事柄も登場する。たとえば『日本書紀』では、応神天皇15年（284）8月6日、百濟王が阿直岐を遣わして良馬二匹を奉つた、とある。また、仁德天皇12年（324）8月10日には、高麗の客を朝廷でもてなし、この日、群臣百寮を集めて、高麗の奉つた鉄の盾・的を試した、とある。多くの人が的を射通すことができなかつたが、ただ的臣の先祖の盾人宿禰だけが鉄の的を射通した。高麗の客たちは、その弓射る力の優れたのを見て、共に起こつて拝礼したと書かれている。さらに、相撲史ではよく知られていることだが、皇極天皇元年（642）

7月22日、百濟の使者、大佐平智積らを朝廷で饗し、健兒（強健な兵士）に命じて相撲を取らせた、とある。

『続日本紀』では、元明天皇和同7年（714）12月26日、新羅国の使者の入京に際し、從六位下の布勢朝臣人・正七位上の大野朝臣東人を遣わし、騎兵170騎を率いて迎えた、とある。また、元正天皇靈龜元年（715）正月17日、王宮の南門で新羅の使いも射手の列に加わって射礼を行い、それぞれの地位や技に応じて真綿を賜つた、とある。また、靈龜2年（716）6月7日、正七位上の馬史伊麻呂らが、新羅国丈五尺五寸の紫の驃馬（強い馬）二匹を献上したことが記されている。この当時、騎兵の役割りは大きかつたと思われ、乗馬術や騎射術に関する交流も行われたのではないかと推察される。

時代はだいぶ下るが、江戸時代には朝鮮通信使が曲馬（馬上才）を披露したことことが知られている。曲馬はもともと軍事技術であったが、江戸時代にはやがて興行としての意味も持つようになつた。日本の馬術は韓国から大きな影響を受けたものと思われる。また、これとは反対に、『武芸図譜通志』（1790）に見られるように、18世紀の朝鮮の剣術は日本の剣術の影響を強く受けていたことが明らかになりつつある。

しかしながら、いわゆる前近代の日韓の交流に関しては、これまで一部を除いて体育・スポーツ史の観点から十分に考察されてきたとは言い難い。今回、（公財）韓昌祐・哲文化財団の研究助成を頂き、日韓の体育・スポーツ交流史に関する研究を行つた。今後の研究の基礎的な作業として年表と史料集の作成を目的としたが、ここに発表させていただくのは20世紀に入つてからの交流年表の一部である。交流は当初の想像より活発に行われていた、というのが率直な感想である。まだ考察が不十分で、戦前の韓国側のチームや団体等については、その性格や日・韓人の構成比等、これから詳しく調査していく必要を感じている。

今回は掲載を見送つたが、前近代における交流に関し

ては、例えば主として李燦雨が担当した朝鮮通信使が伝えた馬術について、新たに発掘した史料も含めてかなりのことが明らかになりつつある。また、交流全体について韓国側の史料からも記事を収集している。それらも含めた前近代の日韓体育・スポーツ交流史年表については、機会を改めて発表させていただきたいと考えている。

なお、年表は筑波大学の李燦雨助教並びに同大学院の村井友樹、五賀友繼、岡村拓、咸章鉉の諸君の協力を得て作成した。使用した資料は次の通りである。

『近世日本相撲史』（1975）、『近代体育スポーツ年表』（1973）、『競輪五十年史』（1999）、『講道館百三十年沿革史』（2012）、『続日本庭球史』（1988）、『日本ゴルフ協会七十年史』（1994）、『日本サッカー協会75年史』（1996）、『日本テニス協会七十年史』（1992）、『日本ハンドボール協会創立75周年記念誌』（2013）、『日本ホッケー九十年史』（1997）、『ボクシング百年』（1966）、『早稲田大学ア式蹴球部75年史』（1998）、『早稲田大学柔道部百年史』（1997）、『早稲田大学野球部五十年史』（1950）、『早稲田ラグビー史の研究』（1997）、朝日新聞、朝鮮日報、東亜日報、読売新聞

年月日	事項	備考
1905・4・1	法政大学野球部満鮮遠征	法大8勝4敗1分け
1912・12・2	韓国YMCA野球団遠征、早稲田大学など在東京チームと試合	YMCAチーム1勝6敗
1917・11・1	京城講道館朝鮮支部設置	YMCAチーム2勝3敗
1919・4・1	朝鮮体育協会創立	YMCAチーム1勝1敗
1920・3・1	韓国YMCA籠球団招聘試合	芝浦グラウンド、慶應勝利
1921・2・1	東京YMCA籠球団招聘試合、韓国YMCA対東京YMCA	YMCAチーム3勝6敗
1922・7・27	京浜中等学校野球大会、慶應対自白	芝浦グラウンド、慶應勝利
1923・1・1	韓国YMCA籠球団日本遠征試合	金泉尋常小学校
1923・1・22	南鮮陸上大運動会	農大10戦10勝
1925・8・20	農大卓球チーム満朝遠征	農大10戦10勝
1926・1・1	早大招聘籠球試合、韓国YMCA対早大	YMCAチーム2勝3敗
1926・10・19	朝鮮蹴球団対高師ア式蹴球戦	朝鮮蹴球団勝利
1927・4・1	朝鮮蹴球団対早大試合	神宮球技場、引き分け
1927・4・10・20	韓国YMCA籠球団日本遠征試合	YMCAチーム6勝2敗
1929・4・1	バスケットボール試合、京城YMCA対商大及び京城YMCA対大学選抜	新宿六中コート、京城YMCA1勝1敗
1930・7・15	野球試合、慶應大学対朝鮮殖産銀行	新宿六中コート、京城勝利
1930・8・6	野球試合、立教大学対京城鉄道局	朝鮮YMCA籠球団が日本大学連合軍を撃破
1930・8・7	野球試合、東京帝大対朝鮮	岡崎公園球場、3-1で同志社負ける
1930・9・18	蹴球試合、早大対朝鮮蹴球団対抗試合	岡崎公園球場、朝鮮チームが勝つ
1930・9・26	蹴球試合、明治大学対延禧専門学校蹴球戦	京城運動場、朝鮮チームが勝つ
1931・8・18	野球試合、東京帝國大学対平壤	京城グラウンド、6対0で明大負ける
1931・9・1	韓国YMCA籠球団日本遠征試合	公設球場、11-6で東大負ける
1931・9・25	早大野球部満鮮遠征、京城電気、朝鮮殖産と対戦	京城運動場、朝鮮チームが勝つ
1931・9・4	蹴球戦、早大対微新クラブ	京城運動場、朝鮮チームが勝つ
1931・9・7	蹴球大会、早大対朝鮮蹴球專崇美団	京城運動場、7-0で早大負ける
1931・11・6	蹴球試合、九州帝国大学対京城大学	京城運動場、1-1で引き分け
1932・4・6	蹴球試合、立教大学対全京城	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1932・6・22	陸上競技試合、歐州遠征学生陸上選手チーム対全朝連	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1932・7・15	全朝連陸上競技会、日本学生陸上チーム対全朝連	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1932・8・23	対抗陸上競技大会	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1932・12・15	対抗拳闘、日本関東選抜軍相手	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・3・15	日本拳闘試合	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・3・26	ラグビー試合、明大対学士クラブ	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・1	韓国YMCA籠球団日本遠征試合	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・1	早大招聘籠球試合、韓国YMCA対早大	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・10	内鮮女子陸上競技開催	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・10	内地対朝鮮女子陸上競技会	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・23	バスケットボール大会、朝鮮対明大	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・4・24	バスケットボール大会、朝鮮対全名古屋	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・5・4	バスケットボール大会、朝鮮対GBクラブ	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・5・4	早大野球部二軍満鮮遠征	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・5・28	オリエンピック陸上関東予選、金選手五万米競歩優勝	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・6・1	バスケットボール大会、朝鮮チーム対慶大・帝大・早大対抗試合	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・6・20	柔道試合、学連対朝鮮軍	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・6・23	第7回中等学校排球選手権大会	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・9・27	日本中等学校籠球	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・11・20	第3回全日本柔道選手権大会	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・11・29	全日本水選手権大会、五百米スピードレース	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・12・20	朝鮮延禧専門対京都帝大籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・12・23	朝鮮延禧専門対立教大学籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・12・27	朝鮮延禧専門対立教大学籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・12・30	朝鮮延禧専門対全日本柔道選手権大会	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・1934	朝鮮延禧専門対立教大学籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・5・1	朝鮮延禧専門対立教大学籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ
1933・5・6	朝鮮延禧専門対立教大学籠球戦	京城運動場、79-44で歐州遠征学生陸上選手チーム勝つ

1933・5・26	布哇大学対延禧専門学校野球戦	京城グランプリ、延禧勝利
7・3	早稲田大学陸上部遠征、早大対全京城対抗陸上競技大会	京城陸上競技場、73対41で早稲田の勝ち
7・9	野球試合、全京城対釜山鉄道	京城球場、9-5で全京城勝ち
7・15	全日本高商陸上競技	京城高商第4位
8・6	野球試合、慶應大学対全京城	京城球場、6-0で慶應の勝ち
8・7	野球試合、関西学院大学対京城電気	京城球場、6-2で京城電気勝つ
8・12	早大野球部朝鮮遠征、朝鮮鉄道、通信局、電気、全京城と対戦	京城球場、(①早大対通信局4-3で早大勝ち②早大対電気7-4早大の勝ち③早大対軍對全京城3-6で早大負け)
9・10	全朝鮮軍対全満州陸上競技大会	大連運動場、西、二百米日本新記録
10・8	全朝鮮軍対関東アマチュア軍対抗拳闘試合	日比谷公会堂、全朝鮮4-1関東軍
10・17	全朝鮮軍対関東学生対抗拳闘試合	日比谷音楽堂、引き分け2-2.5
10・19	全朝鮮軍対全関西軍対抗拳闘試合	孫君、マラソン大記録
11・10	全朝鮮軍対中部日本アマチュア拳闘試合	大阪中央公会堂、3対1で朝鮮の勝ち
11・13	全朝鮮軍対中部日本スキー選手権朝鮮予選	名古屋市公会堂、3対2で朝鮮の勝ち
11・1	朝鮮鉄道局対聖ポールクラブラグビー試合	池袋立教球場、朝鮮鉄道局勝利
1934・1・13	早大水上ホッケーチーム遠征、早大対京城師範	漢江スケートリンク、京城師範勝利
1934・1・13	朝鮮蹴球団遠征、慶大、農大と対戦	日比谷公会堂、引き分け2.5
2・5	朝鮮蹴球団対慶大蹴球戦	日比谷音楽堂、引き分け2.5
2・5	朝鮮蹴球団遠征、慶大、農大と対戦	日比谷公会堂、引き分け2.5
2・5	朝鮮蹴球団遠征、慶大、農大と対戦	日比谷音楽堂、引き分け2.5
3・25	全関東学生卓球軍対京城学生軍	元山郊外新豊里スキー場
3・26	全関東学生対全平壌卓球試合	李君五百米へ3着
7・10	早大野球部一軍満鮮遠征	明治神宮競技場
7・10	京城フル競技会	神宮球技場、朝鮮蹴球団勝利
7・8	早大野球部遠征、京城通信、全鉄道と対戦	漢江スケートリンク、京城師範勝利
8・26	第20回全日本中等学校陸上対抗選手権大会	日比谷新音楽堂
9・17	内地女流泳選手歓迎競技会	日比谷音楽堂、梁道允が小林一大丈夫に勝利、その他日本側の勝ち
9・30	日米国際競技競技会	日比谷音楽堂、梁道允が小林一大丈夫に勝利、その他日本側の勝ち
10・17	第16回関東学生陸上競技選手権大会	京城運動場
10・21	ラグビーー朝鮮鉄道局関西遠征、朝鮮鉄道局対同志社大学	京城球場、7-4で京城通信に早大勝つ、8-0で全鉄道に早大勝つ
11・19	ラグビーー京都帝國大学対朝鮮鉄道	8-1で関東の勝ち。
12・17	全日本職業拳闘選手権試合	平塙府無監会社楼上、8-0で関東の勝ち
1935・1・1	第8回全日本アマチュア拳闘選手権大会	京城運動場
1・9	全日本中等学校水上大会	京城運動場
1・9	第6回全日本水上選手権大会	京城運動場
1・9	全日本学生卓球連盟満遠征軍対全京城軍	京城運動場、7-4で京城通信に早大勝つ、8-0で全鉄道に早大勝つ
3・31	東京帝大籠球部朝鮮遠征チーム対京城OBバスケットボール大会	京城運動場
4・9	東京帝大対全平壌籠球試合	京城運動場
4・14	全国マラソン・デー京城大会	京城運動場
6・2	全日本蹴球選手権大会、京城対文理大学	京城運動場
6・2	全日本蹴球選手権大会、京城対千葉山	京城運動場
6・2	第1回全日本総合蹴球選手権大会	京城運動場
7・11	朝鮮延禧専門対文理大籠球戦	京城運動場
7・11	陸上競技試合、文理大対全朝鮮	京城運動場
8・4	野球試合、京城対千葉山	京城運動場
8・4	野球試合、横浜高商対朝鮮通信局	京城運動場
8・25	第21回全日本中等学校陸上対抗選手権大会	京城運動場
8・27	剣道大会、早大対全京城軍	京城運動場
8・31	野球試合、川崎コロムビヤが関西大学と朝鮮殖銀と試合	京城運動場
9・16	崇実專蹴球部対抗戦（農大、立教大、文理大、早大名チームと対戦）	京城運動場
9・22	第12回全日本中等学校籠球選手権大会	京城運動場

8・4	第1回全日本庭球大会	朝鮮の女子庭球淑明、第5回戦惜敗
7・10	朝鮮代表対日本選抜対抗拳闘試合	京城運動場
7・10	朝鮮拳闘選手歓迎拳闘大会	京城運動場
7・8	朝鮮拳闘選手歓迎競技会	京城運動場
8・26	全関東学生卓球軍対京城学生軍	京城運動場
9・30	全関東学生対全平壌卓球試合	京城運動場
9・30	日米国際競技競技会	京城運動場
10・17	第16回関東学生陸上競技選手権大会	京城運動場
10・21	ラグビーー朝鮮鉄道局関西遠征、朝鮮鉄道局対同志社大学	京城運動場
11・19	ラグビーー京都帝國大学対朝鮮鉄道	京城運動場
12・17	全日本職業拳闘選手権試合	京城運動場
1・1	第8回全日本アマチュア拳闘選手権大会	京城運動場
1・9	全日本中等学校水上大会	京城運動場
1・9	第6回全日本水上選手権大会	京城運動場
1・9	全日本学生卓球連盟満遠征軍対全京城軍	京城運動場
3・31	東京帝大籠球部朝鮮遠征チーム対京城OBバスケットボール大会	京城運動場
4・9	東京帝大対全平壌籠球試合	京城運動場
4・14	全国マラソン・デー京城大会	京城運動場
6・2	全日本蹴球選手権大会、京城対文理大学	京城運動場
6・2	全日本蹴球選手権大会、京城対千葉山	京城運動場
7・11	朝鮮延禧専門対文理大籠球戦	京城運動場
7・11	陸上競技試合、文理大対全朝鮮	京城運動場
8・4	野球試合、横浜高商対朝鮮通信局	京城運動場
8・4	野球試合、第21回全日本中等学校陸上対抗選手権大会	京城運動場
8・25	剣道大会、早大対全京城軍	京城運動場
8・27	野球試合、崇実專蹴球部対抗戦（農大、立教大、文理大、早大名チームと対戦）	京城運動場
8・31	野球試合、川崎コロムビヤが関西大学と朝鮮殖銀と試合	京城運動場
9・16	崇実專蹴球部対抗戦（農大、立教大、文理大、早大名チームと対戦）	京城運動場
9・22	第12回全日本中等学校籠球選手権大会	京城運動場

1935・9・29	全日本陸上朝鮮予選 軟球ニアス府県対抗試合	孫君がマラソン1着
11・2	神宮競技場マラソン大会 全日本軟式庭球選手権大会	陸軍戸山学校コート、朝鮮優勝
11・3	全日本職業拳闘戦	朝鮮代表孫君優勝
11・4	第14回高専蹴球大会	陸軍戸山学校コート、朝鮮組(熊野・御堂・権)優勝
11・5	第6回全日本等学校水上選手権大会	京醫優勝
1936・1・6	全日本籠球総合選手権大会、延禧対早大 第16回全日本男子籠球総合選手権大会決勝戦、全延禧対京都帝大	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1936・1・8	第11回全国学生水上競技選手権大会	神宮コート、延禧勝利
1936・1・11	第7回全日本水上選手権大会	朝鮮代表設コート、42-22で全延禧の勝ち、優勝
1936・1・13	第1回満朝対抗水上競技大会 全日本学生連盟軍招聘卓球対抗戦	五百米で崔君が1着
1937・1・13	早大スケート部朝満遠征軍对全朝鮮軍 第8回全日本水上選手権大会	五百米で崔龍振優勝
1937・1・13	全日本水上選手権、朝鮮鉄道对立教大 第2回全日本籠球選手権大会	漢江スケートリンク、スピードスケート、アイスホッケー種目で満州勝利
1937・1・13	全日本中等庭球戦 第23回全日本陸上競技選手権大会	種目で満州勝利
1937・1・13	関東学生軍対全京城軍相撲大会 第22回全日本中等学校陸上対抗選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1937・1・13	早大ラグビー部満朝遠征、早大対朝鮮鉄道 第13回全日本中等学校籠球選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1937・1・13	朝鮮・滿州相撲巡業 ベルリンオリンピックマラソン	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1937・1・13	第2回東西対抗排球大会、日大対鮮鉄 第19回全国中等学校ラグビー大会、培材高晋(朝鮮代表)対台北一中(台)	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1937・1・13	浜松町恩賜庭園コート、2-1で日大的勝ち 甲子園南運動場、9-8で培材勝つ、優勝	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1937・1・13	早大対全朝鮮スピードスケート競技会 濱(代表)	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第2回全日本中等学校優勝排球戦 全日本中等学校籠球選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	全日本男子中等学校府県対抗軟式庭球 明治神宮体育大会ニアス競技	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	神宮選手権蹴球準決勝、清津対関東代表 第2回全日本重量挙競技選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第20回全国中等学校ラグビー大会、養正高晋対秋田工業 第17回全日本男子総合籠球選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	朝日新聞後援東大対京城帝大定期ホッケー試合 全日本水上競技大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第9回全日本水上競技大会 朝人軍、阪急帶同朝鮮遠征、巨人対阪急	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第8回学生卓球選手権大会 第2回帝都一般市民重量挙選手権大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第4回全日本蹴球選手権大会 第2回全日本高等卓球大会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	早大対全朝鮮水上競技会 タイガース名古屋遠征、タイガース対名古屋	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
1938・1・5	第24回全日本中等学校陸上対抗選手権大会 朝鮮学生対関西学生陸上競技会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
8・10	都市対抗野球、京城対八幡 朝鮮学生対関西学生陸上競技会	日光、朝鮮軍が内地を圧倒
8・10	8・7	8・7

1938・8・5	1211	第三回伊勢神宮奉納庭球大会
1939・1・18	10・16	京大對朝鮮鐵道局ラグビー試合
1939・2・7	11・24	第24回全日本陸上競技選手権大会
1939・7・1	12・25	第11回全日本アマチュア拳闘選手権大会
1939・7・1	12・29	3地域対抗蹴球、朝鮮対関西
1939・8・20	12・29	第8回全日本中等学校水上選手権大会
1940・1・8	10・22	内地学生対全朝鮮対抗自転車競技会
1940・1・8	10・22	早大朝鮮遠征蹴球試合、早大クラブ対全延禧
1940・1・8	10・22	野球試合、庄内村駒対朝鮮京城
1940・1・8	10・22	第4回全日本学生馬術選抜軍対全朝鮮馬術軍定期馬術、京城乗馬俱楽部対全日本学生選抜
1940・1・19	10・27	第4回全日本学生軟式庭球選手権大会
1940・1・19	10・27	全日本一般男子軟式庭球選手権大会
1940・1・19	10・27	明治神宮国民体育大会自転車競技府県対抗選手権大会
1940・1・19	10・27	朝鮮鉄道対同志社大ラグビー試合
1940・1・19	10・27	第10回明治神宮国民体育大会蹴球試合、威興対慶応
1940・1・19	10・27	朝鮮スパルタ
1940・1・19	10・27	第10回明治神宮国民体育大会バスケットボール大会、関東州クラブ対全日本水上選手権大会
1940・1・19	10・27	第11回全日本水上選手権大会
1940・1・19	10・27	第11回全日本水上選手権大会
1940・1・19	10・27	第6回全日本蹴球選手権大会、全普成対全広島
1940・1・19	10・27	第6回全日本蹴球選手権大会
1940・1・19	10・27	早慶ハンドボール部両大学常同朝鮮遠征
1940・1・19	10・27	第10回全日本学生卓球選手権大会
1940・1・19	10・27	柔道試合、朝鮮中央キリスト教青年会对明大
1940・1・19	10・27	第11回明治神宮体育大会男子中等府県対抗決勝バスケットボール大会
1940・1・19	10・27	会、朝鮮平壤三中対新潟師範
1940・1・19	10・27	ラグビー試合、同志社大対朝鮮鉄道
1940・1・19	10・27	3地域対抗蹴球、朝鮮対関東及び関西
1940・1・19	10・27	相撲朝鮮巡業
1940・1・19	10・27	第2回3地域対抗蹴球、朝鮮対関東
1940・1・19	10・27	第2回3地域対抗蹴球、朝鮮対関西
1940・1・19	10・27	朝鉄対早大ラグビー戦
1940・1・19	10・27	第14回日本オーブン選手権、ゴルフ
1940・1・19	10・27	相撲朝鮮巡業
1940・1・19	10・27	相撲朝鮮巡業
1940・1・19	10・27	世界サッカー極東予選、日本対韓国
1940・1・19	10・27	世界サッカー極東予選、日本対韓国
1940・1・19	10・27	朝日マラソン（金栗賞）
1940・1・19	10・27	朝日マラソン、韓国チーム自由参加
1940・1・19	10・27	全日本ミドル級、辰巳八郎対康世哲
1940・1・19	10・27	第2回アジア軟式テニス選手権大会団体、日本対韓国
1940・1・19	10・27	マラヤ独立記念サッカー予選、日本対韓国
1940・1・19	10・27	ローマ五輪サッカー予選、日本対韓国
1940・1・19	10・27	一杯東洋ゾーンテニス試合、日本対韓国
1940・1・19	10・27	世界サッカー・アジア予選、日本対韓国
1940・1・19	10・27	サッカー練習試合、日本対韓国学生選抜軍
11・26	11・26	日韓親善高校野球、京東対鎮四

1938・8・5	1211	宇治山田神宮皇學館コート、一般の部及び中等の部で 朝鮮チーム優勝
1939・9・24	10・16	走幅跳で金源権2位 7m47cm 花園ラグビー場、23-23で引き分け
1939・11・25	10・16	京大對朝鮮鐵道局ラグビー試合 内鮮満交換水上戦、朝鮮、滿州、内地
1939・12・23	11・25	第1回全日本アマチュア拳闘選手権大会 第8回全国都市対抗卓球大会
1940・1・29	12・23	3地域対抗蹴球、朝鮮対関西 内地学生対全朝鮮対抗自転車競技会
1940・2・7	12・23	第10回全日本水上選手権大会 内地学生対全朝鮮対抗自転車競技会
1940・7・1	12・23	早大朝鮮遠征蹴球試合、早大クラブ対全延禧 早大朝鮮遠征蹴球試合、早大クラブ対全延禧
1940・8・6	12・23	野球試合、庄内村駒対朝鮮京城 野球試合、庄内村駒対朝鮮京城
1940・8・20	12・23	第4回全日本学生馬術選抜軍対全朝鮮馬術軍定期馬術、京城乗馬俱楽部 部対全日本学生選抜
1940・9・20	12・23	第4回全日本学生軟式庭球選手権大会 部対全日本学生選抜
1940・9・27	12・23	第6回全日本蹴球選手権大会、全普成対全広島 第6回全日本蹴球選手権大会
1940・10・17	12・23	明治神宮国民体育大会自転車競技府県対抗選手権大会 明治神宮国民体育大会自転車競技府県対抗選手権大会
1940・10・29	12・23	ラグビー試合、朝鮮鉄道対新鈴土崎工場 ラグビー試合、朝鮮鉄道対新鈴土崎工場
1940・11・1	12・23	朝鮮鉄道対同志社大ラグビー試合 朝鮮鉄道対同志社大ラグビー試合
1940・11・1	12・23	第10回明治神宮国民体育大会蹴球試合、威興対慶応 第10回明治神宮国民体育大会蹴球試合、威興対慶応
1940・11・1	12・23	朝鮮スパルタ 朝鮮スパルタ
1940・11・1	12・23	第10回明治神宮国民体育大会バスケットボール大会、関東州クラブ対全日本水上選手権大会 第10回明治神宮国民体育大会バスケットボール大会、関東州クラブ対全日本水上選手権大会
1940・11・1	12・23	第11回全日本水上選手権大会 第11回全日本水上選手権大会
1940・11・1	12・23	第6回全日本蹴球選手権大会、全普成対全広島 第6回全日本蹴球選手権大会
1940・11・1	12・23	全日本一般男子軟式庭球選手権大会 全日本一般男子軟式庭球選手権大会
1940・11・1	12・23	明治神宮国民体育大会自転車競技府県対抗選手権大会 明治神宮国民体育大会自転車競技府県対抗選手権大会
1940・11・1	12・23	朝鮮中央Y.M.対日大柔道対抗戦 朝鮮中央Y.M.対日大柔道対抗戦
1940・11・1	12・23	柔道試合、朝鮮中央キリスト教青年会对明大 柔道試合、朝鮮中央キリスト教青年会对明大
1940・11・1	12・23	第11回明治神宮体育大会男子中等府県対抗決勝バスケットボール大会 第11回明治神宮体育大会男子中等府県対抗決勝バスケットボール大会
1940・11・1	12・23	会、朝鮮平壤三中対新潟師範 会、朝鮮平壤三中対新潟師範
1940・11・1	12・23	ラグビー試合、同志社大対朝鮮鉄道 ラグビー試合、同志社大対朝鮮鉄道
1940・11・1	12・23	3地域対抗蹴球、朝鮮対関東及び関西 3地域対抗蹴球、朝鮮対関東及び関西
1940・11・1	12・23	相撲朝鮮巡業 相撲朝鮮巡業
1940・11・1	12・23	第2回3地域対抗蹴球、朝鮮対関東 第2回3地域対抗蹴球、朝鮮対関西
1940・11・1	12・23	朝鉄対早大ラグビー戦 朝鉄対早大ラグビー戦
1940・11・1	12・23	第14回日本オーブン選手権、ゴルフ 第14回日本オーブン選手権、ゴルフ
1940・11・1	12・23	相撲朝鮮巡業 相撲朝鮮巡業
1940・11・1	12・23	世界サッカー極東予選、日本対韓国 世界サッカー極東予選、日本対韓国
1940・11・1	12・23	世界サッカー極東予選、日本対韓国 世界サッカー極東予選、日本対韓国
1940・11・1	12・23	朝日マラソン（金栗賞） 朝日マラソン（金栗賞）
1940・11・1	12・23	朝日マラソン、韓国チーム自由参加 朝日マラソン、韓国チーム自由参加
1940・11・1	12・23	全日本ミドル級、辰巳八郎対康世哲 全日本ミドル級、辰巳八郎対康世哲
1940・11・1	12・23	第2回アジア軟式テニス選手権大会団体、日本対韓国 第2回アジア軟式テニス選手権大会団体、日本対韓国
1940・11・1	12・23	マラヤ独立記念サッカー予選、日本対韓国 マラヤ独立記念サッカー予選、日本対韓国
1940・11・1	12・23	ローマ五輪サッカー予選、日本対韓国 ローマ五輪サッカー予選、日本対韓国
1940・11・1	12・23	一杯東洋ゾーンテニス試合、日本対韓国 一杯東洋ゾーンテニス試合、日本対韓国
1940・11・1	12・23	世界サッカー・アジア予選、日本対韓国 世界サッカー・アジア予選、日本対韓国
1940・11・7	12・23	サッカー練習試合、日本対韓国学生選抜軍 サッカー練習試合、日本対韓国学生選抜軍
1940・11・7	12・23	熊本市水前寺球場、0-2で京東の勝ち 熊本市水前寺球場、0-2で京東の勝ち

1963・2・19	韓日親善打球	日韓大學親善サッカー、高麗大遠征、立大・慶大・中大・明大・早大と対戦
3・1	韓国学生（男子）ハンドボール部来日試合	ソウル、日本に勝利
4・7	デ杯東洋ソーンテニス大会 日本対韓国	福岡、5-0で日本の勝ち
4・20	ノン・タイトル10回戦ボクシング、高山対徐	ソウル、高山判定勝ち
4・20	プロボクシング	大阪、林基在・野次村に判定勝
5・11	ノン・タイトル10回戦ボクシング、高山対梁	ソウル、高山判定勝ち
5・20	東レ野球韓国遠征	ソウル、6勝1敗1分け
5・21	韓国遠征バドミントン、札幌・北斗高対韓国女子選抜、関大対韓国郵便局、日本教員対韓国郵便局	ソウル、いざれも日本の勝ち
6・7	韓日親善マッチ	ソウル、日本、2連勝
7・7	日本遠征高校籠球	東京、進明6勝1敗
8・21	日本高校選抜バレー・ボーリル韓国遠征、日本対韓国	釜山、男女とも日本の勝ち
8・27	日本高校選抜バレー・ボーリル韓国遠征、日本男子対仁川高	ソウル、ともに3-0で日本の勝ち
8・29	日本女子対貞和女商	ソウル、ともに3-0で日本の勝ち
農大水球部韓国遠征	農大水球部韓国遠征	ソウル、11-7で農大の勝ち
8・29	日本女子選抜バレー・ボーリル韓国遠征、日本選抜男子対仁川高	ソウル、ともに日本の勝ち
8・30	日本高校選抜バレー・ボーリル韓國遠征、日本男子対東草高	春川、日男女、8連勝
8・31	韓日親善高校排球	ソウル、ともに3-0で日本の勝ち
8・31	日本女子対康州高	ソウル、男子0-3で負け、女子3-1で勝ち
8・31	日本高校選抜バレー・ボーリル韓國遠征、日本男子対仁川高	ソウル、男子0-3で負け、女子3-1で勝ち
8・31	日本女子対梨華女高	群山、群山高、日本チームに勝つ
8・31	韓日男女高校籠球	ソウル、慶應3戦3勝
9・1	韓日親善水球戦	ソウル、祥明女高大勝
9・5	韓日男女高校籠球	ソウル、日本チームに勝つ
9・8	韓日男女高校籠球	ソウル、日本チーム連敗
9・24	韓国銀行来日バスケットボール試合、リッカーチ・韓国銀行	神田国民体育館、62-53でリッカーチの勝ち
9・26	第5回アジア野球選手権、日本対韓国	ソウル、5-2で韓国の勝ち
日本遠征籠球	東京、韓銀チーム勝利	高麗大4勝1敗

12・2	朝日国際マラソン	籠球日本遠征	2・28	ノン・タイトル10回戦ボクシング、矢尾板貞雄対鄭國勉	商業銀行	8戦8勝	後楽園ジム						
11・15	韓日親善レスリング	日韓親善ボクシング、リー・ヤンジャイ対川村忠夫、カン・ハンス一対山田八郎	3・19	カン・ハンス一対山田八郎	ソウル、川村とカンの勝ち	ソウル、日本チーム勝利	ソウル、日本チーム勝利						
11・11	関学韓国遠征、関学対韓国陸軍	アジアユースサッカー、日本対韓国学生選抜軍	4・13	アジアユースサッカー、日本対韓国学生選抜軍	バンコク、1-1で引き分け	ソウル、日本チーム勝利	ソウル、日本チーム勝利						
9・16	韓國遠征野球、大阪高校選抜対ソウル選抜	籠球韓日親善交歓試合	4・29	籠球韓日親善交歓試合	ソウル、日本チーム勝利	ソウル、日本チーム勝利	ソウル、日本チーム勝利						
9・30	日韓親善野球、①東映対全ソウル②国鉄対東映	早大ア式蹴球韓国遠征	5・1	早大ア式蹴球韓国遠征	ソウル、2-2で高麗大に引き分け、3-0で慶熙大に負けた	ソウル、2-2で高麗大に引き分け、3-0で慶熙大に負けた	ソウル、2-2で高麗大に引き分け、3-0で慶熙大に負けた						
7・12	早大ア式蹴球韓国遠征	籠球韓日親善交歓試合	5・5	籠球韓日親善交歓試合	ソウル、内川選手3位	ソウル、内川選手3位	ソウル、内川選手3位						
7・2	日本遠征籠球	日本大男子ハンドボール部韓国遠征	6・12	世界サッカー部遠征、高麗大と慶熙大と対戦	東京、農協籠球団、7戦7勝	台北、0-2で日本の勝ち	台北、0-2で日本の勝ち						
6・4	天理大ホッケー遠征、天理大対海東チーム	日本遠征籠球	6・19	日本遠征籠球	ソウル、日本チーム敗北	ソウル、日本チーム敗北	ソウル、日本チーム敗北						
7・12	日本遠征籠球	韓日親善排球	10・1	日本大男子ハンドボール部韓国遠征	ソウル、引き分け	ソウル、2-1で天理大の勝ち	ソウル、2-1で天理大の勝ち						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	日韓親善野球	11・10	日韓親善野球	大阪、京福、進明快勝	ソウル、大阪チーム1勝1敗	ソウル、大阪チーム1勝1敗						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	11・11	韓國遠征選抜高校野球	ソウル、4-1で大阪の勝ち	ソウル、4-1で大阪の勝ち	ソウル、4-1で大阪の勝ち						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	22・14	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	ソウル、釜山、早大4勝2敗	ソウル、釜山、早大4勝2敗	ソウル、釜山、早大4勝2敗						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	9・16	韓國遠征選抜高校野球	ソウル、大阪チーム1勝1敗	ソウル、大阪チーム1勝1敗	ソウル、大阪チーム1勝1敗						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	9・30	韓國遠征野球、大阪高校選抜対ソウル選抜	ソウル、3-1で関学の勝ち	ソウル、3-1で関学の勝ち	ソウル、3-1で関学の勝ち						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	11・11	韓國遠征野球、大阪高校選抜対ソウル選抜	ソウル、日本3戦3勝	ソウル、日本3戦3勝	ソウル、日本3戦3勝						
7・12	早大サッカー部韓国遠征、延世大、慶熙大、韓海軍兵学校、釜山大、忠南大、高麗大と対戦	韓國遠征選抜高校野球	11・11	韓國遠征野球、大阪高校選抜対ソウル選抜	福岡、韓国から2選手参加（キム・ウン・ブム、チエ・チュン・クン）	福岡、韓国から2選手参加（キム・ウン・ブム、チエ・チュン・クン）	福岡、韓国から2選手参加（キム・ウン・ブム、チエ・チュン・クン）						

1963・11・2	韓国大洋野球遠征、大洋対韓国
1964・12・5	韓口籠球戦
1964・12・5	プロボクシング
1964・12・5	韓日親善籠球
1964・12・5	アジアユースサッカー、日本対韓国
1964・12・5	韓日親善排球
1964・12・5	男子遠征バレーボール、日本対韓国
1964・12・5	朝日国際マラソン
1965・1・23	韓日親善籠球（二チボー平野女子バスケットボールチーム）
1965・1・23	ケットボール協会の招きで韓国訪問。韓国電力、ソウル銀行、朝興銀
1965・1・23	行韓国銀行、第一銀行、韓一銀行と試合
1965・1・23	韓國ラグビー遠征
1965・1・23	保善高対漢城高
1965・1・23	慶大サッカー部遠征、韓国大、京畿大と対戦
1965・1・23	韓国遠征バスケットボール、全延世大日本遠征、松下電器、住友金属
1965・1・23	立大、日鉄、明大、日本钢管、八幡製鉄と試合
1965・1・23	早大サッカー部遠征、早大対延世大
1965・1・23	東京オリンピックボクシングバンタム級決勝、桜井対チヨン
1965・1・23	韓日籠球戦
1965・1・23	デ杯東洋ゾーンテニス大会、日本対韓国
1965・1・23	プロボクシング
1965・1・23	日韓親善バスケットボール、韓国城東体育館チーム対日本東京学生チーム
1965・1・23	日本鉱業韓国遠征、日本鉱業対韓国空軍
1965・1・23	日本高校バスケット、日本対韓国
1965・1・23	日韓親善高校籠球
1965・1・23	慶大サッカー部遠征、慶大対韓国大
1965・1・23	慶大野球部韓国遠征
1965・1・23	慶大サッカー部遠征、慶大対韓国大
1965・1・23	富士フィルム女子バレーボールチーム韓国遠征
1965・1・23	第6回アジア野球選手権、日本対韓国
1966・1・26	日韓親善サッカー、高麗大日本遠征、大阪スポーツマン俱楽部、ヤンマー、日立本社、古川電工ほかと試合
1966・1・26	韓国遠征サッカー、八幡製鉄対大韓重石
1966・1・26	日韓親善ハーネーボール、関大対京幾大
1966・1・26	東洋ハンタム級選手権ボクシング、青木勝利対李元錫
1966・1・26	三国対抗サッカー、韓国対日本
1966・1・26	日韓親善サッカー、延世大日本遠征、早大、慶大、立大ほかと対戦
1966・1・26	近畿大学野球チーム韓国遠征、近大対延世大
1966・1・26	プロボクシング、石山六郎対張定煥戦
1966・1・26	近大対中小企業銀行
1966・1・26	大韓国体育会、日韓スポーツ交流を中止することを正式発表
1966・1・26	韓日親善柔道
1966・1・26	九州高校選抜柔道チーム韓国遠征、日本対仁川松都高校
1966・1・26	中大ハーネーボール遠征、中大対韓国国防軍
1966・1・26	韓国陸上、第5回アジア競技大会に向け織田氏らをコーチに招聘
1966・1・26	第3回ソウル国際マラソン
1967・1・5	高麗大・延世大・連合ラグビー選抜チーム来日、福岡県大学選抜、全立
1967・1・5	東洋ノフエザーリードアジア大会柔道、軽重量級決勝二宮対金、重量級決
1967・1・5	東西村対鄭
1967・1・5	ユーバーシアードアジア大会柔道団体戦、日本対韓国決勝
1967・1・5	東洋ハンタム級タイトルマッチボクシング、李元錫対中根義雄
1967・1・5	サンカーメキシコ五輪予選、日本対韓国
1967・1・5	ノンタイトル10回戦ボクシング、東海林博対康富英
11・10・5 30	韓日親善排球

1963・11・2	ソウル、0-2で大洋の勝ち
1964・12・5	東京、関東チームと引き分け
1964・12・5	東京、金基洙 日本の斎藤にKO勝ち
1964・12・5	ソウル、企銀チーム惜敗
1964・12・5	サイゴン、1-0で韓国の勝ち
1964・12・5	ソウル、日本チーム圧勝
1964・12・5	ソウル、3-2で日本の勝ち
1965・1・23	ソウル、二チボー平野5勝1敗
1965・1・23	ソウル、韓国大4-0で慶大の負け
1965・1・23	ソウル市立体育馆、10-2で二チボーの勝ち
1965・1・23	後乐园 桜井の勝ち
1965・1・23	ソウル、11-5で保善の勝ち
1965・1・23	福岡、李選手参加
1965・1・23	ソウル、二チボー平野5勝2敗
1965・1・23	ソウル、4-0で早大負け
1965・1・23	ソウルスタジアム、5-0で日本の勝ち
1965・1・23	ソウル、金基洙、海津に選手権防御
1965・1・23	後乐园ホール、6-3で韓国の勝ち
1965・1・23	ソウル、79-71で日本鉱業の勝ち
1965・1・23	ソウル、日本高校敗北
1965・1・23	ソウル、日本鉱業、海兵隊撃破
1965・1・23	ソウルほか、慶大6勝2分け
1965・1・23	ソウル、女子勝ち、男子敗る
1965・1・23	ソウル、日本高校敗北
1965・1・23	ソウルほか、慶大6勝2分け
1965・1・23	ソウル、日本高校敗北
1965・1・23	ソウル、1-0で慶応の負け
1965・1・23	ソウル、大田、富士フィルム7勝1敗
12・12	マニラ、7-0で日本の勝ち
12・12	第6回アジア野球選手権、日本対韓国

1968・3・27	3・31	第1回日韓親善サッカー、高麗大日本遠征、ヤンマー、慶大、早大と 対戦	西宮、横浜、高麗大2勝1敗
1969・1・12	4・7	日韓親善ボクシング対抗第一戦、韓国対日本	後楽園ホール、5-3で韓国の勝ち
1969・1・12	6・12	韓日女子親善籠球	ソウル、漢陽、日本大に勝利
1969・1・12	8・3	韓日親善水球大会	ソウル、日本に敗北
1969・2・13	8・13	日韓高校交歓スポーツ大会、バスケットボール、ハンドボール、バレー vs 1513	ソウル、日本陸上14種目で勝つ
1969・3・16	9・7	ボール、ハンドボール、軟式野球、陸上競技、サッカー	ソウル、李元錫 清水に6回KO勝ち
1969・3・16	10・5	プロボクシング	ソウル、李元錫 清水に6回KO勝ち
1969・3・16	10・29	韓日大学親善水球	ソウル、法政大4連勝
1969・3・16	10・29	韓日親善籠球	日本チーム、5勝2敗
1969・4・26	4・26	韓日親善アマボクシング	ソウル、日本大勝利
1969・5・3	5・3	プロボクシング	任炳模 開に判定勝ち
1969・5・4	5・4	日本遠征籠球	長崎、大阪、京都、高麗大、2勝1敗
1969・5・11	5・11	ノンタイトルマッチボクシング、溝口対李	ソウル、溝口のTKO勝ち
1969・6・29	6・29	東アジア実業団選抜バスケット、二チボ一対朝興銀行	代々木体育館、68-66で二チボーの勝ち
1969・8・23	8・23	韓日親善排球	光州 (保安司) 日ジユニアに勝利
1969・9・10	9・10	日本安城大招聘競技	安城大、明知大に辛勝
1969・9・25	9・25	ノンタイトル10回戦ボクシング、藤猛対任	静岡市駿府会館、引き分け
1969・9・27	9・27	プロボクシング	崔成甲 江藤に判定勝ち
1969・10・9	10・9	東洋タイトルマッチ12回戦ボクシング、岡田対梁	栃木県宇都宮市県立体育館、梁に判定勝ち
1970・1・18	1・18	日本遠征籠球	延世大が立教大を破り
1970・2・1	2・1	日韓親善サッカー、韓國銀行リーグ選抜チーム対古河電工	横浜三ツ沢競技場、0-0で引き分け
1970・2・19	2・19	プロボクシング	趙相用選手 盛岡にKO負け
1970・3・15	3・15	東洋タイトルマッチ12回戦ボクシング、ジャガー・柿沢対趙永皓	後楽園ホール、趙のKO勝ち
1970・3・29	3・29	蹴球親善試合	京都 高麗大蹴球 関西学生選抜に勝利
1970・4・14	4・14	プロボクシング	ソウル、辛春教 阿蘇に判定勝ち
1970・4・18	4・18	プロボクシング	ソウル、趙永皓 小川に判定勝ち
1970・5・19	5・19	プロボクシング	ソウル、曹東基 内田に判定勝ち

1974・9・22	9・28	日韓親善サッカー、日本対韓国 日韓親善サッカー、韓国大学選抜対日本大学選抜	プロ・ワクシング
1975・3・28	9・28	第3回韓日蹴球定期戦 韓日親善少年蹴球	日本で韓国の勝ち
8・12	6・17	早大招聘親善競技、サッカー 第11回ノルマジア野球選手権、日本対韓国	4-1で韓国の勝ち
6・25	6・25	韓日親善蹴球	東京、韓国 日本に惨敗
8・23	8・23	韓日親善蹴球	韓国勝利
8・30	8・30	日本遠征蹴球	ソウル、柳濟斗 輪島にKO勝ち
9・3	9・3	第2回韓日実業蹴球定期戦 日韓定期サッカー、浦項対三菱重工	ソウル、延世大、早大に勝利
9・5	9・5	第4回日韓定期サッカー、日本対韓国	ソウル、0-4で韓国の勝ち
9・8	9・8	日本遠征親善籠球	大邱、浦項製鉄が新日本製鉄に逆転勝ち
9・23	9・23	韓日親善サッカー	延世大、慶大に勝利
9・28	9・28	習志野高校野球韓国遠征、習志野高対慶南	東京、浦項がヤンマーに勝利
10・4	10・4	NHK国際大会ハーレーボール、新日鉄対韓国	国立競技場、4-2で浦項の勝ち
1976・6・17	9・17	日本遠征親善籠球	ソウル、日本対韓国3-0で韓国の勝ち
8・12	8・12	韓日本大学親善籠球	日本大学選抜対韓国大学選抜引き分け
11・24	11・24	プロボクシング	春川、日本2連勝
12・4	12・4	日韓定期サッカー、日本対韓国	ソウル、3-2で習志野高の勝ち、通算2勝1分け
12・4	12・4	韓日本大学親善籠球	東京体育館 3-0で新日鉄の勝ち
12・26	12・26	訪日親善籠球	大阪 漢陽大3勝
1977・3・18	1977・3・18	日本遠征女子排球	ソウル 延世大 法政大に勝利
3・25	3・25	日韓親善女子バレー・ボール、日本選抜対韓国	ソウル、廉東均 小林に判定勝ち
4・13	4・13	日本遠征親善籠球	國立競技場、2-1で韓国勝ち
5・28	5・28	日韓定期サッカー、古河電工対浦項総合製鉄	ソウル、漢陽大、同志社大に勝利
5・29	5・29	日韓定期サッカー、日本リーグジュニア選抜対浦項総合製鉄	東京、延世大、2勝2敗
6・16	6・16	日韓定期サッカー、日本対韓国	東京、韓国、日本に敗北
6・30	6・30	韓日親善女子籠球	日立体育馆、3-1で日本選抜の勝ち
韓日蹴球親善戦		東京、高麗大、日本大に勝利	東京、高麗大、日本大に勝利
釜山		國立競技場、0-0で引き分け	國立競技場、0-0で引き分け
釜山		京都西京極競技場、1-0で浦項の勝ち	ソウル、2-1で韓国勝ち
釜山		日本チーム6連敗	日本チーム6連敗

1977・11・29	韓日親善交歓柔道 プロボクシング	韓国柔道、日本に敗北
1978・12・8	韓日親善水球 世界ジュニアフェザー級タイトルマッチ15回戦ボクシング、洪秀煥対 笠原優	大阪、楊弘洙、高田に判定勝ち
1978・12・12	世界ジュニアフェザー級タイトルマッチ15回戦ボクシング、洪秀煥対 韓日高校テニス	高麗大、明治大に勝利
1979・3・4	日本遠征籠球 韓日高校テニス	韓国女高子ーム勝利
1979・3・4	韓日親善水球 韓日高校排球	静岡、龍山中、誠信女中3連勝
1980・3・4	世界ジュニアミドル級タイトルマッチ15回戦ボクシング、工藤政志対 朱虎	仁昌、日選抜に勝利
1980・3・4	早大ラグビー部韓国遠征、高麗大、延世大と試合	早大1勝2敗
1980・3・4	朝鮮海峡横断水泳 韓日高校陸上	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1980・3・4	第14回福岡国際マラソン プロボクシング	福岡、北朝鮮4選手来日
1980・3・4	世界アマ野球選手権、日本対韓国	朝鮮海峡、アジア大会金メダリスト趙五連（高麗大学4年）
1980・3・4	韓日親善排球 韓日高校陸上	東京西が丘サッカーフィールド、1-0で三菱重工の勝ち
1981・4・2	韓日高校籠球 第4回李相伯杯韓日大学籠球	東京西が丘サッカーフィールド、2-0で日本の勝ち
1981・4・2	日韓定期サッカー、ヤンマー対大宇蹴球団 韓日大学親善籠球	ソウル、黃忠載、堀口にKO勝ち
1981・4・2	韓日親善蹴球 韓日大学親善蹴球	ソウル、4-1で韓国の勝ち
1981・4・2	世界フライ級タイトル戦、大熊正二対朴贊希 日本遠征女子籠球	ソウル、韓国、日本に敗北
1981・4・2	第8回日韓定期サッカー、日本対韓国	早大0勝2敗
1981・4・2	韓日男子排球定期戦 プロボクシング	早大0勝2敗
1982・1・30	韓国マラソン四選手、日本で強化合宿 第10回日韓定期サッカー、日本対韓国	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	日本・韓国ジュニア交流ラグビー競技会、大工大高対仁川機工高 NHK杯男子バレーボール、日本対韓国	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	日本・韓国女子、日本に敗北 伊勢、韓国男子、日本に負け	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	ソウル、吳民根、伊藤に判定勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	日本、1982/1/30から2月末まで ソウル、3-0で日本に勝つ	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	ソウル、日本大、国民大に勝利 ソウル、日博多1勝1敗	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	ソウル、東国大、関西大に勝利 ソウル、東国大、関西大に勝利	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	大阪、韓国女子、日本に敗北 伊勢、韓国男子、日本に負け	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	ソウル、韓国、日本に敗北 ソウル、韓国、日本に敗北	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	ソウル、金井豊1万メートル優勝 東京体育館、3-0で韓国の勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	東京体育館、3-1で韓国の勝ち 神戸、2-0で北朝鮮の勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	神戸、2-0で北朝鮮の勝ち 大阪球場、6-2で日本の勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	釜山 韓国勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	東京、韓国、林殷珠4位 東京、韓国、林殷珠4位	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	守口市民体育館、六車のTKO負け 守口市民体育館、六車のTKO負け	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	仙台市体育館、3-2で韓国の勝ち 仙台市体育館、3-2で韓国の勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち
1982・1・30	神奈川秋葉台文化体育馆、3-1で日本の勝ち 神奈川秋葉台文化体育馆、3-1で日本の勝ち	大阪府立体育会館、工藤の判定勝ち

1981・4・2	韓日親善水球 世界バーチャードアジア大会サッカー準決勝、日本対北朝鮮	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	東京国際女子マラソン NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	大阪、楊弘洙、高田に判定勝ち
1981・4・2	NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	第2回ワールド・ジュニア・ユース・サッカー選手権、日本対韓国	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	東京国際女子マラソン NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	大阪、楊弘洙、高田に判定勝ち
1981・4・2	世界バーチャードアジア大会サッカー準決勝、日本対北朝鮮	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	東京国際女子マラソン NHK杯女子バレーボール、日本対韓国	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	第12回日韓定期サッカー、日本対韓国	大阪、楊弘洙、高田に判定勝ち
1981・4・2	韓国陸上選手権 正九	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	日本遠征ボクシング、渡嘉敷勝男対張正九	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	浦項市体育館、渡嘉敷KO負け	大阪、楊弘洙、高田に判定勝ち
1981・4・2	ソウル、韓国、日本に敗北	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	ソウル、韓国、日本に敗北	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	ソウル、金井豊1万メートル優勝 東京体育館、3-0で韓国の勝ち	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	東京体育館、3-1で韓国の勝ち 神戸、2-0で北朝鮮の勝ち	韓国柔道、日本に敗北
1981・4・2	神戸、2-0で北朝鮮の勝ち 大阪球場、6-2で日本の勝ち	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	釜山 韓国勝ち	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	東京、韓国、林殷珠4位 東京、韓国、林殷珠4位	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	守口市民体育館、六車のTKO負け 守口市民体育館、六車のTKO負け	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	仙台市体育館、3-2で韓国の勝ち 仙台市体育館、3-2で韓国の勝ち	高麗大、明治大に勝利
1981・4・2	神奈川秋葉台文化体育馆、3-1で日本の勝ち 神奈川秋葉台文化体育馆、3-1で日本の勝ち	高麗大、明治大に勝利

1988・8・30	三国親善高校野球、日本対韓国	大阪球場、日本優勝
1989・10・26	第13回日韓定期サッカー、日本対韓国	国立競技場、1-0で韓国の勝ち
1989・11・30	第19回日本青少年陸上大会	東京・韓林優勝
1989・12・30	第14回日韓定期サッカー、日本対韓国	東大門運動場、1-0で韓国の勝ち
1990・1・26	W杯サッカーアジア予選、日本対北朝鮮	国立競技場、2-1で日本の勝ち
1990・2・26	W杯サッカーアジア予選、日本対北朝鮮	ヤンガクド競技場、2-0で北朝鮮の勝ち
1990・3・24	日韓ジュニア交流競技会、テニス試合	
1990・9・3	日韓米高校野球	
1991・8・28	第5回アジア選手権バレーボール、日本対韓国	ソウル、日本の1勝2敗1分け
1991・9・1	バレーボールワールドカップ女子大会、日本対韓国	ソウル、3-0で韓国の勝ち
1991・9・3	日韓ジュニア交流競技会、テニス試合	代々木体育館、3-0で日本の勝ち
1991・9・28	日韓ジュニア交流競技会、テニス試合	春川市
1992・4・1	韓国競輪審判研修	愛知・志段味スポーツランド
1992・5・13	2002ワールドカップ日韓共催決定	ソウル、3-0で韓国の勝ち
2001・5・1	日本ホッケー代表チーム韓国遠征	代々木体育館、3-0で日本の勝ち
2001・5・13	日韓ハンドボール代表試合定期戦	春川市
	6試合、日本チーム2分4敗	愛知・志段味スポーツランド

青鶴7

2016年3月14日 発行

発行人 韓昌祐
編集人 芦崎治
事務局 金度亨 清水聖子
発行 (公財)韓昌祐・哲文化財団
〒100-6228 東京都千代田区丸の内1-11-1
パシフィックセンチュリープレイス丸の内31階
電話03-5221-7973
ファクス03-5221-7984
<http://www.hanchangwoo-tetsu.or.jp>
DTP制作 株式会社センターメディア
電子ブック制作 株式会社ページワン

本文の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©2016 HANCHANGWOO-TETSU CALUTURAL FOUNDATION
Printed in Japan

青
鶴
7



公益財團法人 韓昌拓•啓文化財團